

農林・土木事業関係遺跡

発掘調査報告書

1982

山形県教育委員会

かみ の た
上 ノ 田 遺 跡
きた ぎかい がかり
北 境 掛 遺 跡
とよ がかり
樋 大 日 塚 遺 跡
だい にち づか
土 橋 遺 跡
どじ ばし づか

発掘調査報告書

昭和 57 年 3 月
山形県教育委員会

序

本報告書は、山形県教育委員会が山形県農林部および同土木部の委託を受けて昭和52年から54年度に実施した「上ノ田遺跡」ほか4遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

出羽富士「鳥海山」を北に仰ぐ庄内平野は、日本でも屈指の穀倉地帯であり、また長年にわたり人々が生産の向上をめざして農業を営んでこられたところでもあります。昭和40年代の後半から着手された農村基盤総合整備パイロット事業(庄内地区)や県営ほ場整備事業もそのご努力の一環であり、現在この一帯は、三反歩一枚の近代的ほ場として急速に変貌しつつあります。

近年埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは増加の傾向にあります。県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と、県民ひいては国民の遺産である埋蔵文化財の保護行政との間には、数多くの問題をかかえています。今後ともこの間の調整は重要な課題であり、県教育委員会においても鋭意努力を続けてまいる所存であります。

このような意味において、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護普及の一助になれば幸いと存じます。

最後に、調査にあたって多大な御協力をいただいた関係各位に、心から感謝を申し上げます。

昭和57年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹正治

例　　言

- 1 本報告書は、山形県教育委員会が昭和52年度から54年度に実施した農林・土木事業に関連する5遺跡の緊急発掘調査報告書である。上ノ田遺跡・北境遺跡は県営ほ場整備事業（東平田地区）、大日塚・土橋遺跡は同事業（広野地区）に係るもので、北境A・B遺跡では同時に国道345号線道路改良事業も実施された。樋掛遺跡は農村基盤総合整備パイロット事業（庄内地区）に係るものである。
- 2 挿図縮尺は、遺構については1/80・1/120を原則とし、井戸跡・土壤については隨時1/10～1/40を採用した。遺物は土器については1/3を原則とし、その他については各々にスケールを示した。遺物図版の縮尺は不同である。挿図中の遺構の略記号は、S B－建物跡、S K－土壤、S E－井戸跡、S D－溝跡、E B－建物跡を構成する柱穴、E P－その他の柱穴とした。遺構番号は各遺跡毎に検出順に1から始まり、上ノ田遺跡については1次調査を1から500番、2次調査を501番から始まる一連番号とした。出土遺物の挿図における断面は、黒く塗りつぶしてあるものが須恵器を表す。
- 3 調査は山形県教育委員会が主体となり、山形県教育庁文化課の下記職員が担当した。

上ノ田遺跡 1次調査	佐藤庄一・渋谷孝雄・茨木光裕・佐藤正俊
上ノ田遺跡 2次調査	佐藤庄一・名和達朗・佐藤義信
北境A・B遺跡	佐藤庄一・渋谷孝雄・茨木光裕
樋掛遺跡	尾形與典・阿部明彦
大日塚遺跡	佐藤鎮雄・名和達朗
土橋遺跡	佐藤鎮雄・名和達朗
- 4 本報告書の作成にあたっては、山形県教育庁庄内教育事務所埋蔵文化財分室が担当し、佐藤庄一・野尻侃・安部実が分担執筆した。写真図版については安部実が担当し、実測や挿図作成については、石井節・加藤ひとみ・水落みち子がこれを補助した。編集は野尻侃が担当し、全体を佐藤庄一が総括した。
- 5 調査に際しては県農林部・土木部などの関係諸機関、酒田市教育委員会社会教育課の小野忍氏の協力を得た。

目 次

序	
例 言	
I 遺跡の位置と環境	
1 調査に至る経過	1
2 立地と環境	2
II 上ノ田遺跡	
1 調査の概要	4
(1) 調査の経過	4
(2) 遺跡の層序	7
2 発見された遺構	7
(1) 北地区	7
(2) 南地区	20
3 出土遺跡	24
(1) 建物跡・土壤・井戸跡出土の土器	24
(2) S D401大溝出土の土器	42
III 北境遺跡	
1 調査の概要	46
2 出土した遺物	48
IV 楊掛遺跡	
1 調査の概要	50
2 発見された遺構と遺物	50
V 大日塚・土橋遺跡	
1 調査の概要	57
2 発見された遺構と遺物	59
VI ま と め	65

挿図目次

第1図 遺跡位置・分布図	3
第2図 上ノ田遺跡グリッド配置図	5
第3図 上ノ田遺跡土層図	6
第4図 S B100建物跡・S A403掘立柱列	8
第5図 S B400・S B402建物跡	10
第6図 北地区遺構配置図	9
第7図 S B400・418建物跡・S A416掘立柱列	12
第8図 土 壤	14
第9図 S E321井戸跡	16
第10図 S E321井戸枠組	17
第11図 S E285井戸跡	18
第12図 S D401大溝土層図	19
第13図 南地区遺構配置図	21
第14図 S E501井戸跡	22
第15図 上ノ田遺跡 出土土器	27
第16図 上ノ田遺跡 出土土器	28
第17図 上ノ田遺跡 出土土器	29
第18図 上ノ田遺跡 出土土器・土製品	30
第19図 S D401大溝 出土土器	34
第20図 S D401大溝 出土土器	35
第21図 S D401大溝 出土土器	36
第22図 S D401大溝 出土土器	37
第23図 S D401大溝 出土土器	38
第24図 S D401大溝 出土土器	39
第25図 S D401大溝 出土土器	40
第26図 上ノ田遺跡墨書き土器・須恵器	42
第27図 上ノ田遺跡墨書き土器	43
第28図 上ノ田遺跡墨書き土器	44
第29図 北境遺跡土層図	45
第30図 北境遺跡グリッド配置図	46
第31図 北境遺跡 出土遺物	48
第32図 梱掛遺跡グリッド配置図	50
第33図 梱掛遺跡遺構平面図	52
第34図 梱掛遺跡 出土土器	53
第35図 梱掛遺跡 出土古銭	54
第36図 梱掛遺跡 出土遺物	56
第37図 大日塚遺跡土層図	57
第38図 大日塚・土橋遺跡グリッド配置図	59
第39図 大日塚遺跡遺構配置図	60
第40図 大日塚遺跡 SM1墳墓	62
第41図 大日塚遺跡 出土遺物	63

付表

表1 各遺跡調査概要	1	表7 北境遺跡 出土土器片点数表	47
表2 上ノ田遺跡 遺跡内出土器	24	表8 北境遺跡 遺物観察表	47
表3 上ノ田遺跡 出土土器土製品	25	表9 梱掛遺跡 出土土器点数表	49
表4 上ノ田遺跡 遺跡内出土土器片点数表	31	表10 梱掛遺跡 出土古銭一覧表	53
表5 上ノ田遺跡 S D401溝跡出土土器分類別 点数表	33	表11 梱掛遺跡 出土遺物観察表	55
表6 上ノ田遺跡 出土墨書き土器・須恵器	41	表12 大日塚遺跡 出土土器点数表	61
		表13 大日塚遺跡 出土遺物観察表	61

図版目次

- 図版 1 上ノ田遺跡遠景（東から）。1次調査発掘風景（南から）。発掘風景（東から）
- 図版 2 精査区西半近景（南から）。精査区東半近景（南から）。S B100建物跡検出状況
- 図版 3 S B100建物跡全景（南から）。E B89柱穴断面。E B91柱穴断面。E B95柱穴断面。E B96柱穴断面
- 図版 4 S E321井戸跡全景。同近景。S E285井戸跡近景
- 図版 5 S D401大溝全景（南から）。S D401大溝土器出土状況。S K412土壌須恵器壹出土状況
- 図版 6 II次調査発掘風景（南から）。55～85-120グリッド全景（西から）。土層断面
- 図版 7 精査区近景（南から）。E B526柱穴断面。S E501井戸跡全景。
- 図版 8 上ノ田遺跡出土土器 須恵器・黒色土器
- 図版 9 上ノ田遺跡出土土器・土製品
- 図版10 S D401大溝出土土器 須恵器
- 図版11 同 須恵器・黒色土器・赤焼土器
- 図版12 上ノ田遺跡出土墨書き土器(1)
- 図版13 上ノ田遺跡出土墨書き土器(2)
- 図版14 北境遺跡遠景（東から）。41～60-69トレンチ全景。土層断面
- 図版15 同出土遺物
- 図版16 梱掛遺跡遠景（南西から）。XIV-XV-349～354グリッド全景。X V-251-252グリッド土壌群全景
- 図版17 同 S H 1・2・7・8 土壌基近景 S H 3 土壌基 S H 4 土壌基
- 図版18 同出土遺物
- 図版19 同出土古銭（S = 1/1）
- 図版20 大日塚遺跡遠景（北西から）。土橋遺跡遠景（南西から）。大日塚遺跡土層断面
- 図版21 S M 1 墳墓全景（南から）。S M 1 検出状況。S M 1 遺物出土状況。S M 1 人骨出土状況。S M 1 土層断面
- 図版22 大日塚遺跡出土遺物。S M 1 墳墓出土人骨片

I 遺跡の位置と環境

1 調査に至る経過

庄内平野の北半部、通称飽海平野ともよばれる酒田市東部の水田地帯には、国指定史跡の「城輪柵跡」、「堂の前遺跡」をはじめ平安時代の遺跡が数多く分布する。

この地に昭和40年代の後半から、農村基盤総合整備パイロット事業（庄内地区）をはじめ県営は場整備事業など諸開発事業が実施されることになり、山形県教育委員会では数年来県農林部や土木部および当該市町村教育委員会など関係機関と協議を行ってきている。

県教育委員会の埋蔵文化財行政は、開発に対する指導、分布調査、遺跡の保存、緊急発掘調査の実施など多岐にわたるが、本書では県教育委員会が昭和52年から54年度において発掘調査を実施した酒田市上ノ田遺跡ほか4遺跡について報告をする。このうち上ノ田遺跡については昭和53年と54年の2回、酒田市北境遺跡については昭和53年にA・B二つの遺跡として調査を行っているが、第II章以下では便宜上一括して報告を述べることにする。

つぎに各遺跡の調査概要を表にして掲げる。

表-1 各遺跡調査概要

遺跡名	所在地	調査期日	事業名	文献
上ノ田遺跡1次 (新規)	酒田市大字境興野字上ノ田	昭和53年7月3日 ～9月20日	県営は場整備事業 (東平田地区)	註1 註3
上ノ田遺跡2次 (新規)	酒田市大字境興野字上ノ田	昭和54年11月19日 ～12月7日	県営は場整備事業 (東平田地区)	註2
北境遺跡 (遺跡番号2048)	酒田市大字北沢字北境	昭和53年6月19日 ～7月27日	県営は場整備事業(東平田地区) 国道345号線道路改良事業	
桶掛遺跡 (遺跡番号2272)	飽海郡八幡町市条字桶掛	昭和52年7月11日 ～7月29日	農業基盤総合整備パイロット事業 (庄内地区)	
大日塚遺跡 (遺跡番号2069)	酒田市大字広野字大日塚 114他	昭和52年5月9日 ～6月24日	県営は場整備事業 (広野地区)	註4
土橋遺跡 (遺跡番号2068)	神田市大字広野字土橋 190他	昭和52年5月9日 ～6月24日	県営は場整備事業 (広野地区)	註4

註1 山形県教育委員会 1978 「酒田市上ノ田遺跡発掘調査現地説明会資料」

註2 山形県教育委員会 1979 「酒田市上ノ田遺跡2次調査説明資料」

註3 川崎利夫 1980 「城輪柵周辺の諸遺跡」羽陽文化112

註4 山形県教育委員会・酒田市教育委員会 1977 「大日塚・土橋発掘調査報告会資料」

2 立地と環境（第1図）

日本有数の大河である最上川は、庄内平野を刻みこむように緩やかな曲流を示しつつ西下し、日本海に注いでいる。飽海地方ともよばれる庄内平野の北半部の地形は、大別して東側の出羽丘陵地域と西側の庄内平野地域に区分される。平野地域はさらに東から（1）庄内北部河間低地、（2）酒田北部三角州、（3）庄内北部砂丘の3つに細分される。

庄内北部河間低地には、自然堤防・後背湿地・狭義の河間低地の三者を含んでいる。このうち自然堤防は日向川・荒瀬川沿いにみられるほか、安田、漆曾根、布目などにあり、観音寺から南西に放射状に分布する。しかし、これらの自然堤防は高度が低く、不明瞭なものが多い。後背湿地の明瞭なものは、生石西方や上村付近などにみられる（註1）。

第1図は、これまで発掘調査が行なわれた平安時代の遺跡を、地図にプロットしたものである。図からも明らかなように、遺跡の大半は狭義の河間低地上に立地し、自然堤防上にある遺跡は酒田市城輪柵跡と同大槻新田遺跡それに八幡町俵田遺跡の3例だけである。本書で報告する上ノ田・北境・樋掛遺跡も標高10~15mの狭義の河間低地上に立地している。後背湿地や酒田北部三角州に平安時代の遺跡がほとんどみられないことは、当時も湖沼地として遺跡の立地に不適であったことを示すものであろう。

なお最上川の南部にある大日塚・土橋遺跡は、酒田南部三角州上に立地しており、後述するような両遺跡の時期や性格と考え合せて注目される。

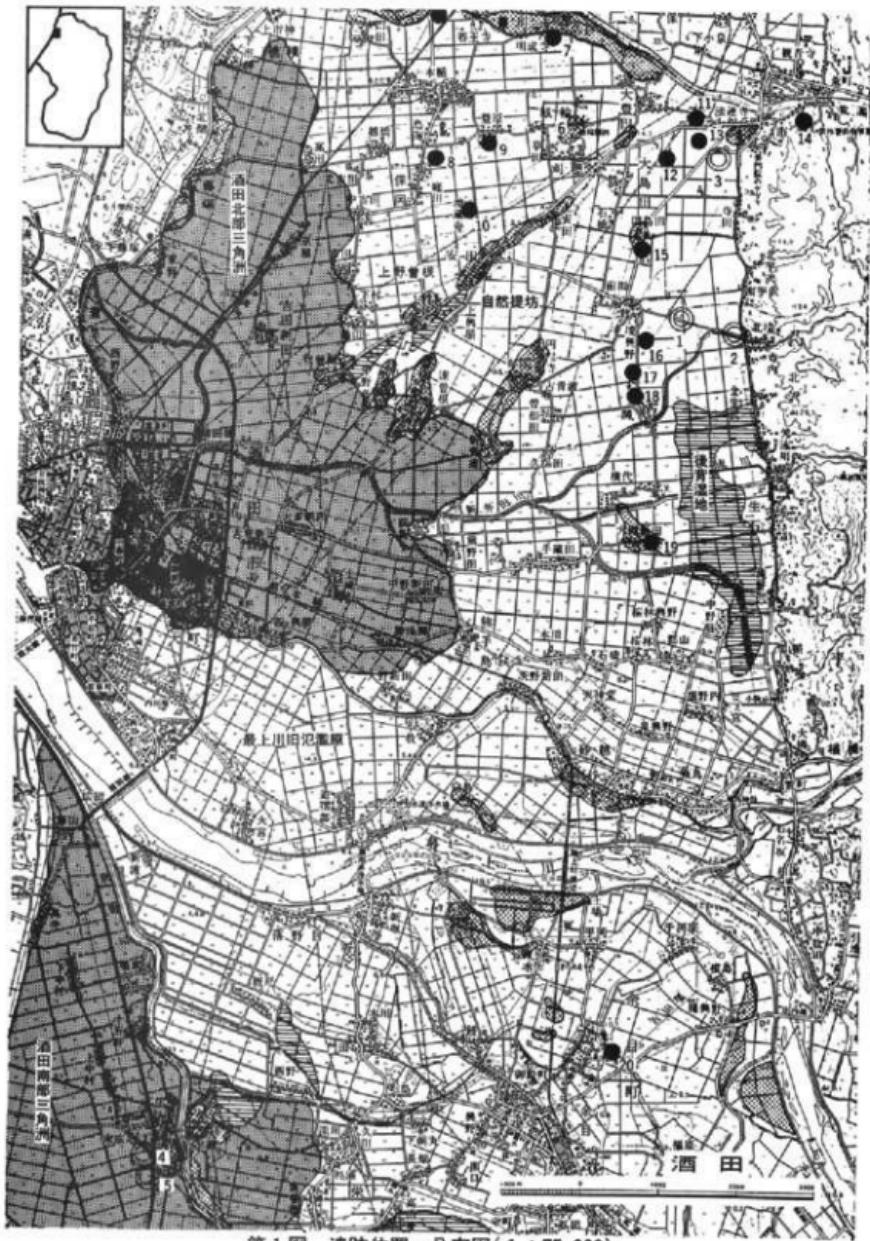
各遺跡を覆う表層の地質は、粗砂・シルト・および粘土からなる沖積層で、かなりグラス化が進んでいる。またこれと関連し地下水位も一般に高い。

上ノ田遺跡の北西3kmには平安時代の出羽国府に擬定される国指定史跡城輪柵があり、その東方八幡町樋掛遺跡周辺には堂の前、後田、茅針谷地などの官衙跡や集落跡が点在する。またさらに東の丘陵上には、出羽国府に関連すると考えられている八森遺跡がある。堂の前遺跡はまだ確証に乏しいが、出羽国分寺が所在した遺跡の可能性があり、旧建築部材を埋設した筏地業部周辺が最近国指定の史跡になっている。八森遺跡については「三代実録」仁和3年（887年）によって9世紀末より10世紀前半、つまり城輪柵跡の第Ⅰ期と第Ⅱ期の間に一時的に移転した国府跡とする説もある（註2）。

上ノ田遺跡のすぐ南西には、関部落に至る幹線農道沿いに境興野・北田・関B遺跡があり、いずれも平安時代の村落遺跡とみられる。大槻新田遺跡から後田遺跡までまっすぐ北に通じる道路は、古来「大道東」ともいわれ、その線上に遺跡が並ぶ事実は当時の地割りを考える上で重要である。

（註1） 山形県1978 「土地分類基本調査 酒田 5万分の1」

（註2） 山形県教育委員会1981 「境興野遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第46集



第1図 遺跡位置・分布図 (1 : 75,000)

- 1. 上ノ田遺跡 2. 北境遺跡 3. 稲掛遺跡 4. 大日塚遺跡 5. 土橋遺跡
- 6. 城輪遺跡 7. 明成寺遺跡 8. 施田遺跡 9. 鹿原B遺跡 10. 安田遺跡
- 11. 茅ヶ谷各地遺跡 12. 後田遺跡 13. 堂の前遺跡 14. 八森遺跡 15. 俵田遺跡
- 16. 境興野遺跡 17. 北田遺跡 18. 間B遺跡 19. 大堀新田遺跡 20. 上台遺跡

II 上ノ田遺跡

1 調査の概要

(1) 調査の経過 (第2図・図版1・6)

上ノ田遺跡は、酒田市街の北東8.4km、境興野部落と北境部落のほぼ中間に位置する。昭和52年夏に遺跡の北側をほ場整備した際、須恵器片などが多量に出土し初めて知見に及んだものである。昭和53年に山形県教育委員会が後述する北境遺跡の発掘調査を実施したところ、北境遺跡の西方800mに遺物の出土地域があったことを聞き取りし、遺物や現地を確認した上で、新規の埋蔵文化財包蔵地として登録された。遺跡の範囲は、水路の断面観察や遺物の分布状況などから、約120m四方にわたるものと推定される。

地形的には庄内北部河間低地域にあたり、標高11m前後の周囲よりやや小高い平地に立地する。地目はほとんど水田であるが、一部道路敷や用排水路が含まれる。

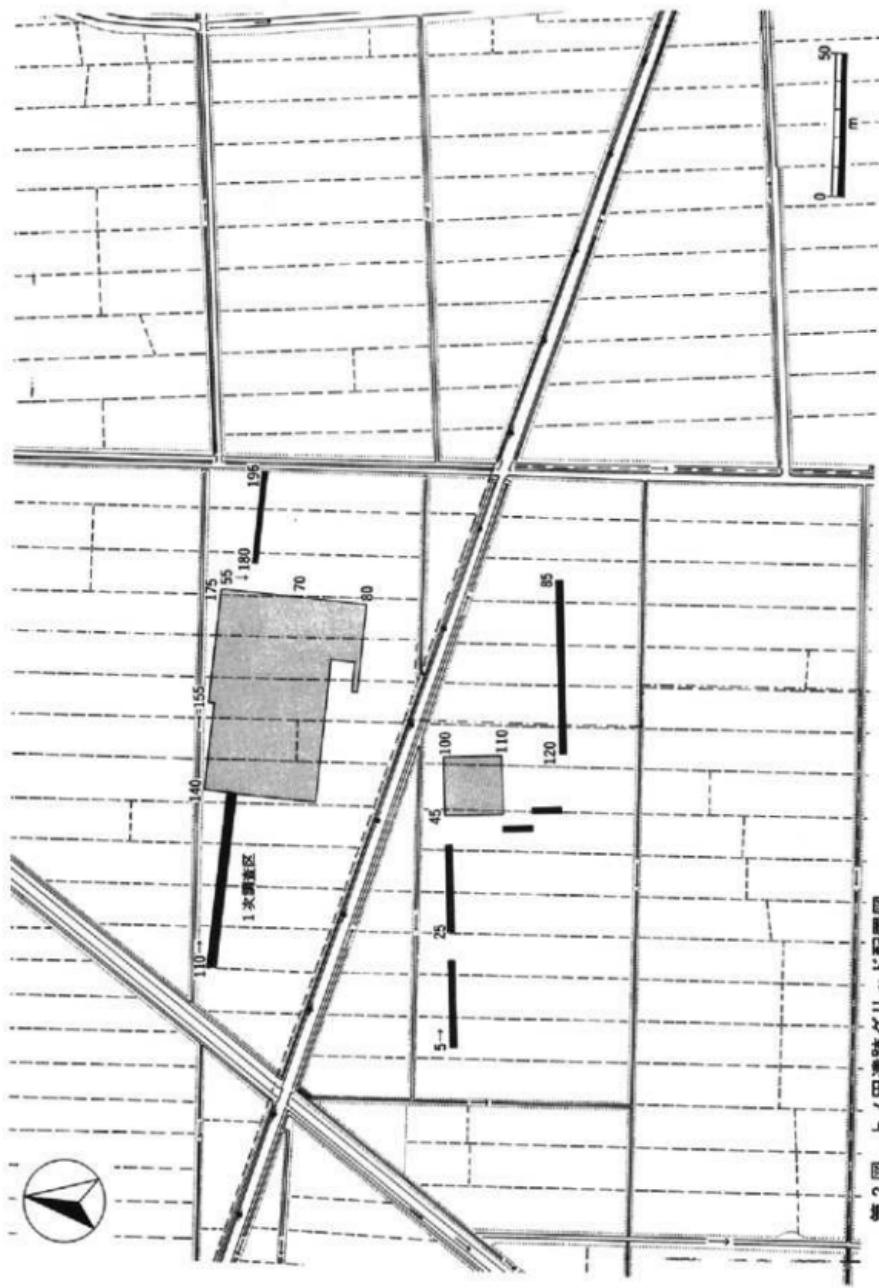
この地域に昭和53・54年と県営ほ場整備事業（東平田地区）がかかることになったため、県教育委員会が県農林部など関係諸機関と協議の結果、ほ場整備事業の年次に合わせ、事前に発掘調査を実施することになったものである。調査は山形県教育委員会が主体となり、酒田市教育委員会の協力を得て、昭和53年7月3日から同年9月20日までと、昭和54年11月19日から12月7日までの2回に分けて行なった。昭和53年度の1次調査は県道の北側約6,000m²を対象にしたもので、これを便宜上北地区と呼称する。昭和54年度の2次調査は県道の南側約6,600m²を対象にしたもので、これを南地区と呼称する。

発掘区の方向は、1次調査では真北（N-8°09'-W）を基準として設定したが、1次調査を終えた段階で建物跡の方位がほぼ磁北方向に配置なることがわかったため、2次調査では磁北を基準として設定している。グリッドの呼び方が煩雑になるが、第2図に数字を付したので参考いただきたい。なお両次調査ともグリッドは2m四方を1単位としている。

北地区では、精査地区の西半部140～160-55～79Gに掘立柱建物跡や土壙などの遺構が密集して検出された。これらの遺構群を囲むように、東西端に幅2～4mの南北方向の大溝（S D417・401）が発見された。両溝間の距離は外々で約105mを測る。精査地区の東外にも若干の遺構や遺物がみられるが、調査期間などの制約もあって明らかでない。

南地区では、まず遺跡の範囲を確認するために2×10mを基準とするトレンチを設定して掘り下げていった。遺構や遺物は1次調査精査区西半部の40m南方45～54-100～109Gにおいて顕著に認められたため、2次調査の後半はこの部分を精査地区として調べた。他のトレンチでは遺物が若干出土しているが、遺構は検出されていない。

第2図 上ノ田遺跡グリッド配置図

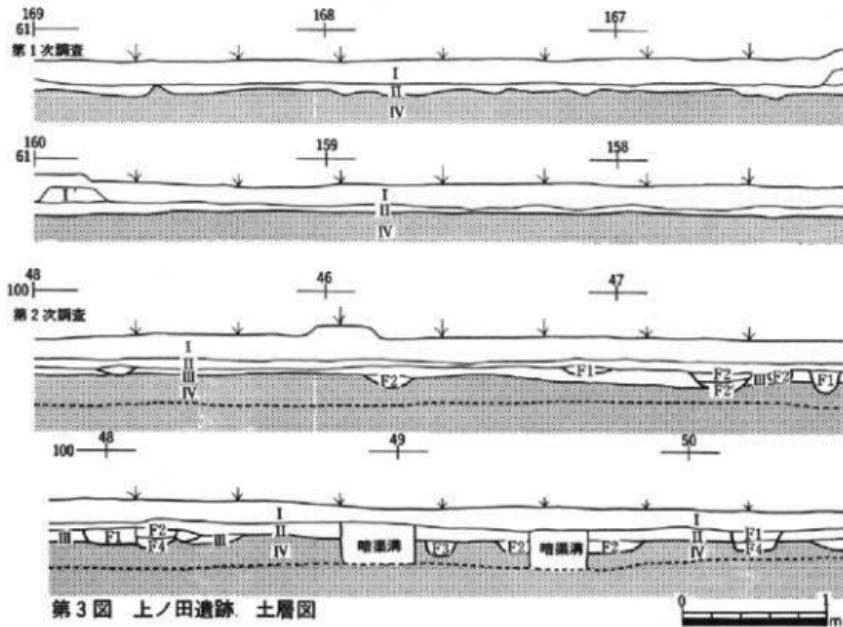


(2) 遺跡の層序 (第3図・図版6)

本遺跡は、庄内北部河間低地の中央出羽丘陵寄りに立地する。遺跡の400m南側を新井田川が流れているが自然堤防の発達は明瞭でない。遺跡付近の地層は、新井田川に添うように北東から南西にかけてきわめて緩やかな傾斜を示す。

本遺跡の基本的な層序は、1次調査精査区北東部の東西壁と2次調査精査区北端の東西壁によって観察した。第3図はその一部である。

第I層	茶褐色耕作土	水田の耕作土で砂分を含み、15cm程の厚さで均一に分布する。I層としたものは酸化度が著しい水田の畦部である。
第II層	暗褐色微砂	炭化物を含み硬くしまっている平安時代の遺物包含層。精査地区を中心に5~10cmの厚さで広く分布する。
第III層	黄褐色粘質土	炭化物を少量含み硬くしまっている平安時代の遺物包含層。精査地区の中でも遺構の密集地域に限定される。
第IV層	青灰色粘質土	グライ土壤化した無遺物層で、ほとんどの遺構の壁および底面を形成する。一部酸化して黄褐色を呈する個所もある。
F1~F4 遺構埋土		F1(暗茶褐色粘質土), F2(暗黄褐色粘質土), F3(暗青灰色砂質土), F4(暗褐色砂質土)に大別される。



第3図 上ノ田遺跡 土層図

2 発見された遺構

(1) 北地区 (第5図、図版1・2)

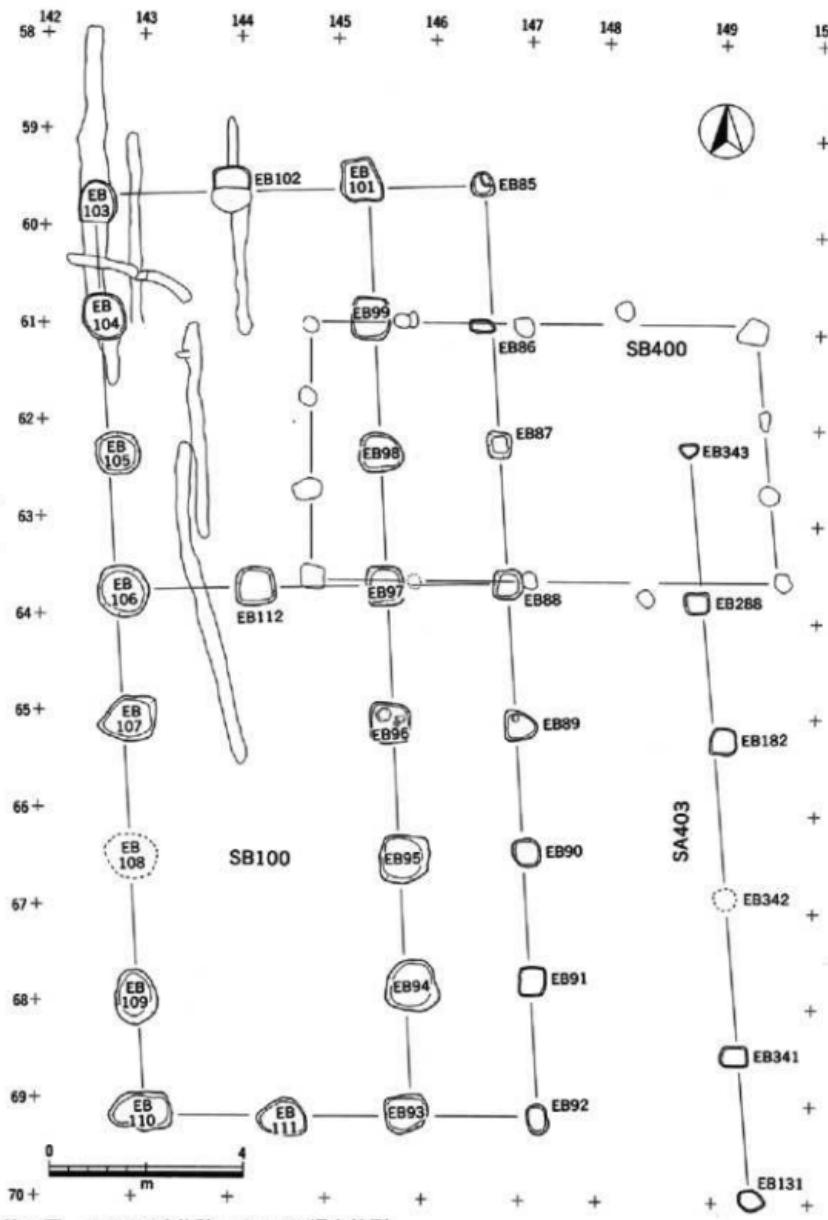
北地区で検出された遺構は350余におよぶ。柱穴の組み合せ等により、掘立柱建物跡5棟・掘立柱列2ヶ所が確認された。その他には、井戸跡2基・土壙26基・溝跡数条などがある。

S B 100建物跡 (第4図・図版2・3) 142~147-59~69グリッド内で発見された掘立柱建物跡である。S B 400掘立柱建物跡と、東側柱列で重複している。桁行7間、梁行2間である。建物の主軸方向は、N-3°30'-Wである。柱間寸法は、桁行・梁行共に2.7m(9尺)等間を測る。身舎の全長は、桁行で18.9m、梁行で5.4mである。身舎を構成する柱の中間、西面桁行E B 106から東面桁行E B 97にかけて、間仕切りの柱痕が検出され、北部は3間×2間、南部は4間×2間を構成する。また東側柱列には2.4m(8尺)のつなぎ梁をかけ、底部をつくり出している。建物の規模は、南北18.9m、東西7.8mの南北棟となる。構成する柱の掘り方は、径80~100cmの隅丸方形や円形を呈し、柱は朽ちているが、掘り方平面で明確に判別でき、中心や隅に寄ったりしているが桁行・梁行とも直線的に規則的に並んでいる。埋土は黒褐色砂質土と、明褐色粘土質の土砂を交互に埋め、柱の周囲を強くふみ固めて柱が倒れないようにしている。重複しているS B 400建物跡柱穴E B 348と本建物跡柱穴E B 88付近の面精査で観察したところ、E B 88がE B 348を切っていることが判り、本建物跡が後に建てられたものである。

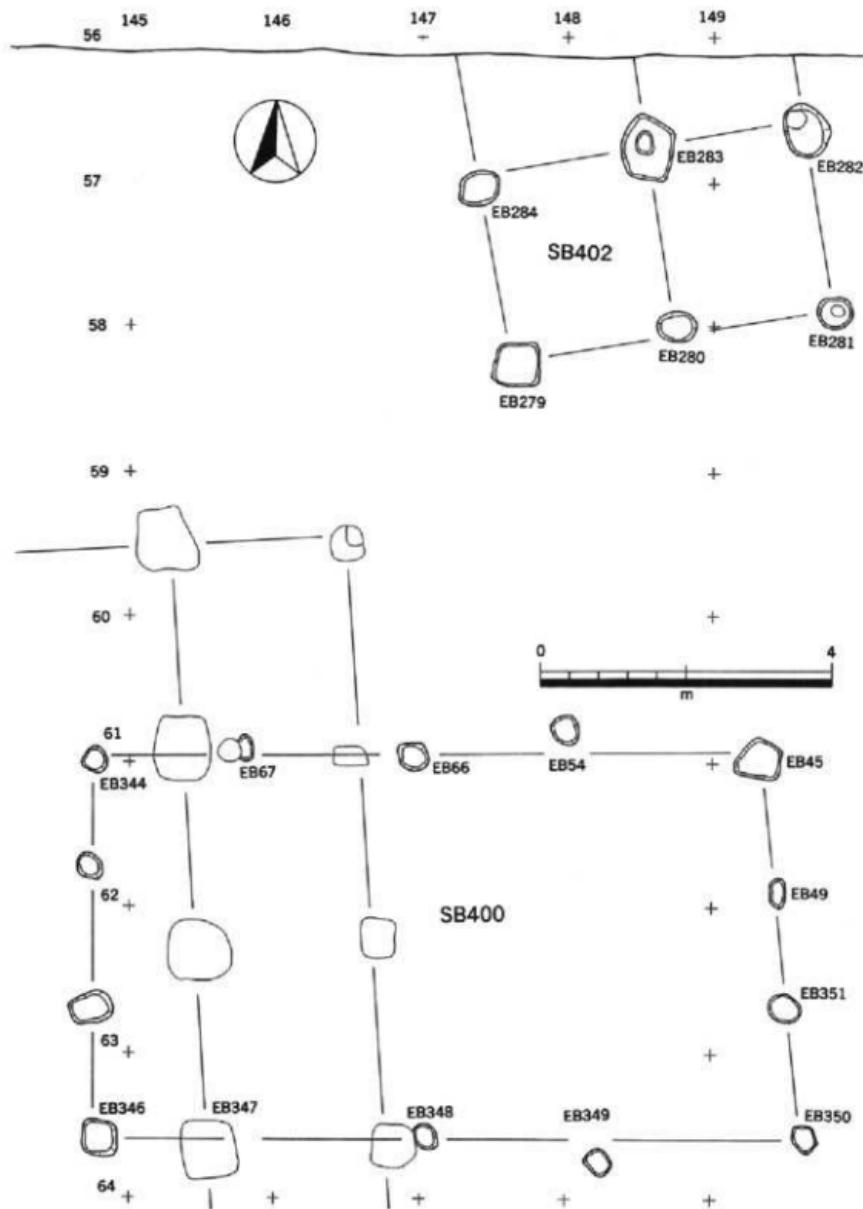
掘り方内の出土土器により、S B 100建物跡の時期は平安時代11世紀前半と考えられる。

S B 400建物跡 (第6図) 144~149-60~63グリッドで確認された掘立柱建物跡で、S B 100建物跡に切られている。桁行4間、梁行3間である。主軸方向は東西で、W-5°-Sを示す。柱間寸法は、桁行2.1km(7尺)、梁行1.8m(6尺)等間を測り、身舎は、東西8.4m、南北5.4mの東西棟である。構成する柱の掘り方は、径約30~40cm、深さ35cmの円形や隅丸方形を呈し、柱は朽ちているが、掘り方平面で明確に判別でき、中心や隅に寄ったりしている。埋土は、暗褐色砂質土と、明褐色粘土質土を交互に埋め、柱が倒れないようにしている。S B 100建物跡E B 88と本建物跡E B 348付近の面の上下関係から、掘り方内からは遺物の出土がないが、時期はS B 100建物跡より一時期古い10世紀代と考えられる。

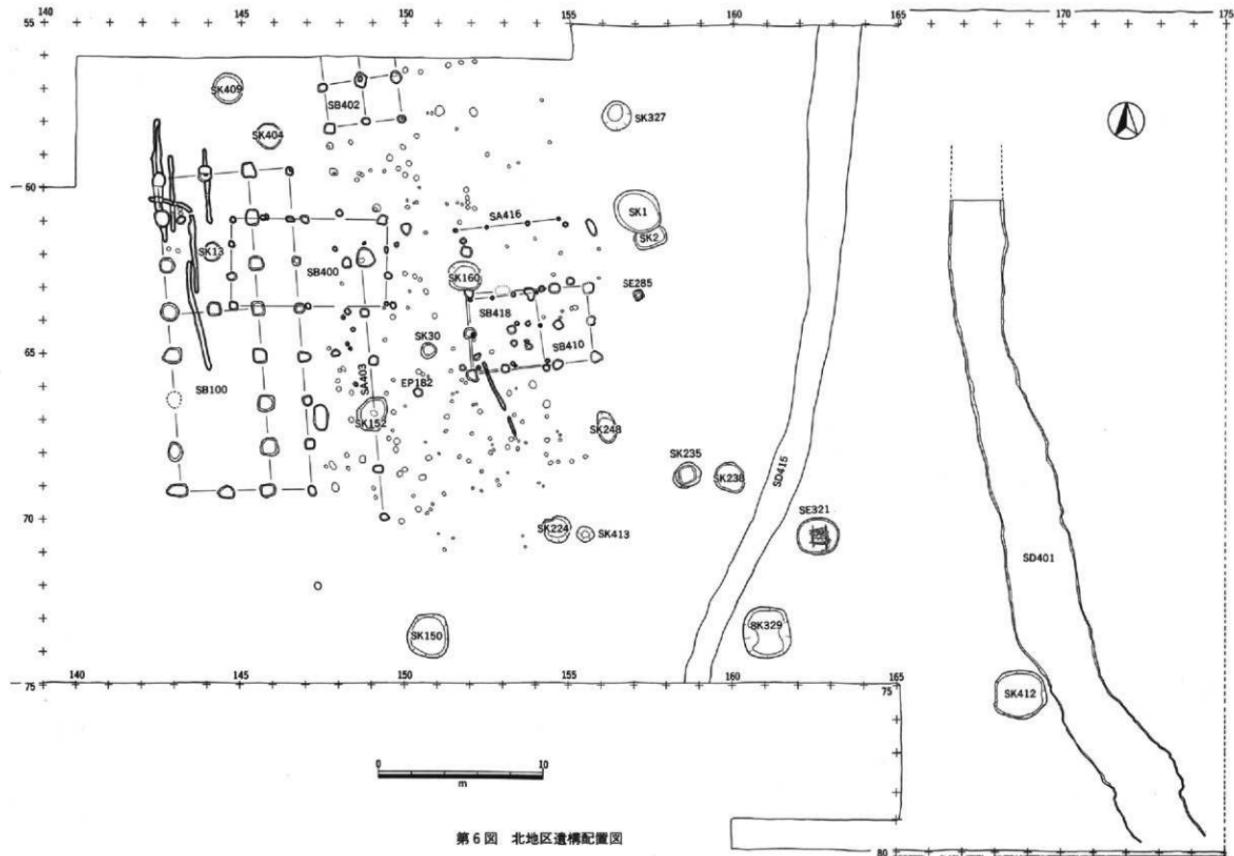
S B 402建物跡 (第6図) S B 100建物跡北東4mの地点、147~149-56~59グリッド内で発見された掘立柱建物跡である。北部は未掘地域に入るが、桁行2間×梁行2間の中心に柱をもつ建物跡と考えられる。柱間寸法は、2.7m(9尺)等間となる。構成する柱の掘り方は、径約60~80cmの隅丸方形を呈し、中心となる柱のE B 283は、径50cmの円形を呈し、深土約50~60cmを測る。埋土は、砂質と粘質の土砂を交互にふみ固め、柱をささえている。出土遺物はなかったが、建物の主軸方向はN-10°-Wを示し、S B 100建物跡よりはむしろ



第4図 SB100建物跡・SA403据立柱列



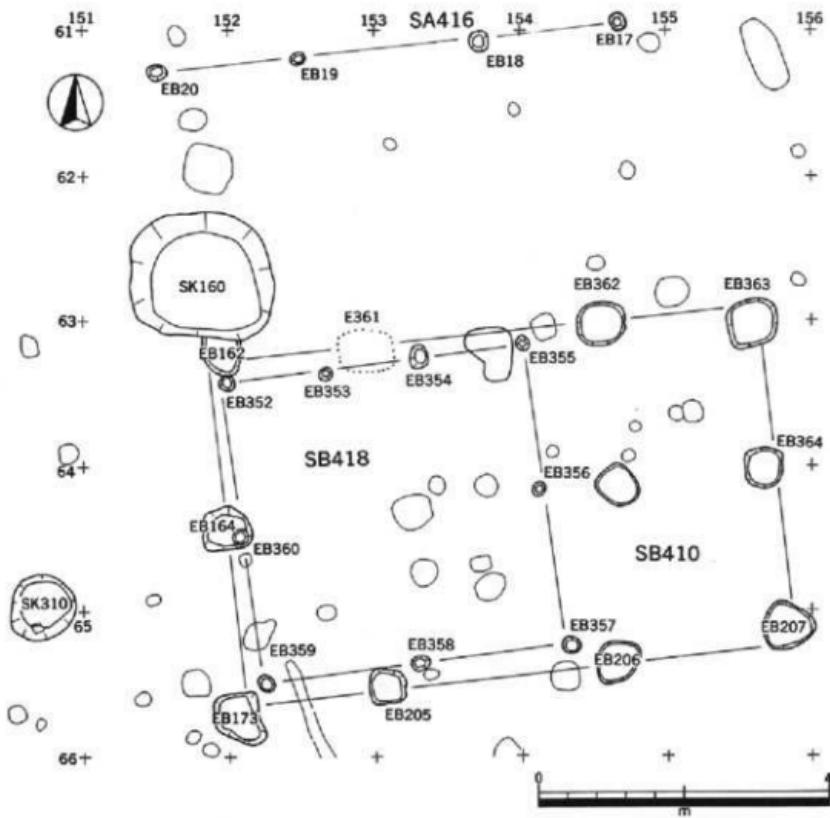
第5図 SB400・SB402建物跡



第6図 北地区遺構配置図

S B 400建物跡と組み合わされる建物と推定される。

S B 410建物跡（第7図） 151～155・63～65グリッド、S B 100建物跡東方10mで、S B 418建物跡へかぶさるような形で確認された掘立柱の建物跡である。主軸方向は、N-5°-Wを示し、桁行3間、梁行2間である。桁行は2.1m(7尺)、3m(10尺)、2.4m(8尺)の全長7.5m(2.5尺)を測り、梁行は2.4m(8尺)等間で、全長4.8m(16尺)の身舎となる。柱穴の掘り方は、径65cm、深さ35～45cmの隅丸方形を呈し、柱は平面と断面の観察で、隅に寄っているものが多い。本建物跡E B 164柱穴とS B 418建物跡E B 360との切り合い関係から本建物跡が先に建てられたことがわかる。



第7図 S B 410・418建物跡・S A 416掘立柱列

S B 418建物跡 (第7図) S B100建物跡東方10m付近で確認された東西2間、南北2間の掘立柱建物跡である。付近には柱穴が多數発見されており、埋土や柱の構成が不規則になる等、建物の構成を考えるに困難をきたしたが、平面図上で第7図のような柱穴の配列が考えられたものである。建物は、北面側柱列が1.5m(5尺)、1.2m(4尺)、1.5m(5尺)、となり、その他は、2.1m(7尺)等間の柱で構成する。4.2m四方の建物跡である。構成する柱の掘り方は、径20~30cm、深さ20~25cmの円形や不整円形を呈し、褐色の粘質土を固くふみしめている。建物の主軸方向は、N-7°40'-Wを示す。

S A 403掘立柱列 (第4図) S B100建物跡東方4m(20cm)、148・149-62-69グリッドで確認された掘立柱列である。E B131・341・342・182・188・344で構成される南北に5間の柱列で、柱間距離は3m(10尺)等間である。柱穴の掘り方は、径20~30cm、深さ30~35cmである。柱は朽ちて残存していないが、柱穴掘り方は、全体として等間隔で直線的に並んでいる。柱穴掘り方の埋土は、砂質土と粘質土を交互に突き固めている。本柱列は、S B100建物跡に付属するものと考えられる。

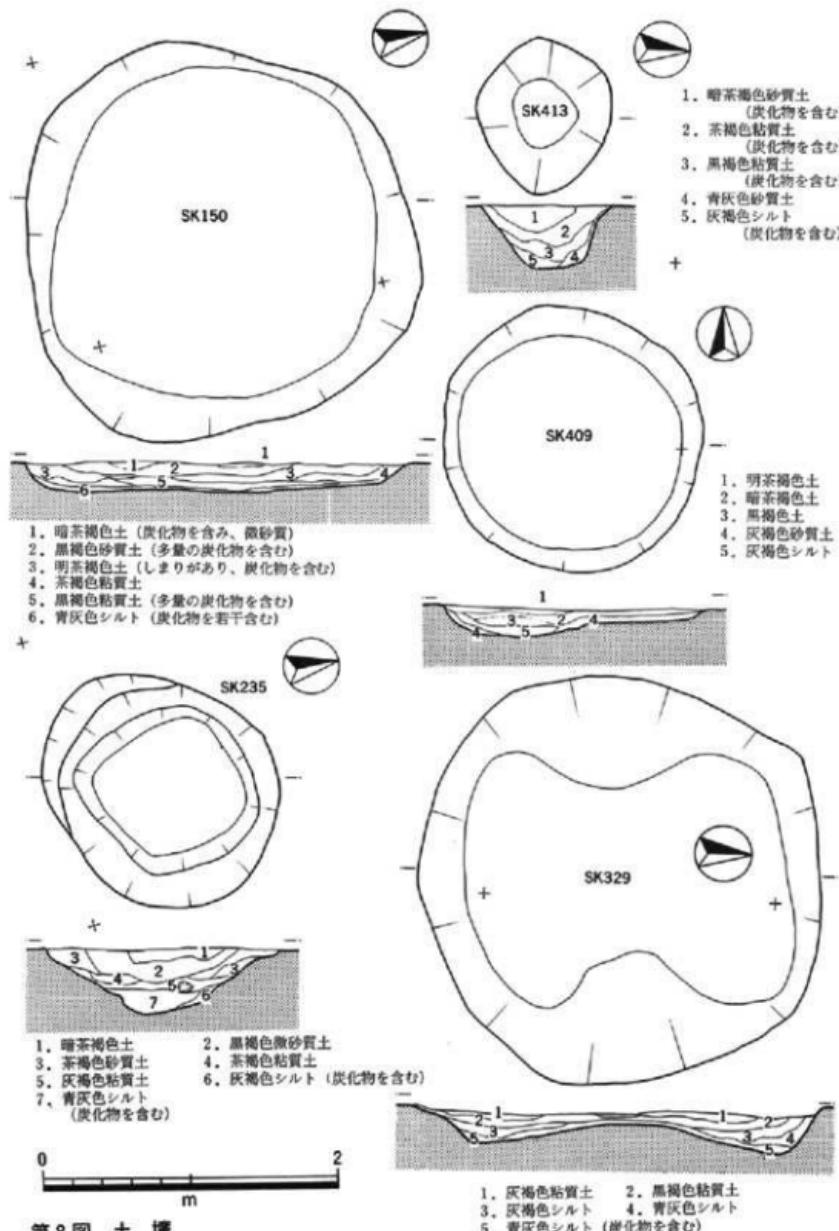
S A 416掘立柱列 (第7図) S B410建物跡の北方4m、151~154-61グリッドで確認された掘立柱列である。E B17~20で構成される東西に3間の柱列で、柱間距離は1.8m(6尺)、2.1m(7尺)、1.8m(6尺)を測る。柱穴の掘り方は、径20~25cm、深さ25~30cmである。本柱列は、その方向などから、S B410建物跡に付属する施設と考えられる。

土壤 (第8図) 北地区では26基の土壤が発見されているが、ここではS K150土壤をのぞき、時期を示す出土遺物の検出があった土壤のみをとりあげる。

S K 150土壤 151・152-73・74グリッドで確認された径約270cm、深さ約18cmの不整円形を呈する土壤である。堆積する覆土は6層に分かれ、ほとんどの層中に炭化物を含み、土壤中央部に炭化物が多い。覆土全体として砂質土と粘質土の互層になる。底面は船底状を呈し、壁面はゆるやかに立ち上がる。覆土中からの出土遺物は検出されなかった。

S K 413土壤 155・156-70・71グリッドで確認された径95~105cm、深さ約43cmの不整円形を呈し、底面は隅丸方形となる土壤である。堆積する覆土は5層に分かれ、層中に炭化物を含む。砂質土と粘質土の互層である。底面は平坦で、硬くしまっている。壁面は急激に立ち上がり外反する。覆土中からは赤焼土器片などが少量出土している。

S K 409土壤 144・145-56グリッドで確認された径180cm、深さ20cmの円形を呈する土壤である。堆積する覆土は5層に分かれ、1~3層までは、炭化物を若干含み、腐植土である。4・5層は砂質である。底面は東半部が平坦となり、西半部は深くなる。西半部での堆積土3層はレンズ状となり、やや粘性をもつものである。壁面はゆるやかに立ち上がり、覆土中からの遺物の出土は認められない。



第8図 土 壤

S K 235土壤 158-68グリッドで確認された径約140~170cm, 深さ約45cmの不整隅丸方形を呈する土壌である。堆積する覆土は7層に分かれ、壙底部付近の6・7層中には炭化物を含む。土質は砂質と粘質の土砂である。底面の平面形は隅丸方形を呈する。壁面は底部から急激に開き、南半部では稜を形成する。出土遺物には、赤焼土器と須恵器がある。

S K 329土壤 160-161-72-74グリッドで確認された径約280cm, 深さが中央部分で8cm, 周囲で20~25cmを測る不整円形を呈する土壌である。堆積する覆土は5層に分かれ、底部付近では炭化物を含む。壁面は急激に立ち上がる。赤焼土器などが76片出土している。

S E 321井戸跡 (第9・10図・図版4) 162-70グリッドで検出された遺構である。井戸の掘り方は径220~250cmの隋円形を呈し、深さ160cmの掘り込みをもつ。内部に井戸枠を組み入れている。井戸枠は構造上、上下二段に分けられる。上段は井戸枠を二段井桁式に組んでおり、大きさは上面で約75cm四方を測る。下段は、井戸枠の四隅に幅8cm, 長さ140cmの角材を斜めに打ち込み、横木を上下二本に渡している。下段の断面は逆台形を呈し、大きさは上面で一辺96cm, 下面で21cmの方形となる。さらにその周囲に幅15~25cmの板材を斜めに数枚打ち込んでいる。板材は上面が平坦で、下面是、手斧で鋭く尖いである。板材は征目板を利用しており、大きさは幅50~130cm, 長さ64cm~134cm, 厚さ10~18mmを測る。井戸枠の最下面には径20cmの平たい石を置いている。上段の井戸枠と、下段の打ち込まれた角材や板材の間には、内部に泥砂を入れないように幅50cm程の板を1枚はさんでいる。

井戸内の土層は以下の通りである。

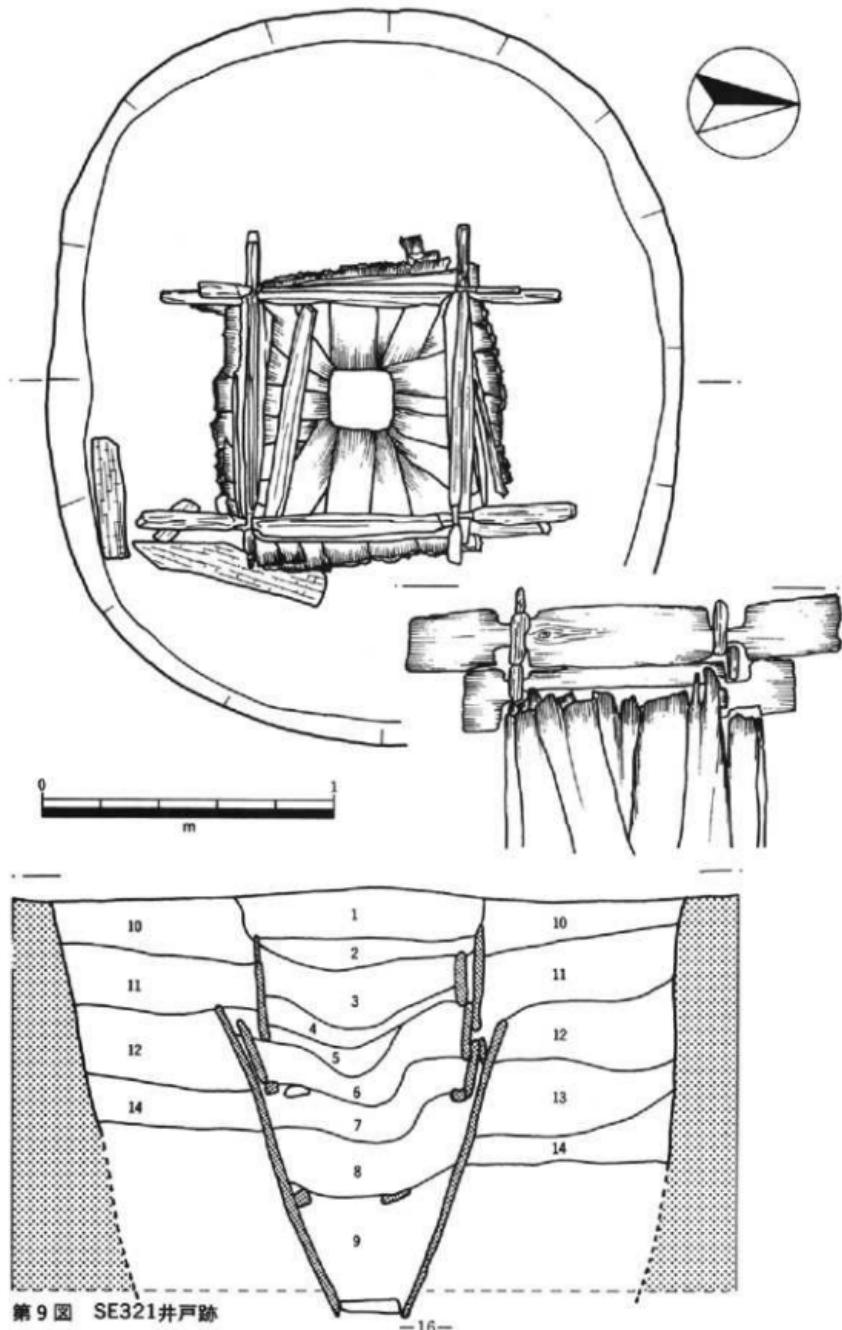
(井戸枠内の土層)

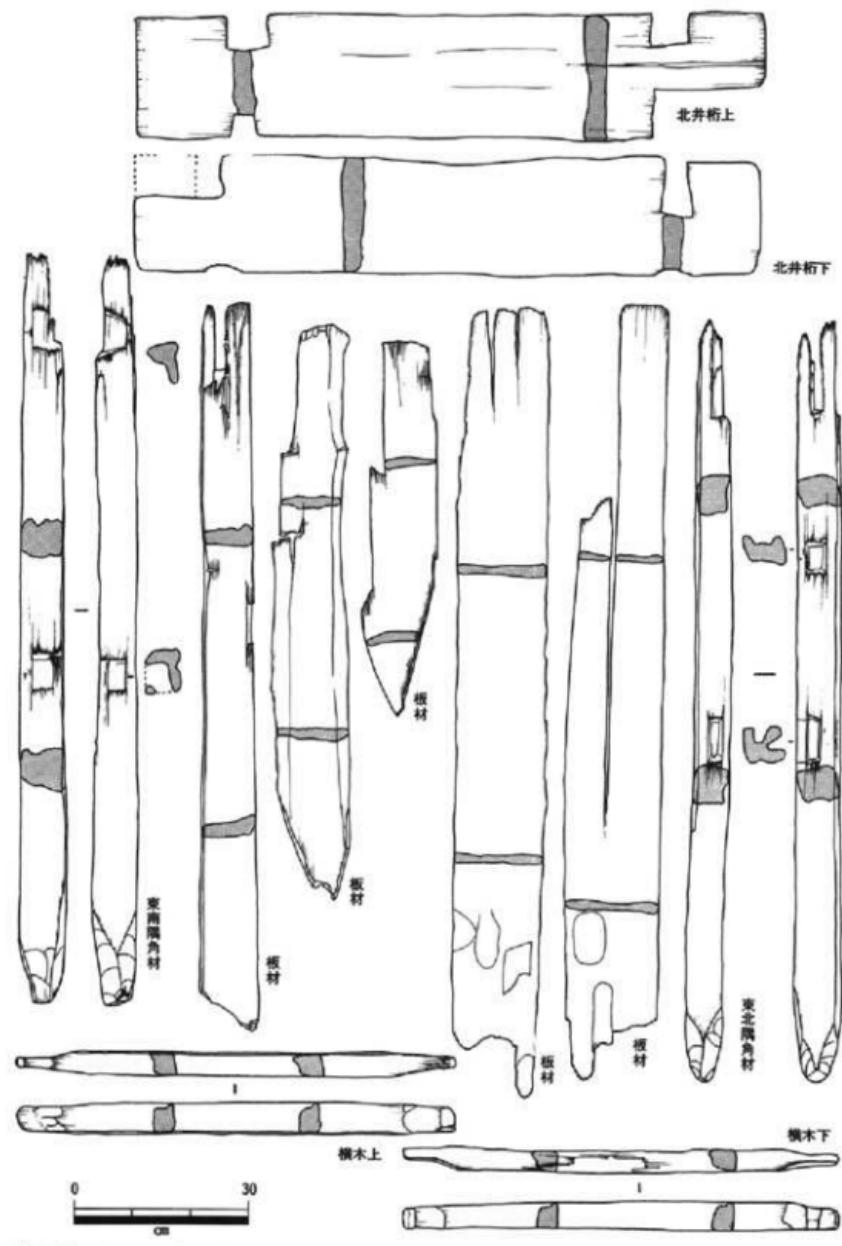
- 1 黒色土 炭化粒子を多量に含み、やわらかい。
- 2 黒色土 粗粒、重、昆虫の羽など多量に含み、やわらかい。
- 3 黒褐色土 青灰土色が混り、砂質粒でやわらかく、炭化粒子の大粒を含む。
- 4 黒色土 2層と類似する。
- 5 黒褐色土 3層と色調が近似し、黒色ブロックを含み粘質でやわらかい(微砂質)。
- 6 暗青灰色土 黒褐色の色調に近く、炭化粒子・砂質土が混り、粘質が強くやわらかい。
- 7 暗青灰色土 6層に近似するが、さらに粘性が強い。
- 8 暗青灰色土 6・7層に近似するが、黒褐色ブロックを多量に含み、粘性が強くなる。
- 9 暗青灰色土 8層より色調が明るくなり、砂質性が強くなる。

(井戸掘り方内の土層)

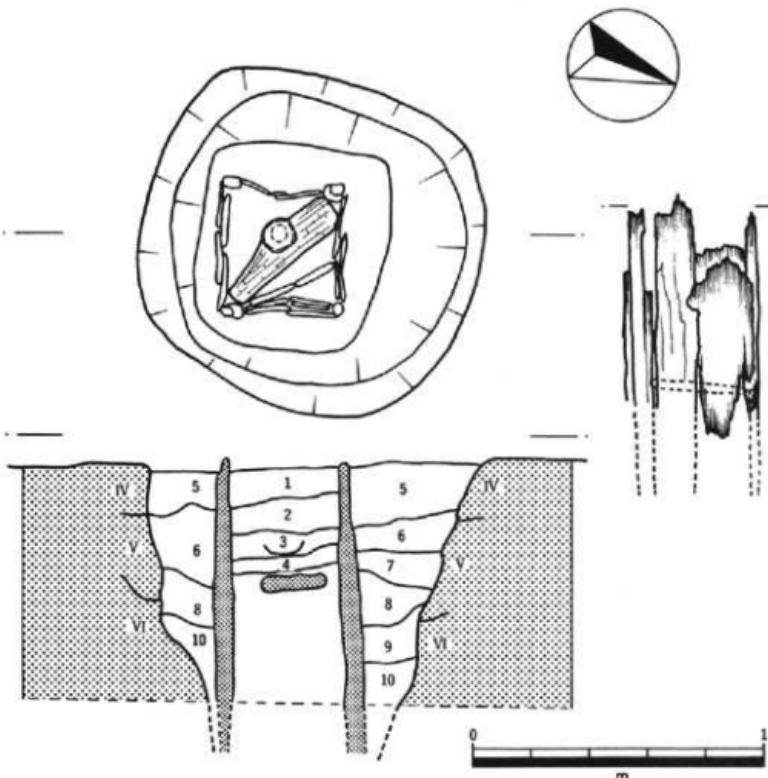
- 10 黄褐色土 黒色土ブロック、炭化粒子を多く含み、やや固くしまっている。
- 11 青灰色土 炭化粒子・黑色土ブロックを含み、粘質微砂である。
- 12 青灰色土 11層と近似するが、やや粘性がつよい。
- 13 青灰色土 12層と近似するが、黑色土ブロックの量が少なくなる。
- 14 青灰色土 12層と近似するが、さらに粘性が強くなる。

遺物は、1層から須恵器(第15図5), 黒色土器(第16図21), 赤焼土器が出土している。





第10図 SE 321井戸枠組



第11図 S E 285井戸跡

S E 285井戸跡（第11図） 157-63グリッド、S K 1・2 土壌南方2.5mの地点で検出された遺構である。掘り方は径120cmの隅丸方形を呈し、深さ120～130cmとなるが、底面まで掘るに至らなかった。内部には、一辺45cmの長さで四隅に角材を打ち込み、周囲には、幅25～30cm、厚さ1～2cmの板材を打ち込んでいる。角材と板材は、110cmまでの深さまで確認出来たが、さらに下方へ続き湧水が著しく取り上げられなかった。板材は各々の辺に内側で2枚を使い、外側には1～2枚の板を打ち込んでおり、泥砂の混入を防いでいる。

井戸内の土層は以下の通りである。

(井戸内の土層)

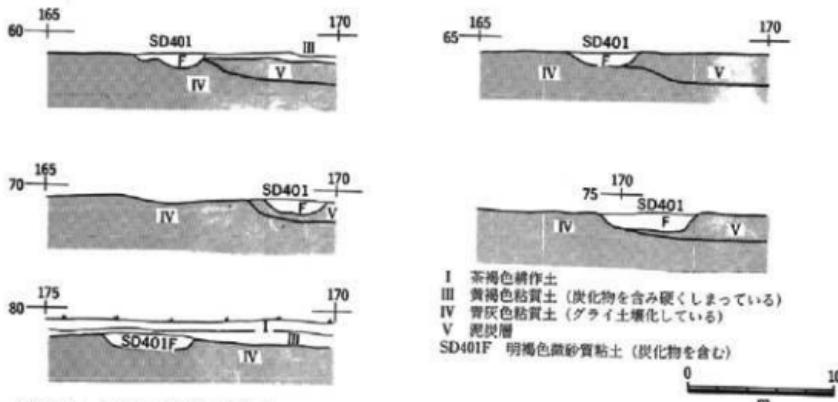
- 1 暗褐色土 微砂質で、炭化粒子・焼土の大粒・灰が多量に混る。サラサラしてやわらかい。
- 2 黒褐色土 炭化粒子を含み、粘質で、やや固くしまっている。

- 3 暗褐色土 褐色土ブロック、炭化粒子を含み、粘質でやわらかい。
 4 黒褐色土 3層に近似するが、色調が黒味がかったり。
 (井戸掘り方内の土層)
 5 黄褐色土 黄褐色・黑色土ブロック、炭化粒子を含み、粘質微砂
 6 明褐色土 多量の黑色ブロック、黄褐色ブロックを含み、微砂質で粘性が強くやわらかい。
 7 明褐色土 黄褐色ブロックを多量に含む。
 8 青灰色土 黑褐色ブロックが混り、粘性が強くやわらかい。
 9 青灰色土 黑褐色ブロックが混り、微砂質である。
 10 青灰色土 粘質微砂、9層より粘性が強く、やわらかい。

2層は自然堆積層と考えられ、上部の1層は、人為的に埋め込まれている。また3・4層も同様に埋め込まれた土層を示し、4層以下の堆積は観察出来なかった。出土遺物は、3層中より赤焼土器（第17図23・31）や須恵器が出土している。

S D 402大溝（第5・12図） 北区東部162～173-60～80グリッドで検出された幅2.5m～3.5m、深さ25～35cmの溝跡である。溝は、やや直線的に磁北方向を向き、西方105mの地点で確認された溝跡S D417と結びつくものと考えられる。S D417は、幅3.9mを呈し、覆土上面での観察では炭化物を含む明褐色微砂質粘土であるが本大溝の覆土は同様に炭化物を多量に含む明褐色微砂質粘土の単一層である。溝の底面は舟底状を呈する。壁面はゆるやかに立ち上がり、東側はV層の泥炭層を堀り込んでいる。検出された溝跡の底部では、第19～25図に示した土器が集中して検出された。時期は、平安時代前期9～10世紀に位置付けられる。

S D 415埋跡（第5図） S D 401大溝より西方10mで検出された溝である。幅1.5～2mで、北北東から南南西に走る。覆土は明褐色粘土層であるが、面での確認のため深さは不明である。覆土中から須恵器（第15図10）、赤焼土器が出土しているが、溝東側に土留め用の丸杭が等隔に立ち並んでおり、近世以降の埋跡と推定される。



第12図 S D 401大溝土層図

2 南地区

南地区で検出された遺構は110を数える。井戸跡1基、土壙・ピット、溝跡などがある。遺構は調査地域の北半部に集中して発見され、ピットの組合せにより建物跡1棟の確認が出来た。遺構番号は、北地区と区別するため501番からの番号を付した。また調査は面精査での記録にとどめたため覆土の状態は不明である。

S B 546建物跡 調査区域北西部46~48-100~102グリッドで確認された掘立柱建物跡である。E B 543・524間の距離は180cm、E B 524・527・548間も180cm等間で、E B 548と556間は90cmを測る。東西2間360cm(12尺)、南北1間以上の身舎の西面に90cm(3尺)の庇部が付く建物と考えられる。柱の掘り方は、径25~30cmの円形を呈したものである。表面での精査では暗茶褐色土に青灰色ブロックが混る覆土を呈している。柱の位置は隅に寄ったり中心にあつたり一定ではない。この建物の周辺には、柱穴と考えられるピットが多数確認された。E B 525・526・532は3m等間の柱間を考えさせるが、E B 526柱穴の掘り方が大きいことや、それらと組合わざる柱穴が付近に存在しないことにより建物跡と決定出来なきった。

S E 501井戸跡 (第14図) S B 546建物跡東方8m、52・53-102グリッドで確認された井戸跡である。掘り方は東西125cm、南北100cmのやや丸味をもつ長方形で、上面に板材が検出されている。推定ではあるが一辺90cmをもつ井戸粧で、矢板材を縦に打ち込んだものと思われる。この例は北地区で検出されたS E 285井戸跡と同様な作りをなすものと考えられる。

土壙は3基確認されている。S K 541は径約140cmを呈する不整円形の土壙で、E P 545・537・538・539などと重複している。先後関係は不明である。S K 516は径230cmを呈する不整円形である。S K 578は径45cmの円形を呈した土壙である。いずれも平面での確認のため埋積状態は不明である。

その他溝状遺構が数条検出されたが、後世のものが多く、時期を示すものが少ない。遺構からの出土遺物は、土壙や柱穴、ピットなどの上面から出土している。501井戸跡出土の土器からは、11世紀前半の時期が比定され、S K 541土壙では10世紀前半の時期、S B 546建物跡は10世紀後半の時期が考えられる。しかしながら、これら遺構は面精査での時期であり、遺構内埋積土中からの出土遺物によって正確な時期が決定されるべきものである。

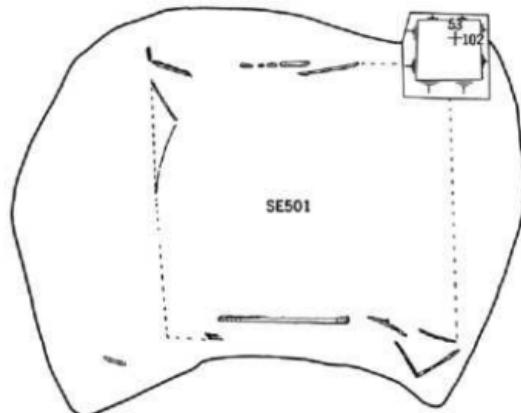
南地区的精査区域は、北地区精査区域西半部の南方約50mの場所にあたる。今回の発掘調査でみる限り、上ノ田遺跡の南限に相当するようである。また北地区で検出された、上ノ田遺跡のある時期の東ないし西側の区画を示すと考えられるS D 401大溝やS D 415大溝は、トレーンチ掘りによる追求にもかかわらず確認できなかった。東側のS D 401大溝が南地



第13図 南地区遺構配置図



51
+102



0 1
m

第14図 SE501井戸跡

区55～84-120トレンチのさらに北側ないし東側で曲る可能性が若干残っているにしても、現段階では南地区までは延びないものと考えるほうが妥当である。北地区と南地区の中間に位置する県道周辺がどのような遺構の分布を示すかが、上ノ田遺跡の性格を想定する上で大きな課題である。

3 出土遺物

(1) 建物跡・土壤・井戸跡出土の土器 (第15~18図、表2~4、図版8・9)

上ノ田遺跡の2次にわたる発掘調査のうち、埋土より遺物が発見された遺構は39ヶ所を数える。土器が多く量に出土したSD401大溝については後で述べ、本項ではそれ以外の出土遺物について要約する。遺物挿図は、須恵器・黒色土器・赤焼土器・土製品の順に種別毎に一括して版組した。なお遺構埋土以外の遺物については末分折なので今回は割愛する。

6棟の建物跡のうち、SB100建物跡は柱穴掘り方の20ヶ所から土器が出土している。土器には須恵器・黒色土器・赤焼土器の3種類がある。その量的な比率は約2:1:7で、赤焼土器と黒色土器の占める割合が多く、逆に須恵器が少ない傾向が目立つ。須恵器には、壺・高台付壺・蓋・壺・甕などの器種がある。底部切り離しがヘラ切り手法によるものなど一部9世紀代に遡るものもあるが、籠目の叩き目を持つ甕など後世的な様相が強い。黒色土器は、低い台部を有する内面黒色化処理の高台付壺が特徴的である。赤焼土器には、壺(第17図30)・甕(同図37)・壺(第18図46)などの器種がある。壺の形態や、口縁部内面が丸味をもつ甕や壺も11世紀代にあたるものである。全体的には余目町上台遺跡第2号住居跡の土器群と類似し、時期は平安時代後半11世紀前半頃と推定される。

SB400建物跡の柱穴からは遺物は出土していないが、面の上下関係からSB100建物跡より1時期以上古い時期、10世紀代頃と推定しておきたい。

SB410建物跡の柱穴内から遺物は出土していないが、北西隅の柱穴を切って作られているSK160土壤の出土土器が、SB100建物跡柱穴内の土器と共に共通することから、11世紀前半よりやや古い時期、10世紀末頃と推定しておきたい。SB418建物跡は、その柱穴がSB410建物跡柱穴を切って作られていることから、SB410建物跡よりやや新しい時期11世紀前半頃であろう。SB402建物跡の柱穴掘り方からは遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SB546建物跡は、柱穴掘り方の3ヶ所から土器が21片出土している。すべて小片であるが赤焼土器壺・甕が大半を占め、須恵器と黒色土器も少量混っている。赤焼土器や須恵器の壺の形態などから、10世紀後半頃の時期が考えられる。

3基の井戸跡からは、いずれも遺物が出土している。SE285井戸枠内の埋土上面は4層に分けられ、そのうちの第3層から土器が26片出土している。土器片は赤焼土器壺(第17図23・31)を主体とし、少量の須恵器壺と赤焼土器小形甕片が混っている。1部9世紀代にまで遡るものもあるが、全体としては11世紀前半頃の時期と推定される。

SE321井戸枠内の埋土は9層に分けられるが、そのうち第1層からのみ土器が300片程出土している。土器の種類には須恵器(第15図5)・黒色土器(第16図21)・赤焼土器(第

17図29・第18図43) の各種があり、全体として10世紀後半頃に位置付けられる。ただし、これらは埋土最上層の遺物なので、本井戸跡の使用されていた時期は、もう少し古い時期9世紀末葉から10世紀前半頃とする方が妥当である。

S E 501井戸跡は、上面の平面プラン確認段階で留まっているため、井戸枠内の遺物は埋土第1層のものしか検出していない。土器は赤焼土器壺を主体とし、これに黒色土器壺・須恵器壺など計44片ある。全体として11世紀前半頃の時期と推定される。

各土壤の中で、遺物の出土量が多いのは、SK 1・152・160・327・412土壤である。

SK 1土壤は、埋土第1・2層から土器が378片出土している。須恵器壺および高台付壺の底部切り離しは糸切り手法(第15図13・第27図120~122)を特徴とし、これに底径に対し器高の高い赤焼土器壺(第17図25)、体部下端にヘラ削り調整を持つ土師器的な壺(第18図42)が加わる。全体として10世紀前半頃の時期と推定される。

SK 152土壤は、埋土第1層から赤焼土器を主体に土器が152片出土している。壺(第17図27)や壺(第18図45)などの器種があり、他に黒色土器高台付壺などもあることから、時期は11世紀前半頃と推定される。本土壤からは土錐(第18図47)も1点出土している。

SK 160土壤は、埋土第1・2層から土器が302片出土している。赤焼土器が主体で、壺・

表-2 上ノ田遺跡 遺構内出土土器 (表中の数字は遺物の押回番号である。ゴシックは墨書き土器である。)

遺構		須恵器			黒色土器	赤焼土器		
		壺	蓋	壺		壺	皿	甕
SK 1		13,120,121,122				25	34	41,42
EP 41							38	
SK 73							36	
S B 400	E B 97 E B107 E B109				30			46
							37	
S K152	1				27			45
S K224	8							
S K235								
S E285						23,31		
S E321	5				21	29		43
S K327						24,28,32		44
S K329						26		
S K412	2,3,4,6,9		14,15,17,	18			35,39,40	
S D415	10							

壺などの器種がある。他に黒色土器高台付壺、底部糸切りの須恵器壺などもあり、時期は11世紀前半頃と推定される。

S K327土壤は、埋土第1～3層から土器が268片出土している。赤焼土器が主体で、壺(第17図24・28・32)、壺(第18図44)、壺などの器種がある。壺は底径が小さく、体部が直線的に立ち上る。他に黒色土器高台付壺もあり、時期は11世紀前半頃と推定される。

S K412土壤は、埋土第1層から土器が199片出土している。須恵器と赤焼土器の比率がほぼ同量で、黒色土器を含まない。須恵器には、壺(第15図2～4、6)・高台付壺(同図9)・蓋(同図14・15・17)・壺(第16図9)・壺などの器種がある。ヘラ切り無調整の壺が主体で、底径のやや大きい糸切り無調整のものも併出する。壺は体部が扁平で、口頭部から体部上半にかけて自然釉が認められる。赤焼土器は、壺類が多く(第17図35、第18図39・40)、口線部端が直立する。全体として時期は9世紀中葉頃と推定される。

その他の土壤については、出土土器の分析などから、S K73・224・235土壤は9世紀中葉頃、S K310・541土壤は10世紀前半頃、S K238・248土壤は10世紀後半、S K329・414土壤は11世紀前半頃の時期が推定される。

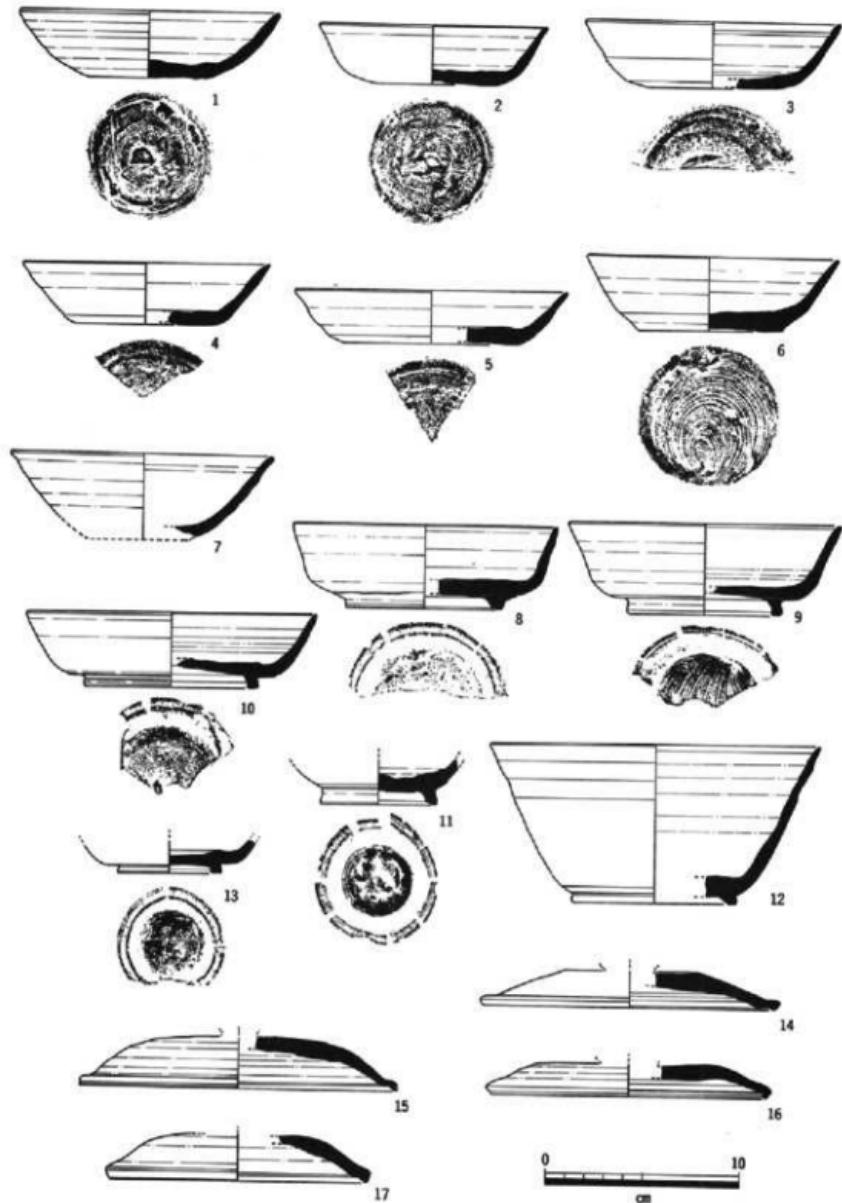
溝状遺構のうち、S D72溝跡は赤焼土器壺を主体に黒色土器高台付壺を含むことなどから11世紀前半頃の時期が推定される。2次調査南地区で検出されたS D509～511などの南北方向の溝状遺構からは、土器が少量づつ検出されている。赤焼土器を主体に須恵器、黒色土器が混っており、11世紀前半頃の時期が推定される。S D415大溝は、土止めの丸杭を等間隔に有する近世以降の堰跡であるが、埋土から須恵器や赤焼土器も出土している。

表-3 上ノ田遺跡出土土器・土器品

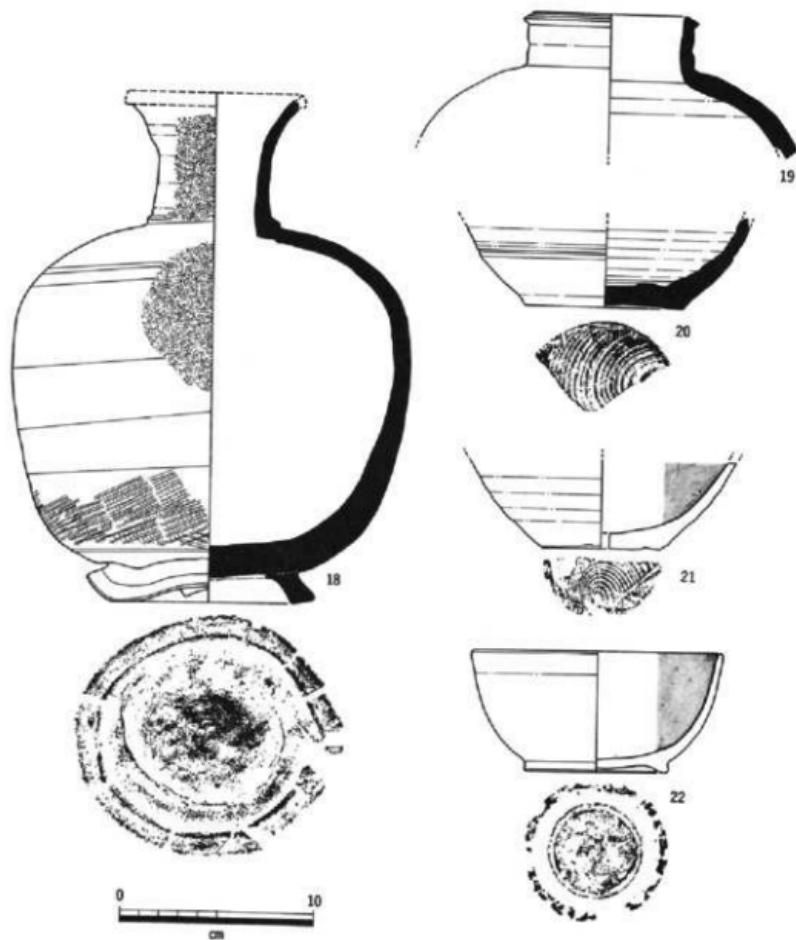
器種	探査番号	計測値(m/m)			色調	胎土	焼成	底部切り離し 技法	調整技法	出土地点・層位
		口径	底径	器高						
壺	1	(132)	60	34	明赤褐色	小礫混	酸化灰	ヘラ切り離し	ロクロナデ	S K152
	2	(116)	60	30	灰色	良		ク	フ	S K412・F1
	3	(130)	(67)	34	明灰色	小礫混	良	ク	フ	S K412・F1
	4	(127)	(70)	31	白灰色	小礫混	不良	フ	フ	S K412・F1
	5	(140)	(100)	27	明灰色	粗砂混	良	フ	フ	S E321・F1
	6	129	74	39	白灰色	小礫混	不良	回転糸切り離し	フ	S K421・F1
	7	135			白灰色	良	良		フ	51-104
高台付壺	8	(135)	(80)	43	灰色	粗砂混	良	ヘラ切り離し	フ	S K224
	9	(139)	(77)	47	白灰色	粗砂混	不良	回転糸切り離し	フ	S K412・F1
	10	(148)	(88)	39	明灰色	小礫混	良	ヘラ切り離し	フ	S D415・F1
	11				明赤褐色	良	酸化灰	フ	フ	54-100・II
	12	(160)	(84)	82	明赤褐色	良	酸化灰		フ	56-120
	13				灰色	粗砂混	良	ヘラ切り離し	フ	S K1・F1.2

器種	辨別番号	計測値(ミリ/m)			色調	胎土	焼成	底部切り離し 枝法	調整技法	出土地点・層位
		口徑	底盤	器高						
須恵器	皿	14 (148)			明灰色	小碎混	良		上面削り	SK412・F1
		15 (162)			白色	良	良		上面ナデ	SK412・F1
		16 (141)			灰色	粗砂混	良		〃	SK235・F1
	壺	17 (132)			白色	粗砂混	良		〃	SK412・F1
		18 (85)	117	(262)	乳灰褐色	粗砂混	良		体部下半にタクキ	SK412
		19 (79)			灰色	良	良		ロクロナデ	SK235・F1
		20 (81)			灰色	小碎混	良	回転余切り離し	〃	53-103
黑色	壺	21		(60)	赤褐色	粗砂混	良	〃	内面ミガキ	SE321・F1
土器	高台付壺	22 (128)	73		明褐色	粗砂混	良		〃	SK329
焼	壺	23 (124)	127	48	赤褐色	粗砂混	良	回転余切り離し	ロクロナデ	SE285・F3
		24 (121)	(58)	44	明褐色	粗砂混	良	〃	〃	SK327・F1,2,3
		25 (47)		49	明褐色	粗砂混	良	〃	〃	SK1・F1,2
		26 (131)		57	白色	粗砂混	良	〃	〃	SK329・F1
		27 (120)		44	明褐色	粗砂混	良	〃	〃	SK152・F1
		28 (123)		45	赤褐色	粗砂混	良	〃	〃	SK327・F1,2
		29 (50)		54	明褐色	粗砂混	良	〃	〃	SE321・F1
		30 (52)		44	灰褐色	粗砂混	良	〃	ロクロナデ	EB97・F1
		31 (126)		44	明褐色	粗砂混	良	回転余切り離し	〃	SE285・F1
		32 (122)		57	明褐色	粗砂混	良	〃	〃	SK327・F1,2,3
	高台付皿	33 (226)		39	白色	粗砂混	良		外面上に条線痕	SK1
土器	甕	35 (240)			明褐色	粗砂混	良			SK412・F1
		36 (202)			明褐色	粗砂混	良			SK73・F1
		37 (196)			明褐色	粗砂混	良			EB109・F1
		38 (120)			赤褐色	粗砂混	良			E P41
		39 (40)			明褐色	粗砂混	良			SK412・F1
		40 (118)		53	明褐色	粗砂混	良	回転余切り離し	S K412・F1	
		41 (412)		63	明褐色	小碎混	良	〃		SK1・F1,2
		42 (412)			明褐色	粗砂混	良			SK1・F1
		43 (412)			明褐色	粗砂混	良			SE321・F1
	壺	44 (430)			茶褐色	粗砂混	良			SK327・F1,2
土鏡	47 (60)	長40mm 最大径11mm 孔径3mm			明褐色	粗砂混	良			SK152・F1
	48 (56)	厚17mm 孔径9mm			明褐色	粗砂混	良			EB107・F1
	49 (56)	厚22mm 孔径7mm			明褐色					SD401・F1
										135~140・75~100・II

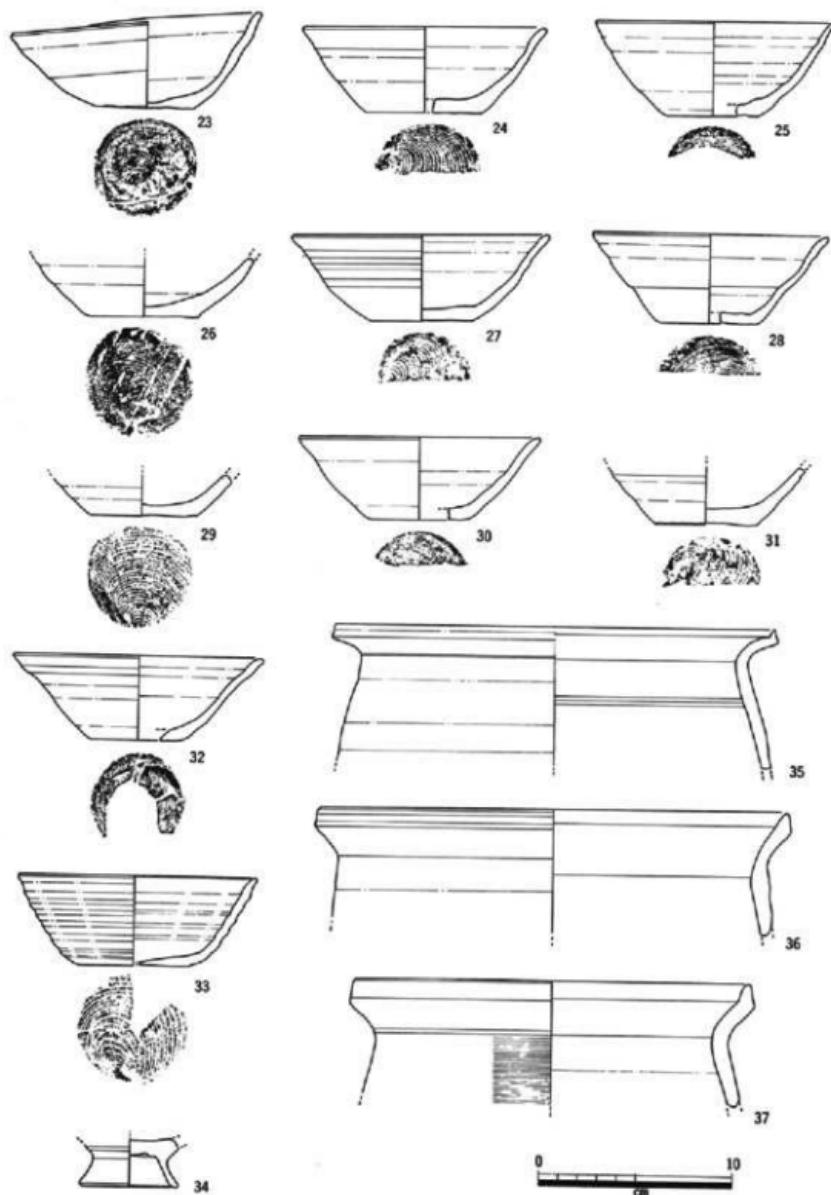
※ 計測値()内の数値は図上復元によるものである。



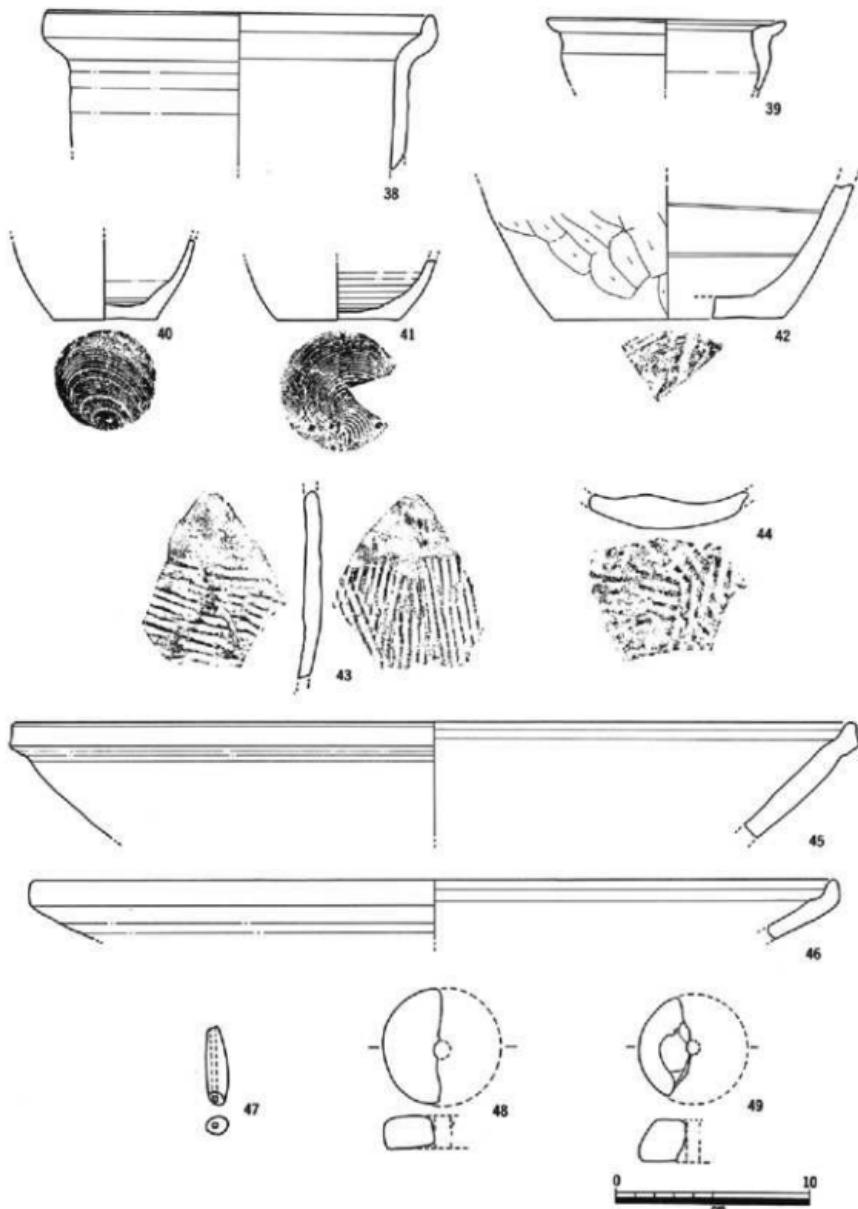
第15図 上ノ田遺跡 出土土器



第16図 上ノ田遺跡 出土土器



第17図 上ノ田遺跡 出土土器



第18図 上ノ田遺跡 出土土器・土製品

表-4 上ノ田遺跡遺構内出土土器片点数表

種別 遺構		須恵器	赤燒土器	黑色土器	計	種別 遺構		須恵器	赤燒土器	黑色土器	計
S	K 1	66	307	5	378	S	K 327	10	249	9	268
S	K 72	10	36	2	48	S	K 329	6	60	10	76
S	K 73	5	26		31	S	D 401	1,268	986	13	2,267
S	E B 89	4	13	2	19	S	K 412	89	110		199
S	E B 90	2	20		22	S	K 413	5	24	1	30
S	E B 91		12		12	S	K 414		37	1	38
S	E B 92		5		5	S	D 415	45	49	1	95
B	E B 93	1	7	1	9	S	E 501	4	37	3	44
B	E B 94	3	52		55	S	D 509	1	28	4	33
B	E B 95	8	37	1	46	S	D 510		6		6
H	E B 96	6	45	3	54	S	D 511	1	4		5
E B 97	2	58	6		66	S	E B 524		6		6
E B 98	2	32	4		38	S	E B 527	3	8	2	13
E B 99	5	35	6		46	S	E B 543		2		2
E B 110	4	51	1		56	S	E B 525		2		2
E B 102	4	20	2		26	E	P 528		10	1	11
E B 104	6	41	4		51	E	P 529		2		2
E B 105	6	51	5		62	E	P 530		1		1
E B 106	6	26	3		35	E	P 531		3		3
E B 107	3	22			25	E	B 532	1	5		6
E B 109	2	27	3		32	S	D 533		4		4
E B 111		19			19	E	P 534		2		2
E B 112	2	12	2		16	S	D 535	2	24	1	27
E P 128	3	57	3		63	E	P 536		3		3
S K 152	11	132	9		152	E	P 537	1	9	6	16
S K 160	23	262	17		302	E	P 538	18	46		64
E P 182	2	4			6	E	P 539	1	19		20
S K 224	12	33			45	E	P 540		4		4
S K 235	10	74			84	S	K 541	7	123	7	137
S K 238	4	32	1		37	E	P 542		6	1	7
S K 248	7	62	25		94	E	B 526	4	32		36
S E 285	2	24			26	S	D 544	1	3		4
S K 310	2	8			10		計	1,729	3,815	175	5,719
S E 321	39	269	10		318		%	30.3	66.7	3.0	100

(2) S D 401大溝出土の土器 (第19図～25図、表5、図版10・11)

S D 401大溝は、幅2.7～4.3m、深さ8～30cm、長さ41m以上の北北西から南南東にかけて長く延びる溝である。埋土は炭化物を多く含む明褐色微砂質粘土の単一土層である。この大溝の南半から土器が集中的に出土した。総破片数が2000点を超え、出土状態からみても比較的短期間の所産と思われるため、本遺構の土器群について少し検討を加えてみる。

S D 401大溝から出土した土器は、須恵器・黒色土器・赤焼土器の三つに大別できる。黒色土器は、内面ないし内外面に黒色化処理が施されている土師器の一種である。本土器群には壺以外に、刷毛目調整を施した甕などの所謂「土師器」の器種が認められないため、便宜上「黒色土器」の名称を用いる。須恵器と赤焼土器は、すべてロクロを成形ないし調整段階で使用しているもので、器種として須恵器には壺・高台付壺・高台付皿・蓋・鉢・壺・甕、赤焼土器には壺・皿・小形甕・甕・壺などがある。

S D 401大溝出土の土器は、胎土・焼成・形態・口縁部の成形法・調整技法などから、3大別13器種49類に細別される。分類基準については、資料として確実に識別し得たものの中から代表的なものを取り出し、実測図と説明の記述を次項以下に掲げる。分類記号は、土器の器種をA～Mまでのアルファベット、器種毎の小類を算用数字で示した。

表5は、各分類毎の土器の点数を数え、組成比率の分析を試みたものである。なお出土点数で接合資料の場合は1、その他は各破片毎に1として計算している。各器種の中で形態が不明な小片については、わかる範囲で点数表下段に掲げた。総点数による須恵器・黒色土器・赤焼土器の百分比率は、それぞれ55.9：0.6：43.5となるが、分類可能な上段による土器の百分比率は79.9：1.3：18.2となり、後者の方が実個体数の比率に近そうである。

表5の中でもう一つ注目されるのは、須恵器壺と高台付壺の底部切り離し手法間の比率である。須恵器壺の場合はヘラ切り279点(84.5%)、回転糸切り51点(15.5%)と、ヘラ切りが圧倒的に多いのに対し、高台付壺の場合はヘラ切り34点(41%)、回転糸切り49点(59%)と比率が逆転する。これに壺A 1類とA 5類・A 2類とA 6類のように底部切り離し手法の差異にもかかわらず器形が共通する事実を加味すれば、本土器群においてはヘラ切り手法と回転糸切り手法が併存し、器種によってその比率が異なることがうかがえる。

つぎにS D 401大溝出土土器群の編年的位置について述べる。本土器群で特徴的なものは、須恵器壺A 2・A 4類、同壺F 1・F 2類、赤焼土器壺I 1類、同甕L 2類などである。A 2・A 4類は体部下半ないし底部周辺が丸味をもつヘラ切り無調整の須恵器壺で、遊佐町地正面遺跡や藤島町平形遺跡D地点などに類例がみられ、平安時代前葉9世紀から10世紀初め頃のものである。F 1類は横瓶、F 2類は肩の張る長頸甕で、8世紀後半から9世紀前半頃の時期が考えられる。L 2類は口縁部が肥厚し斜方向に外反する赤焼土器甕で、

9世紀代頃に属する。L3類は口縁部が膨みを持つもので10~11世紀代に属する。

本土器群は全体としてヘラ切り無調整でやや小形の須恵器环を主体とし、須恵器・赤焼土器の各器種が混るものである。煮沸形態としての甕・堀など赤焼土器が普遍化し、黒色土器は極端に少ない。酒田市東部丘陵にあり城輪柵跡など官衙に須恵器を供給したと考えられる顕瀬山1号窯跡は、8世紀後半から9世紀前葉に位置付けられている。本土器群の須恵器は同窯のものに近いが、环の体部の立上りが弱く底径の小さいことや、蓋の鋸部が未発達なことから、ややこれに後出する時期と考えられる。庄内地方における9世紀中葉の土器として、平形遺跡D地点第3号落ち込みの土器群が、秋田県弘田柵跡第7次調査SK60の土器群との比較などから想定されている。本土器群の須恵器とは环を始め壺F5・F6類、甕G2類など多くの点で類似をもつ。ただし、赤焼土器小形甕や甕の口縁部の形態がまちまちでL3類のように形態的に新しいものも含まれていることから、全体としての時期は9~10世紀というある程度の幅が考えられる。

平安時代の土器の類型化については、製作技法や器形による差が多様であり、「様式」の概念による把握が有効である。本土器群で試みた器種のセット関係や量的分析は、今後他の遺跡との比較をまって「様式」に止揚し得るものである。

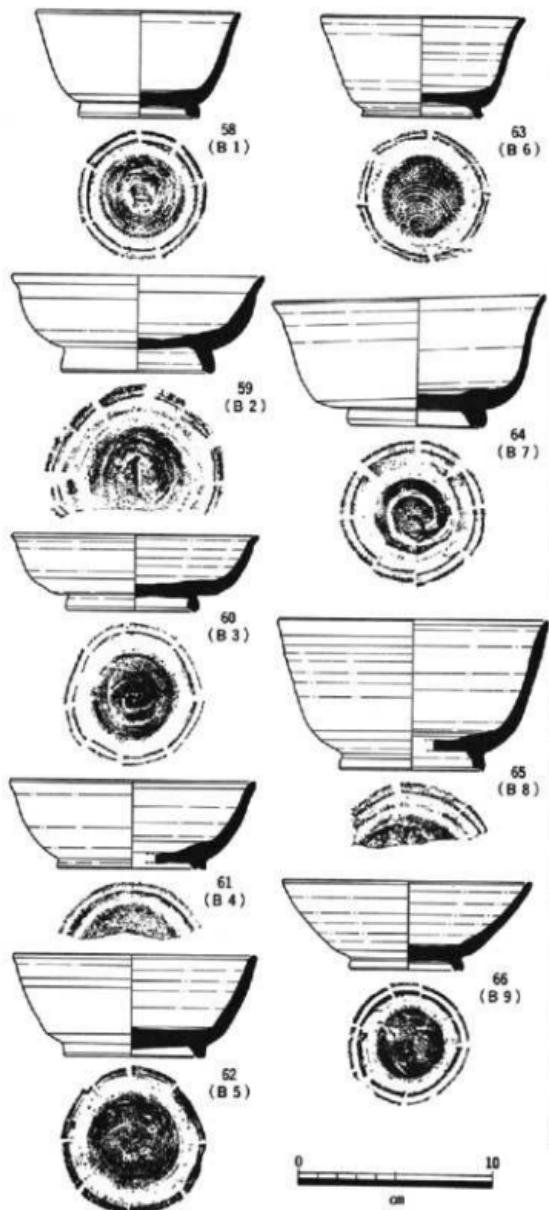
表-5 上ノ田遺跡SD401溝跡出土土器分類別点数表

種別 分類	清 恵 還							黒色 土器	赤 焼 土 器					
	环 A	高台村 环 B	高台村 环 C	甕 D	鉢 E	世 F	更 G		环 H	环 I	鉢 J	小形 甕 K	更 L	堀 M
1	21	2	1	1	4	44	1	3	4	1	2	3	1	
2	51	7		2	1	1	5	1	3	2	6	51	3	
3	15	9		5		14	3		1		3	8	1	
4	26	3		5		5								
5	6	3		6		3								
6	8	3				1								
7	21	3												
8	1	4												
そ の 他	ヘラ切り離し 166 回転糸切り離し 15	ヘラ切り離し 13 回転糸切り離し 36		口縁部・紐 44				9	8		11	19		
分類別小計 (%)	① 330 (47.2)	② 83 (11.9)	③ 1 (0.1)	④ 63 (9)	⑤ 5 (0.7)	⑥ 68 (9.7)	⑦ 9 (1.3)	⑧ 12 (1.9)	⑨ 16 (2.3)	⑩ 3 (0.4)	⑪ 22 (3.2)	⑫ 81 (11.6)	⑬ 5 (0.7)	
	669(180)													
体部破片等	⑭ 579		—	⑮ 47	⑯ 83	—	⑰ 96	—	⑱ 263					
種別小計 (%)	①~⑯ 1268 (55.9)							13 (0.6)	⑰~⑲ 986 (43.5)					
合 计	2267(100)													

分類	種別 番号	計測値 (m/m) 形態・調整技法
A 1	50	口径126 底径77 器高31 ヘラ切りでロクロから切り離し、調整を行なわないものである。 器形は、体部と底部の境界がはっきりし、体部が直線的に立ち上る。
A 2	51	口径128 底径51 器高32.5 ヘラ切りでロクロから切り離し、調整を行なわないものである。 器形は、体部と底部の境界がやや不明瞭で、体部下半がやや丸味をもって立ち上る。
A 3	52	口径130.5 底径66 器高35 ヘラ切りでロクロから切り離し、調整を行なわないものである。 器形は、体部と底部の境界がやや不明瞭で、体部が直線的に立ち上る。
A 4	53	口径120 底径50 器高35 ヘラ切りでロクロから切り離し、調整を行なわないものである。 器形は、体部と底部の境界が不明瞭で、きわめてゆるやかな丸底風になる。
A 5	54	口径(126) 底径(74) 器高35 糸切りでロクロから離し、調整を行なわないものである。 器形は、体部と底部の境界がはっきりし、体部が直線的に立ち上る。底部はやや揚げ底風になる。
A 6	55	口径129.5 底径75 器高38 糸切りでロクロから離し、調整を行なわないものである。 器形は、体部と底部の境界がはっきりし、底部下端が少し丸味をもつ、A 5種よりやや大き目である。
A 7	56	口径127 底径37 器高41 糸切りでロクロから離し、調整を行なわないものである。 器形は、体部と底部の境界がやや不明瞭で、口径に比して底径が小さい。
A 8	57	口径140 底径90 器高53 糸切りでロクロから離し、調整を行なわないものである。 器形は、体部と底部の境界がはっきりし、体部下半がやや膨みをもつ。

*計測値 () 内の数値は図上復元による

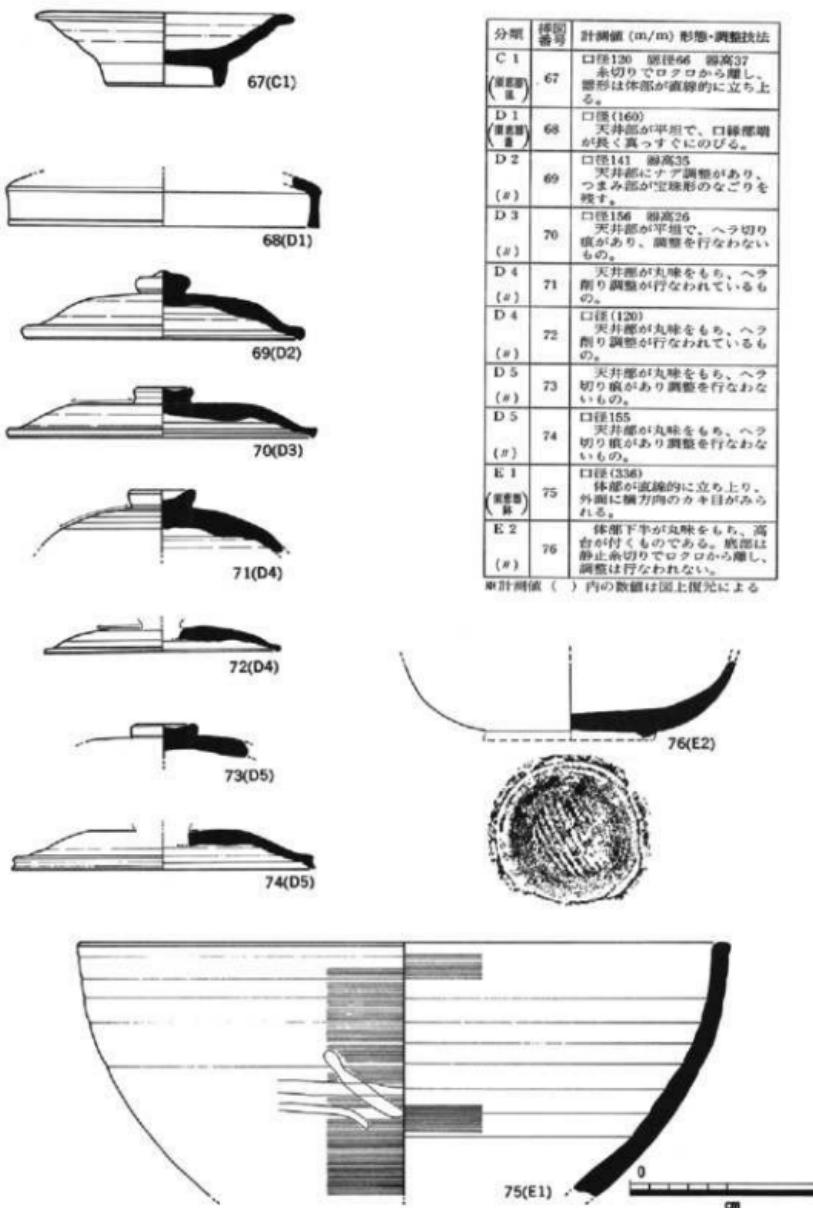
第19図 SD401 大溝出土土器



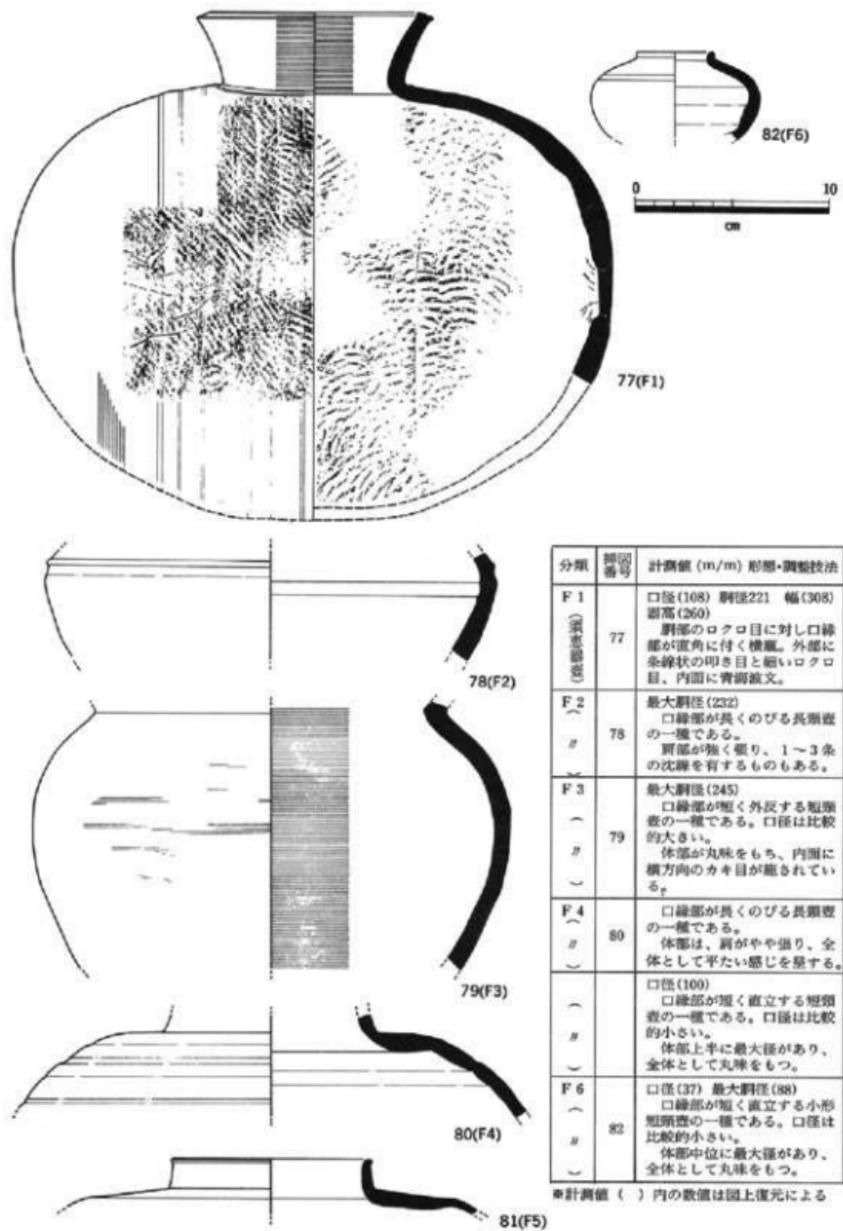
分類	種回 番号	計測値 (m/m) 形態・調整技法
B 1 (須高 底台 器付 所)	58	口径104.5 底径60.5 器高54.5 ヘラ切りでロクロから切り離し、調整を行なわないものである。 器形は、底径に比して口径が小さく、器高が高い。
B 2 ~ ~ ~	59	口径130 底径75 器高50.5 ヘラ切りでロクロから切り離し、調整を行なわないものである。 器形は、体部中位に軽い棱を有する。
B 3 ~ ~ ~	60	口径126 底径65 器高40 ヘラ切りでロクロから切り離し、調整を行なわないものである。 器形は、体部と底部の境界が明瞭で、体部下端に軽い棱を有する。
B 4 ~ ~ ~	61	口径125 底径76 器高46 ヘラ切りでロクロから切り離し、調整を行なわないものである。 器形は、体部と底部の境界が不明瞭で、体部が丸味をもつて立ち上る。
B 5 ~ ~ ~	62	口径126 底径72 器高52 ヘラ切りでロクロから切り離し、調整を行なわないものである。 器形は、体部と底部の境界がはっきりし、体部が直線的に立ち上る。
B 6 ~ ~ ~	63	口径104 底径61.5 器高51.5 糸切りでロクロから離し、調整を行なわないものである。 器形は、底径に比して口径が小さく、器形が高い。
B 7 ~ ~ ~	64	口径140 底径68 器高68.5 糸切りでロクロから離し、調整を行なわないものである。 器形は、底径に比して口径が大きく、器高が高い。
B 8 ~ ~ ~	65	口径138 底径73 器高77 糸切りでロクロから離し、調整を行なわないものである。 器形は、体部と底部の境界がやや不明瞭で、口径が大きく器高が高い。
B 9 ~ ~ ~	66	口径128 底径58 器高45 糸切りでロクロから離し、調整を行なわないものである。 器形は、体部と底部の境界が不明瞭で、体部が丸味をもつて立ち上る。

※計測値 () 内の数値は図上復元による

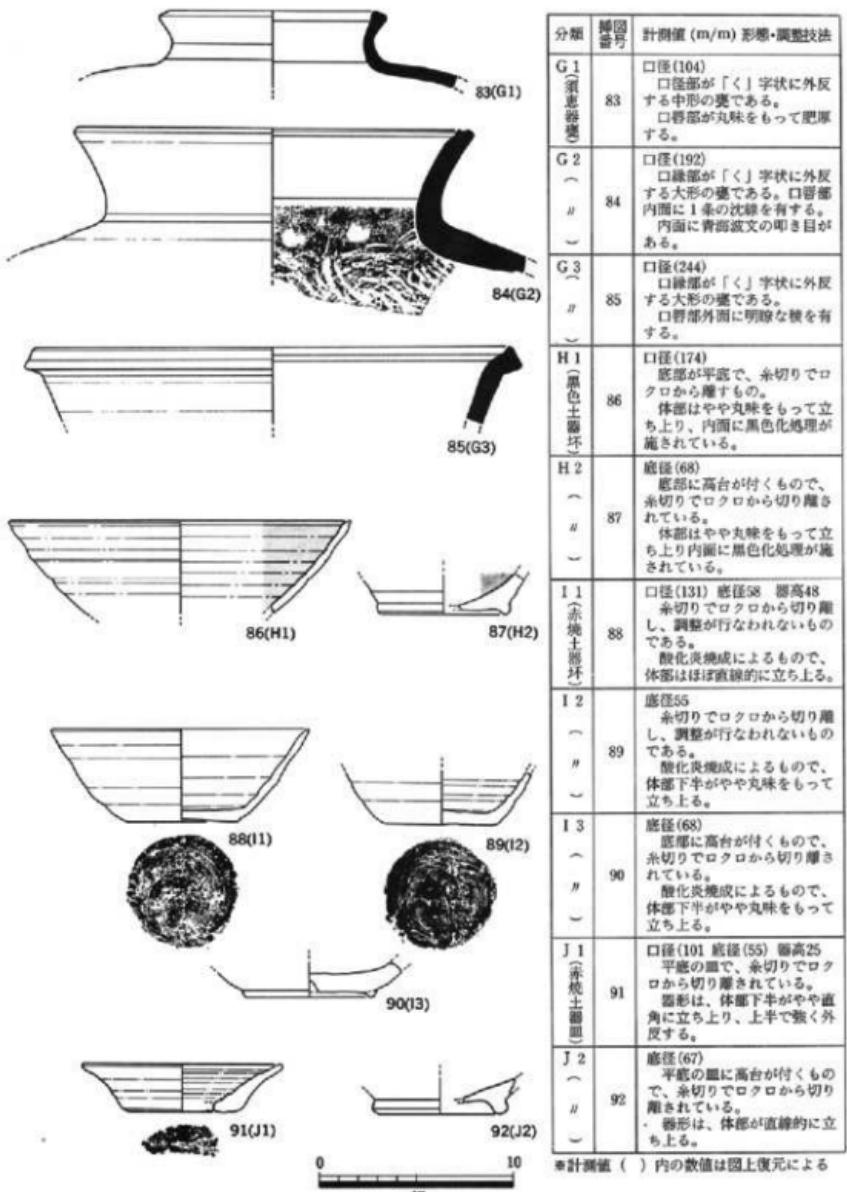
第20図 上ノ田遺跡 S D401 大溝出土土器



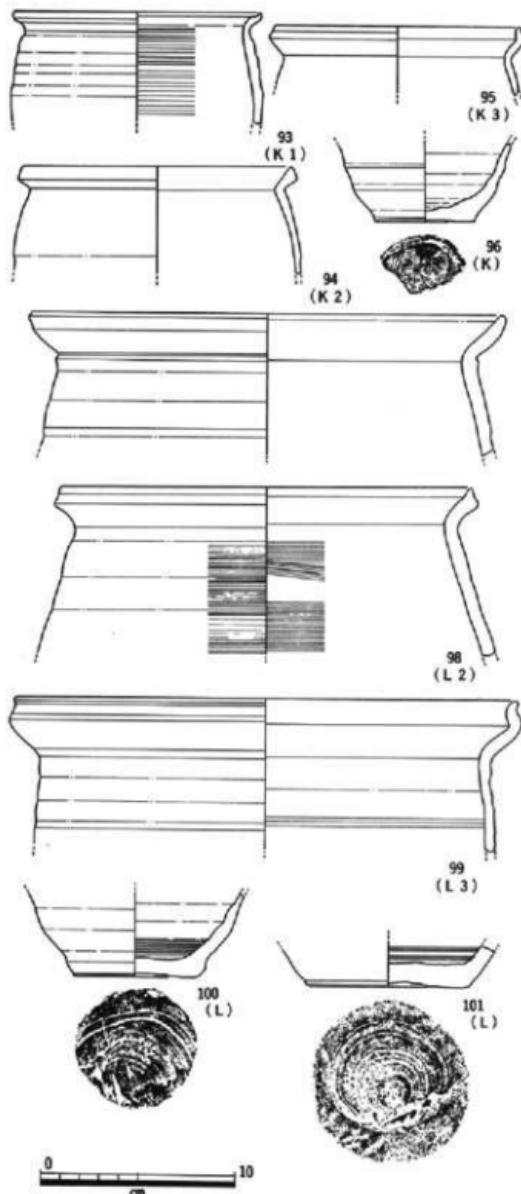
第21図 上ノ田遺跡 SD401 大溝出土土器



第22図 上ノ田遺跡 SD401 大溝出土土器



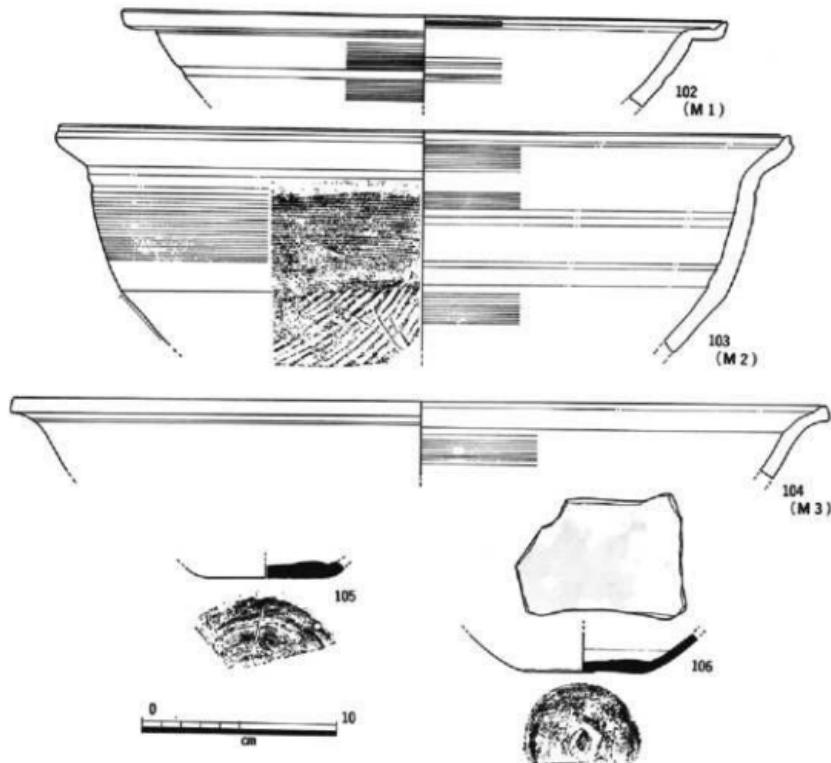
第23図 上ノ田遺跡 SD401大溝出土土器



分類	捕回 番号	計測値 (m/m) 形態・調整技法
K 1 (赤燒土 小形體)	93	口径(127) 酸化炎焼成で、ロクロ使用の小形體である。 器形は、口縁部が強く屈折し、口唇部が上方につまみ出る。
K 2 (ノ)	94	口径(138) 酸化炎焼成で、ロクロ使用の小形體である。 器形は、口縁部が「く」字状に外反し、口唇部が肥厚する。
K 3 (ノ)	95	口径(124) 酸化炎焼成で、ロクロ使用の小形體である。 器形は、口縁部が垂みをもって立ち上り、口唇部外面に一条の窪みを有する。
K (ノ)	96	底径(50) 酸化炎焼成で、ロクロ使用の小形體である。 底部は、糸切りでロクロから切り離されている。口縁部の形態は不明である。
L 1 (赤燒土 長胴體)	97	口径(40) 酸化炎焼成で、ロクロ使用の長胴體である。 器形は、口縁部が「く」字状に外反し、頸部に軽い沈線を有する。
L 2 (ノ)	98	口径(210) 酸化炎焼成で、ロクロ使用の長胴體である。 器形は、口縁部が「く」字状に外反し、口唇部が肥厚する。
L 3 (ノ)	99	口径(256) 酸化炎焼成で、ロクロ使用の長胴體である。 器形は、口縁部が垂みをもって立ち上り、口唇部外面に1条の窪みを有する。
L (ノ)	100	底径63 酸化炎焼成で、ロクロ使用の中形體である。 糸切りでロクロから切り離し、調整は行なわれない。
L (ノ)	101	底径81 酸化炎焼成で、ロクロ使用の長胴體である。 糸切りでロクロから切り離し、調整は行なわれない。

*計測値 () 内の数値は図上復元による

第24図 上ノ田遺跡 S D 401 大溝出土土器



第25図 上ノ田遺跡 S D 401大溝出土土器

分類	押回番号	計測値 (m/m) 形態・調査技法
M 1 (赤燒土器場)	102	口径 (310) 酸化炎焼成で、ロクロ使用の鍋である。器形は、口縁部が強く屈折し、口唇部が上方につまみである。頸部外面に1条の沈継があり、体部外面にロクロ使用のカキ目が施されている。
M 2 (")	103	口径 (375) 酸化炎焼成で、ロクロ使用の鍋である。器形は、口縁部が「く」字状に外反し、口唇部が肥厚する。口唇部内面に1条の沈継があり、体部上半にカキ目、下半に条継状の叩き目が施されている。
M 3 (")	104	口径 (416) 酸化炎焼成で、ロクロ使用の鍋である。器形は、口縁部が強く外反する。体部内面に横方向のロクロ使用によるカキ目が施されている。
(須恵器壺)	105	底径 (62) 底部がへラ切りでロクロから切り離されている須恵器壺である。色調は灰黄褐色で、胎土に粗砂を混入する。底部外圍に「×」様の擦剣がある。
(")	106	底径 (62) 底部がへラ切りでロクロから切り離されている須恵器壺である。色調は青灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。底部内面に茶褐色の漆が付着している。

※ 計測値 () 内の数値は図上復元による。

第25図105は、底部に「×」様のヘラ描きの記号を持つ須恵器壺である。S D 401大溝からはこれ1点のみである。同図106は、底部内面に茶褐色の漆が付着している須恵器壺である。いずれも底部の切り離しがヘラ切り手法によるものである。

(3) 墨書き土器 (第26~28図, 表6, 図版12・13)

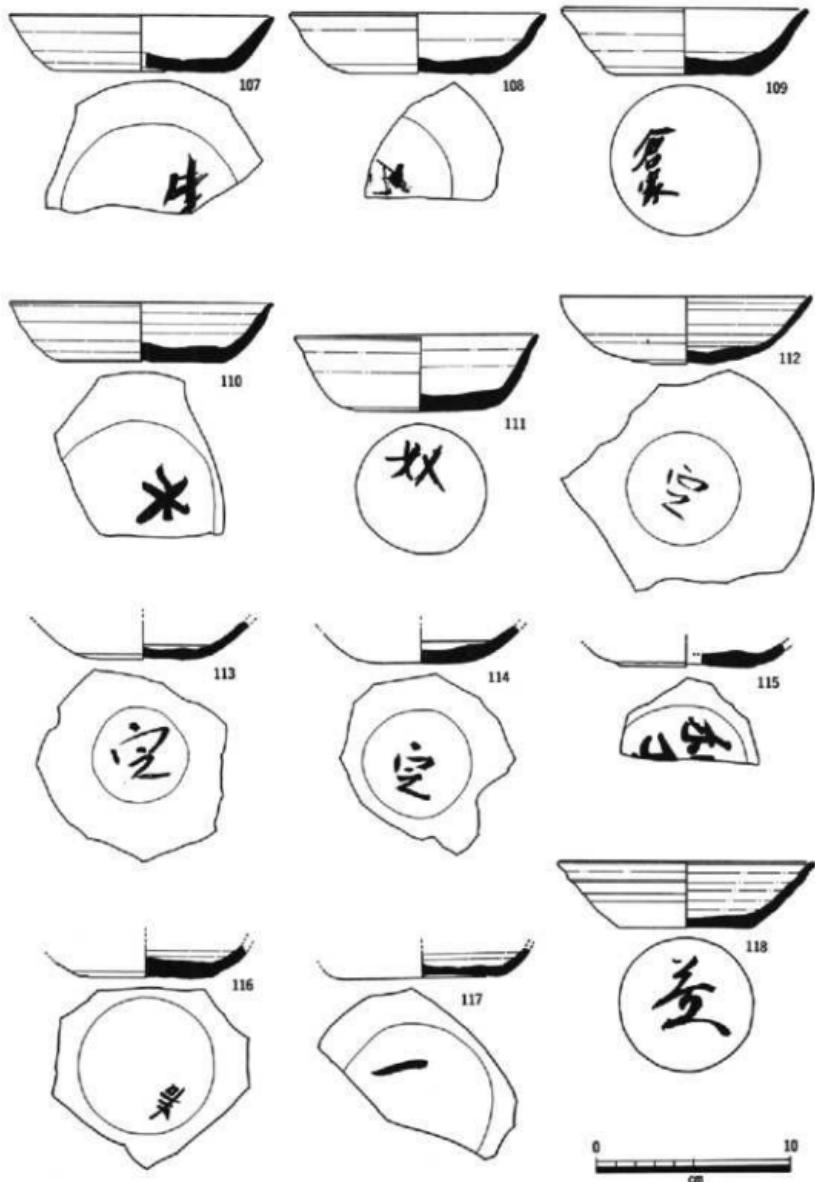
墨書き土器は、1次調査で検出された土器、大溝、精査区II・III層から出土しており、すべて須恵器である。判読可能なもの29点、判読不能なもの4点、墨痕があるもの1点、総計34点である。

SK'I 土器 1・2層から3点出土しており、墨書きは〔木〕カ、□、それと判読不能なもののが1点の、計3点である。

表-6 上ノ田遺跡出土墨書き土器・須恵器 (第26・27・28図)

擇別 番号	器 形	計 溝			色 調	胎 土	焼 成	底部切り離 し技法	調整技法	墨書き 部位	出土地点・層位	墨書き名・ (備考)	
		口 径	底 径	器 高									
107	环	(135)	(96)	29	灰 色	良	良	ヘラ切り	ロクロナゾ	底部	S D401・F1	(中)カ	
108	〃	(130)	(74)	31	灰 色	良	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
109	〃	124	76	35	暗灰色	小織混	〃	〃	〃	〃	〃	倉(家)カ	
110	〃	(134)	(90)	31	灰 色	小織混	〃	〃	〃	〃	〃	(水)カ	
111	〃	125	67	41	灰 色	良	〃	〃	〃	〃	〃	(奴)カ	
112	〃	32	36	灰 色	小織混	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(完)カ	
113	〃	46	46	灰 色	良	〃	〃	〃	〃	〃	170~175~65~70・II	(完)カ	
114	〃	54	54	灰 色	〃	〃	〃	〃	〃	〃	S D401・F1	(完)カ	
115	〃	(74)	白灰色	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	未(丁)カ	
116	〃	70	灰 色	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	
117	〃	79	灰 色	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	
118	〃	130	70	35	白灰色	〃	〃	回転糸切り	〃	〃	〃	—	
119	〃	132	72	37	灰 色	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(善)カ又	
120	〃	(126)	(46)	44	暗灰色	〃	〃	〃	〃	〃	S K1・F1・2	(木)カ	
121	〃	(61)	暗灰色	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	
122	〃	(60)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	
123	〃	52	素灰色	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	S D401・F1	(京)カ	
124	〃	52	灰 色	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	作	
125	高台付环	(118)	67	41	暗灰色	〃	〃	ヘラ切り	〃	〃	〃	(底部墨拭・底用器)	
126	〃	88	〃	粗砂混	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(白)カ	
127	〃	78	灰 色	良	〃	〃	〃	〃	〃	〃	120~130~60~62・III	—	
128	〃	64	〃	〃	回転糸切り	〃	〃	〃	〃	〃	170~175~65~70・II	(丑)カ	
67	高台付皿	120	60	37	暗灰色	〃	〃	〃	〃	〃	S D401・F1	—	
129	蓋	(152)	灰 色	〃	〃	〃	〃	〃	外 面	〃	〃	—	
130	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	鋸	〃	〃	—	
131	环	〃	白灰色	〃	〃	ヘラ切り	〃	〃	底部	170~175~65~70・II	—	—	
132	〃	(134)	(62)	41	暗灰色	〃	〃	回転糸切り	〃	〃	135~140~70~75・II	田	
133	〃	76	灰 色	〃	〃	ヘラ切り	〃	〃	〃	170~175~70~75・II	(善)カ又	—	
134	〃	(50)	白灰色	〃	〃	回転糸切り	〃	〃	〃	135~140~75~80・II	(中)カ	—	
135	〃	(50)	灰 色	〃	〃	〃	〃	〃	体 部	140~145~70~75・II	—	—	
136	〃	134	52	44	灰 色	粗砂混	〃	〃	〃	〃	160~164~70~74	人	—
137	〃	(140)	〃	〃	回転糸切り	〃	〃	〃	〃	170~175~75~80・II	(里)カ	—	
138	〃	〃	灰褐色	良	〃	〃	〃	〃	〃	140~145~70~75・II	(届)カ	—	
139	〃	〃	(62)	灰 色	〃	回転糸切り	〃	〃	底部	175~180~70~75・II	—	—	

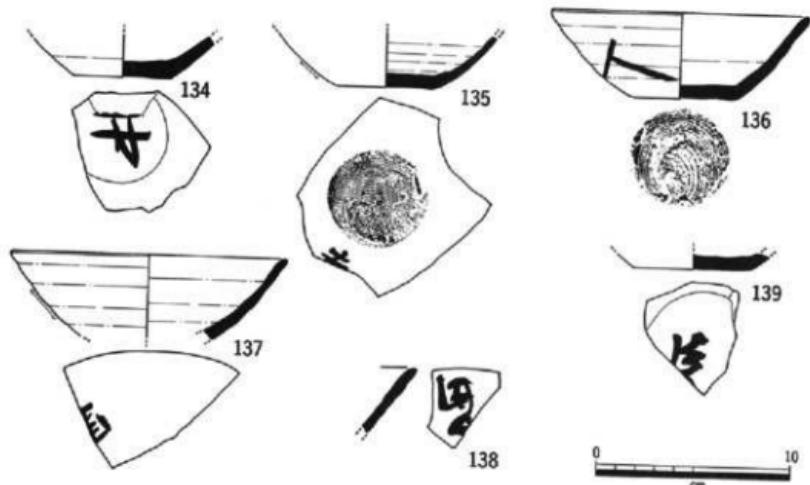
* 計測値()内は図上復元によるものである。



第26図 上ノ田遺跡 墨書き土器



第27図 上ノ田遺跡 墨書き器



第28図 上ノ田遺跡 墨書き土器

北区東辺を南北に縦走する S D 401大溝からは19点出土しており、第26図108の1点だけが判読不能で、他18点は判読可能なものが多かった。

以上、墨書き土器が出土した遺構はSK I 土壙とS D 401大溝のみで、合計22点ある。他は遺構検出面直上より12点出土しているが、精査の際にグリッド毎に取り上げた遺物はまだ未整理のため、これよりも点数の増加があると思われる。

すべて須恵器に墨書きされたものであり、これを器種別に見ると、壺27点、高台付壺4点、高台付皿1点、蓋2点がある。墨書きの部位は、壺の底部が最も多く23点、体部が4点でこのうち、文字が1件に対して倒立した状態で書かれているものが3点ある。高台付壺は4点とも底部である。内1点(第27図125)は、底部に墨痕があり、少し摩滅している事より硯として使用されたものと考えられる。高台付皿も底部に墨書きがある。蓋は、外面が1点と、盤上面が1点ある。

文字は行書体が多い様である。文字の別は「完」が3点、「善文」と「一」と「中」が各2点ある。他は各1点ずつである。一字のものが大部分であり、熟語に「倉家」、「禾口丁」、「善文」などがある。

近年の調査で、遺跡内における墨書き土器の出土例も増加している。出土状況を大まかに見るに、①井戸跡内埋土より出土、②浅い落ち込み状遺構又は土壙より出土、③溝状遺構より出土、④精査区遺構検出面より散乱して出土しているものが知られる。

III 北境遺跡

1 調査の概要 (第29・30図、図版14)

北境遺跡は、酒田市街の北東9km、北境部落のすぐ西脇に位置する。戦後まもなくの土地改良事業の際に須恵器などが発見されたことによってわかったもので、昭和38年に発行された『山形県遺跡地名表』にも「境遺跡」の名称で平安時代の集落跡として登録されている。なお本遺跡からは繩文時代晚期の遺物も少量出土するようである。

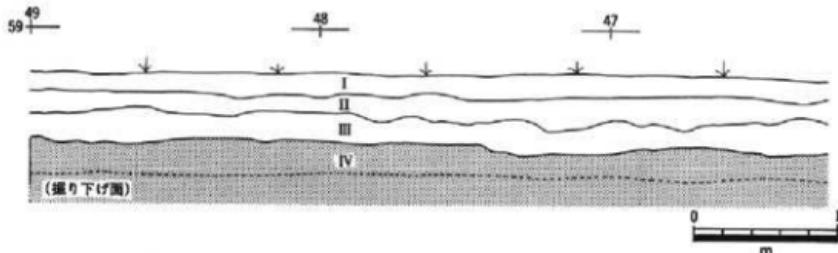
地形的には庄内北部河間低地と出羽丘陵との接点にあたり、標高13~14mを測る。遺跡の中央を新井田川が西流し、その両岸の発達の弱い自然堤防上に立地する。

この地域に昭和53年から県営は場整備事業(東平田地区)と、国道345号線道路改良事業がかかるうことになり、県教育委員会が関係諸機関と協議した結果、昭和53年度に緊急発掘調査を行うことになったものである。調査は山形県教育委員会が主体となり、酒田市教育委員会の協力を得て、昭和53年6月19日から同年7月27日まで実施した。当初、新井田川を境にして北側を北境A遺跡、南側を北境B遺跡と分けて考えたが、調査の結果両遺跡は同一のものとわかったので、本章では両地区を一括して北境遺跡として報告する。

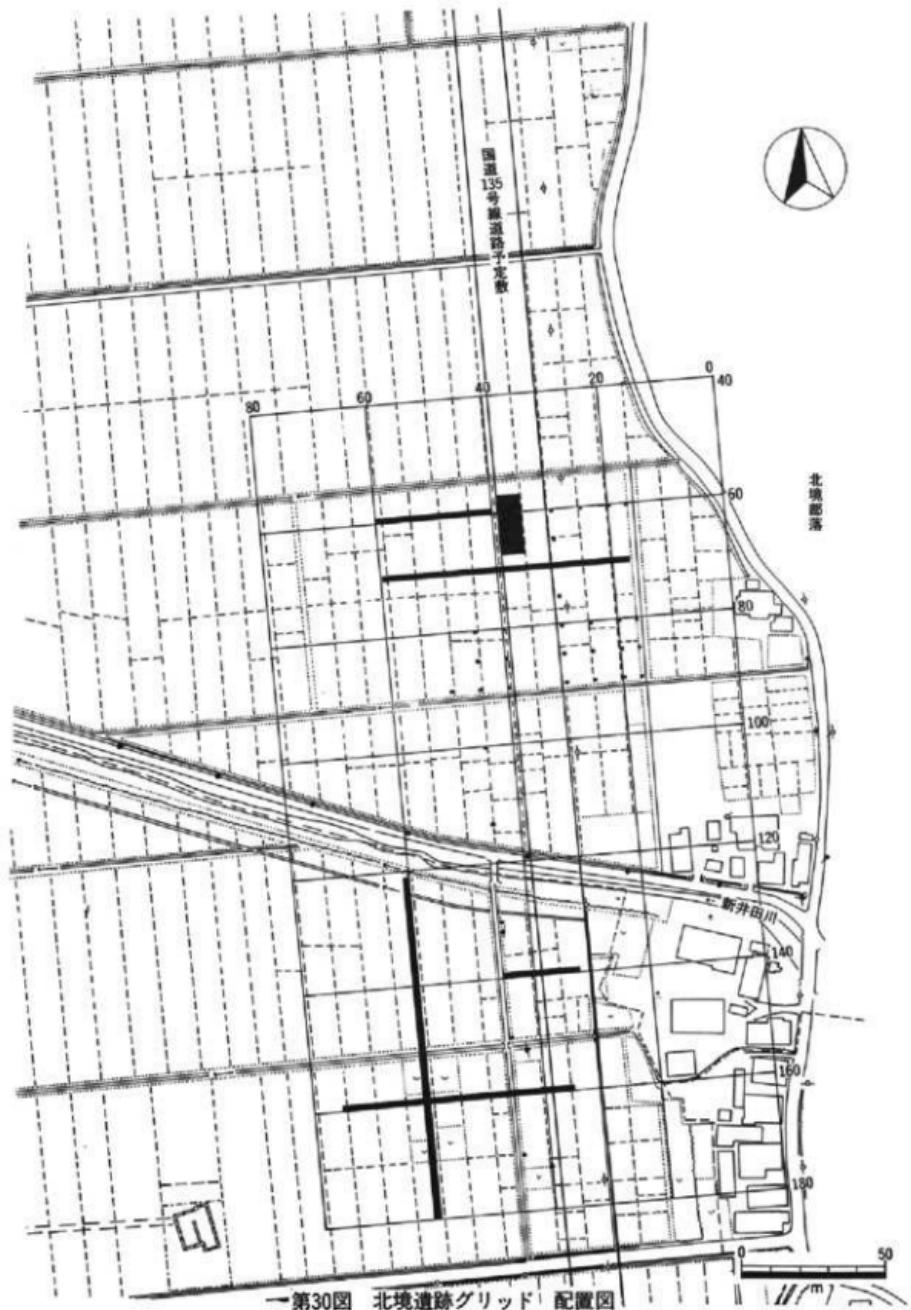
発掘区は磁北に合わせて2m単位のグリッドを東西80m、南北140mの範囲に設定した。初めに10m毎の交点を1m四方で坪掘りし、つぎに2m幅のトレンチを5本掘り下げた。各地区とも第Ⅲ層を主体に赤焼土器や須恵器片が少量づつ出土するが、遺構はまったく認められない。土器も摩滅が著しく、山側からの流れ込みによる再堆積の可能性が強い。

遺跡の基本的な層序は以下の通りである。地形は東から西に緩やかな傾斜を示す。

第I層	茶褐色耕作土	砂分を少量含む水田耕作土で、15cm程の厚さで均一に分布。
第II層	暗褐色微砂	厚さ10~20cm、粘性があり遺物はほとんど含まない。
第III層	黒褐色粘質土	炭化物・遺物を少量含む平安時代の包含層。
第IV層	暗灰褐色微砂	有機物を含む無遺物層。



第29図 北境遺跡 土層図



—第30図 北境遺跡グリッド 配置図

2 出土した遺物 (第31図、図版15)

北境遺跡から出土した遺物には、須恵器・赤焼土器・中世陶器などの土器類と古銭2枚加工を施した石2点がある。量的には表7にみるように赤焼土器がもっとも多い。

須恵器は底部切り離しがヘラ切り手法によるもの(第31図1~3)が特徴的で、時期的には9世紀代、平安時代初頭頃が想定される。赤焼土器は环・甕などの器種(同図7~10)があり10世紀代、黒色土器(11)もこれと同時期であろう。他に灰釉陶器、珠洲系の中世陶器なども少量あり、鎌倉時代以降の遺物も存在することがわかる。

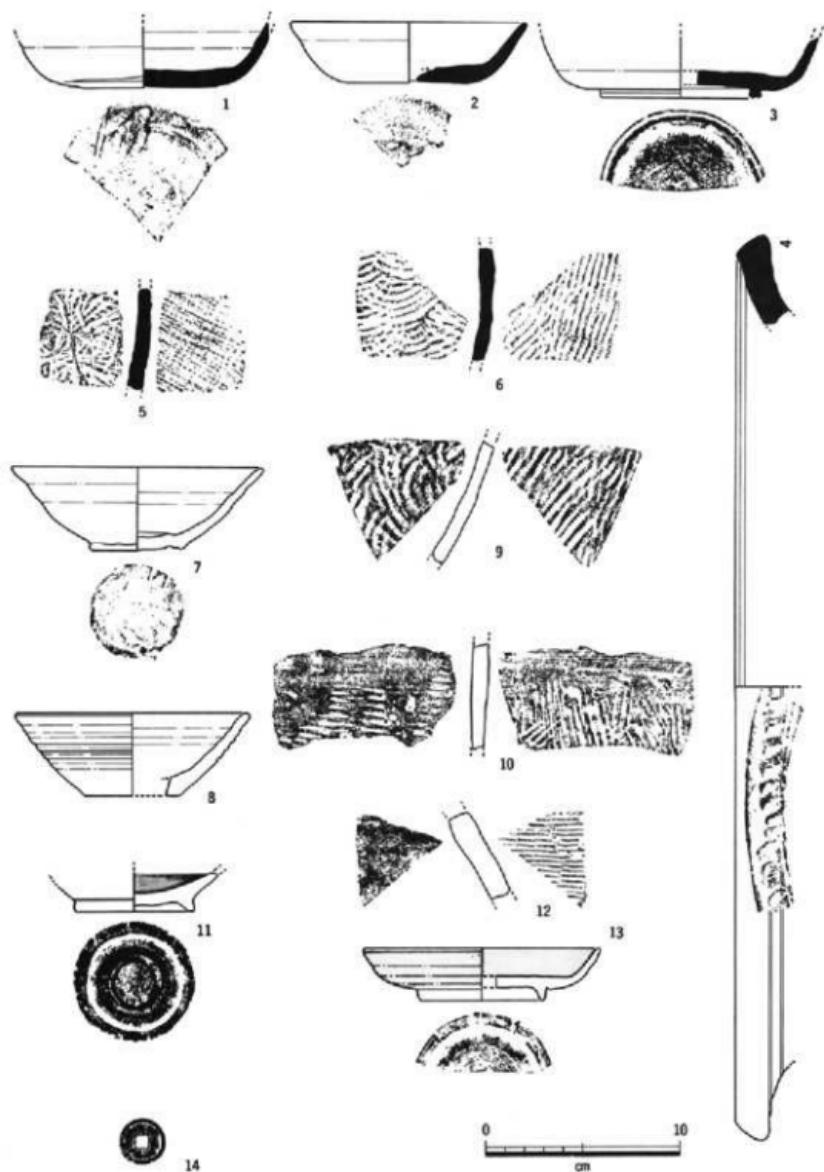
表-7 北境遺跡出土土器片点数表

種別	須恵器	赤焼土器	黒色土器	中世陶器	近世以降の陶磁器	計
計	83	441	4	2	13	543
(%)	(15.3)	(81.2)	(0.7)	(0.4)	(2.4)	(100)

表-8 北境遺跡出土遺物観察表

器種	種別	標番号	計測値(m/m)	形態・成形手法の特徴	他	出土地点・層位
須 恵 器	环	1	底径78	体部下半に丸味を持つ。体部内外面にロクロナデ。底部ヘラ切り。焼成・胎土、良。灰色。		45~50~59・III
		2	口径(122)器高31 底径(72)	体部下半に丸味を持つ。体部内外面にロクロナデ。底部ヘラ切り。焼成良。粗砂を多く含む。暗灰色。		55~60~59・III
	高台付 环	3	底径(82)	腰部に丸味を持つ。体部が外反ぎみに立ち上る。付け高台。底部ヘラ切り。焼成良。粗砂を多く含む。暗灰色。		50~55~59・III
		4	口径(45)	口縁部外面に板の様なものでの割れ文様。幅7~9mm。口唇部内面下端に幅1cmのくぼみ。焼成・胎土、良。一部自然釉。青黒色。		42~45~69・III
	甕	5		体部外面に幅2mm/mの格子目状タタキ。体部内面に菊花状のアテ痕。胎土・焼成、良。外面墨黒色。内面灰色。		46~50~69・II
		6		体部外面に幅3mm/mの格子目状タタキ。体部内面に青灰波文のアテ痕。胎土・焼成、良。暗灰色。		65~130~140・青灰色砂利層
	赤 焼 土 器	7	口径(127)器高43 底径49	体部に丸味を持ち、口縁部が外反する。外面にロクロナデ。底部回転糸切り。焼成良。石英砂含む。明赤褐色。		65~130~135・青灰色砂利層
		8	口径(121)器高42 底径(50)	体部がやや丸味を持ち立ち上る。体部外面に幅1cmで三条の沈線がある。底部回転糸切り。焼成良。粗砂混む。明黄褐色。		65~130~135・青灰色砂利層
		9		体部外面に幅3mm/mの格子目状のタタキ。体部内面に格子目状と半円状のアテ痕。焼成、肥土、良。黄褐色。		17~20~69・II
	甕	10		体部外面、上半に横位の縦状痕、下半に条線状のタタキ。体部内面、上半に横位のナデ、下半に横位の条線状アテ痕。焼成・肥土、良。外面茶褐色、内面黒褐色。		32~45~140・III
黒 色 土 器	高台付 环	11	底径61	内面ヘラミガキ、炭素吸着。底部、回転糸切りの後高台を付し、内部を幅1.3cmでヘラ状工具でナデ調整。明茶褐色。		65~130~140・
珠洲系 陶 器	甕	12		肩部。外面横位の条線状タタキ。内面横位のナデ。素地赤茶褐色。外面自然釉、黒褐色。内面茶褐色。		45~50~69・II
灰 釉 陶 器	高台付 皿	13	口径(122)器高27 底径(82)	銀投球陶器。外面に淡緑釉。底部ロクロケズリ。素地灰色		45~50~54・III
金 属 製 品	古銭	14	径24 厚さ0.9 内孔6.6	寛永通宝。暗黄緑色。		20~25~69・III

*計測値。()内の数値は図上復元によるものである。



第31図 北境遺跡 出土遺物

IV 桶掛遺跡

1 調査の概要 (第32図、図版16)

桶掛遺跡は、酒田市街の北東9.7km、八幡町法連寺部落の南方300mに位置する。付近から耕作中に遺物が出ることは古くから知られていたが、正式に埋蔵文化財包蔵地として登録されたのは昭和49年のことになる(註1)。

地形的には庄内北部河間低地と出羽丘陵とのほぼ接点にあたり、標高14~15mを測る。本遺跡の西隣には、旧建築部材を利用した平安時造の笈地業などをもつ国指定史跡『堂の前遺跡』(註2)や、同時期の掘立柱建物跡8棟などを検出した後田遺跡(註3)がある。

この地域に昭和52年から農村基盤整備総合パワロット事業(庄内地区)がかかることになり、県教育委員会が関係諸機関と協議した結果、昭和53年度に緊急発掘調査を行うことになったものである。調査は山形県教育委員会が主体となり、八幡町教育委員会の協力を得て、昭和52年7月11日から同年7月29日の実質14日間実施した。

発掘区は真北に合わせた2m四方のグリッドを単位とし、各呼称は隣接する堂の前遺跡のグリッド名をそのまま延長して用いた。範囲は東西250m、南北350mにのぼる。当初50m毎の交点を4m四方に坪掘りし遺跡の範囲確認を行い、つぎに遺物の比較的多い北半部に重機械を用いて4m幅のトレンチを6本掘り下げた。各地区とも遺物や遺構らしいものが少しずつ出土するが、調査期間の関係からその多くは平面プランの確認段階に留まり、精査完了地区は200m²のみである。

遺跡の基本的な層序は、上から順に第I層(茶褐色耕作土)、第II層(灰黒色粘質土)、第IIIa層(黒褐色粘質土)、第IIIb層(暗褐色粘質土)、第IV層(青灰色シルト)となる。IIIa・IIIb層が遺物包含層で、IIIb層は厚さ5cm程の文化層面ともいえる。II・IV層は無遺物層で、IV層は各遺構の壁や底面を形成する。地層は北西から南東にかけて傾斜を示す。

(註1) 山形県教育委員会1974 「庄内広域當農田地農道整備事業開通道路分布調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第1集

(註2) 山形県教育委員会1980 「堂の前遺跡昭和53.54年度調査略報」 山形県埋蔵文化財調査報告書第30集

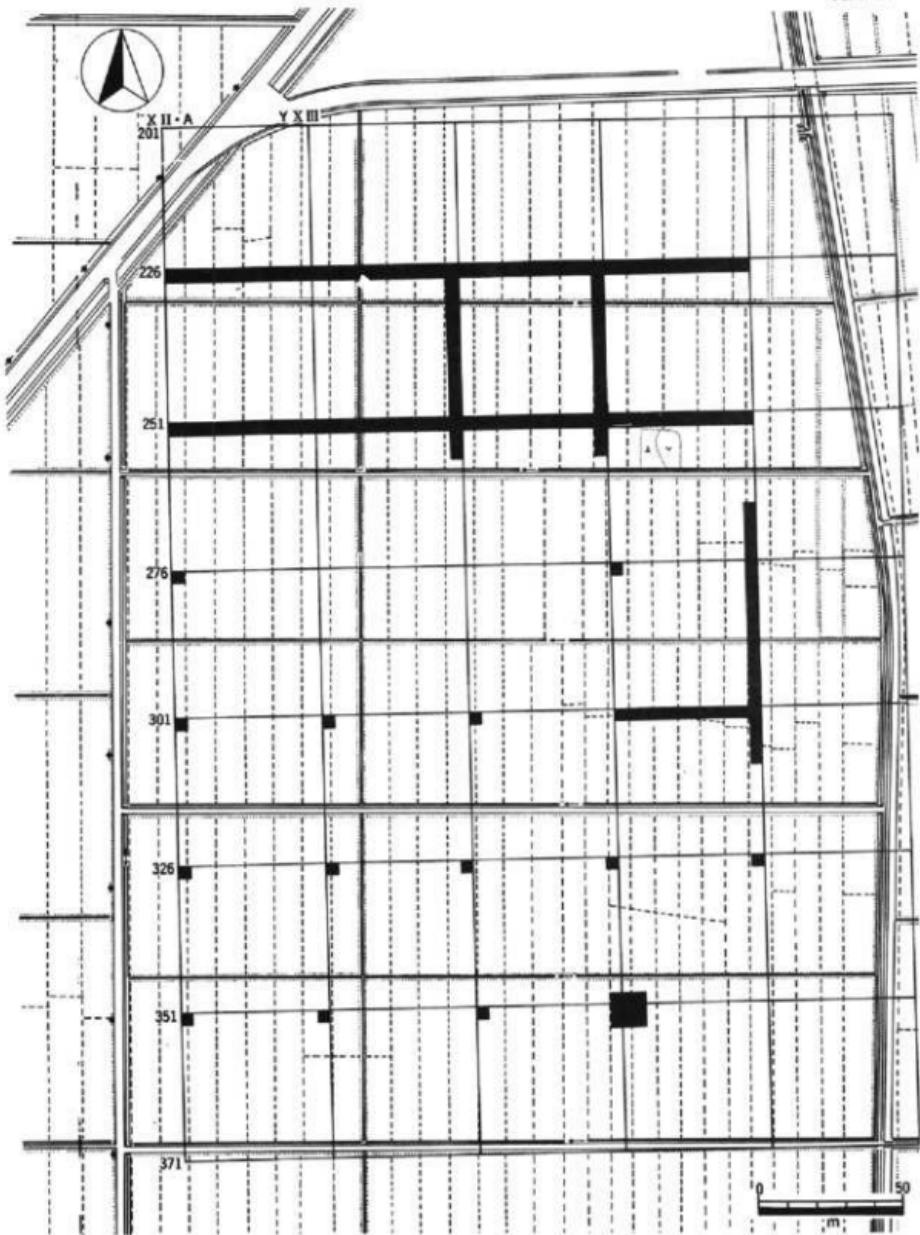
(註3) 山形県教育委員会・八幡町教育委員会1978 「後田遺跡発掘調査現地説明会資料」

2 発見された遺構と遺物 (第33~36図、図版16~19)

桶掛遺跡で発見された遺構には、掘立柱建物跡2棟、溝状遺構8条、土壙墓7基などがある。出土遺物のうち土器片の種別毎の絶対数は表-9のようになる。

表-9 桶掛遺跡出土土器点数表

種別	縄文式土器	須恵器	赤焼土器	黒色土器A類	黒色土器B類	中世陶器	近世以降の陶磁器	計
計(%)	3(0.6)	83(16.6)	351(70.4)	2(0.4)	2(0.4)	18(3.6)	35(7.0)	499(100%)



第32図 橋掛遺跡 グリッド配置図

S B 15・16建物跡 (第33図) 発掘区南端XIV X～X V D-353・354Gで検出された掘立柱建物跡である。S B 15建物跡は、桁行4間×梁行2間の東西棟で、柱間は桁行で1.2m(4尺)～2.1m(7尺)、梁行で1.6mを測る。主軸の方向は真東に対し11度北に傾く。S B 16建物跡は、桁行2間×梁行1間の南北棟で、柱間は桁行で1.5m(5尺)～1.8m(6尺)、梁行で1.8m(6尺)を測る。主軸の方向はほぼ真北を指す。柱穴の掘り方は径30～50cmの円形ないし橢円形を呈し、埋土は炭化物を含む黒褐色粘質土である。建物跡の時期は柱穴が未掘に終ったため明らかでないが、この地域から珠洲系陶器の擂鉢片(第36図13～18)などが多く出土していることにより、15世紀代室町時代頃とも考えられる。

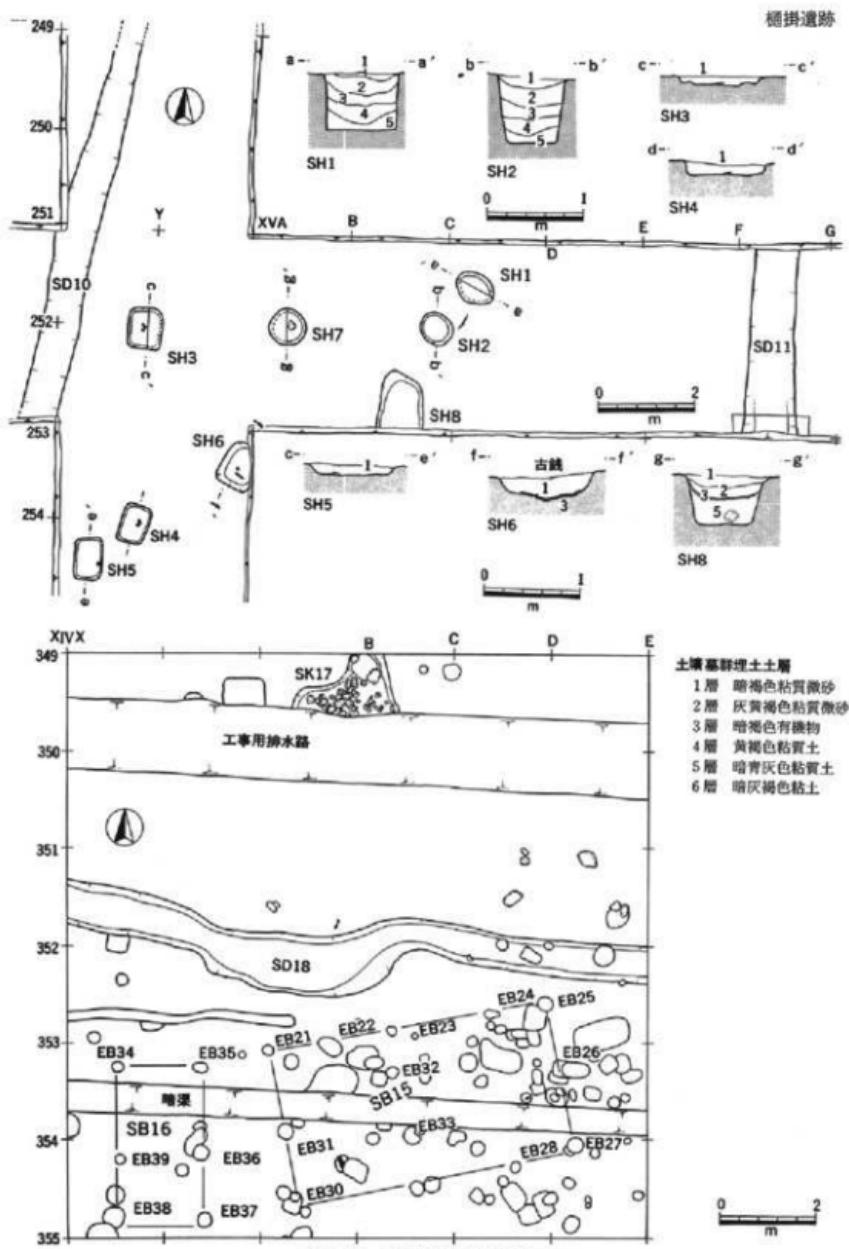
S H 1～6・8土壤墓 (第33図、図版16・17) 発掘区北東部XIV X～X V C-251～254Gで検出された7基の土壤群である。各土壤とも地表下約50cmで発見され、第VI層青灰色シルトを掘り込んで作られている。平面形は円形を呈するもの(S H 1・2・8)と隅丸方形を呈するもの(S H 3～6)の2種類があり、大きさは長径70～95cmを測る。遺構確認面から底面までの深さは、円形の土壤が50～70cmと深く、隅丸方形の土壤が8～22cmと浅い。

埋土も前者が暗褐色粘質微砂→有機物層→暗青灰色粘質土を基本とするのに対し、後者は炭化物と灰・有機物を含む暗褐色粘質微砂の单一土層と異なっている。S H 6 土壤からは、人骨と歯の一部が底面にある簾状の敷物の直上で発見されており、またその他の土壤の埋土にも灰や炭化物が混入していることから、これらは土壤墓としての性格が考えられる。葬法が土葬によるものか火葬によるものは明らかでないが、焼土がまったくみられないことやS H 1 土壤の埋土から下駄、S H 2 土壤から木片が出土していることなどから土葬の可能性が強い。

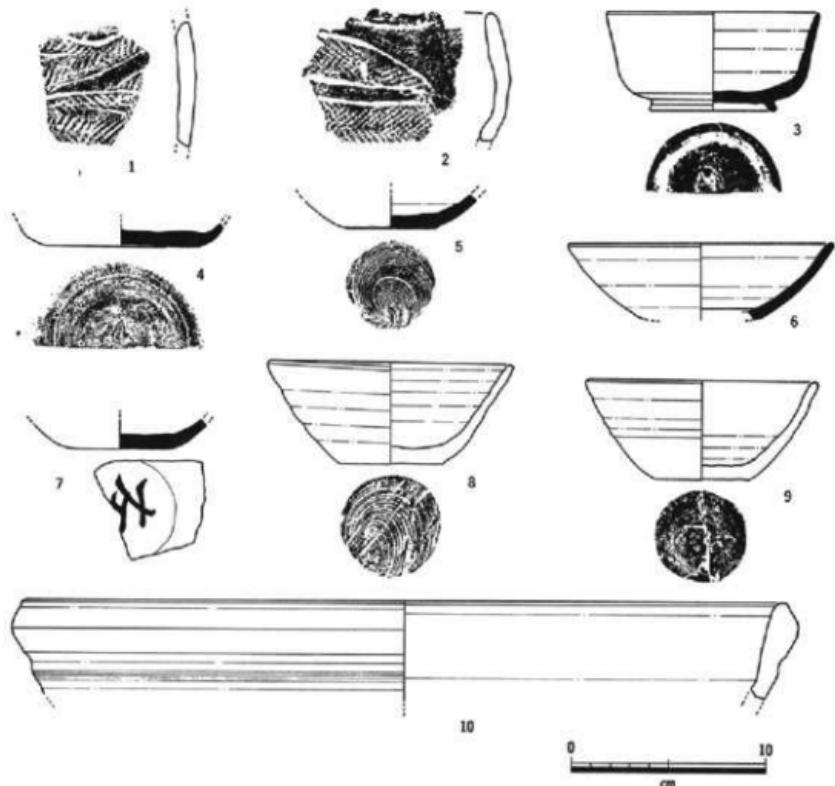
隅丸方形を呈する4基の土壤からは、古銭が計36枚出土している(第35図、図版19)。各土壤毎の出土枚数は、S H 3(6枚)・S H 4(18枚)・S H 5(9枚)・S H 6(3枚)と3の倍数を基準にしている。6文銭埋置の儀礼も想定できよう。

古銭の種類は16種あるが、太平通宝を清代でなく北宋の太平興國2年(977)と考えればすべて中国の初唐(621年)から明代(1408年)までの渡来銭である(表10)。古銭の初鋤年代から単純に土壤の年代をみた場合、土壤毎の時期的な新旧関係も想定し得るが他に伴出遺物もない現段階では、各古銭の中でもっとも新しい永樂通宝の時期(1408年)をもって時期的な上限とすることが妥当である。前述した掘立柱建物跡付近から出土する珠洲系陶器の15世紀という年代もほぼこれらに合致する。

撚掛遺跡の主たる遺構の時期は15世紀代室町時代頃と考えられるが、同遺跡からは縄文時代後期中葉の土器(第34図1・2)や平安時代前半の須恵器・赤焼土器(同図3～10)、近世陶磁器も出土している。特に堂の前遺跡との関連で平安時代の土器群は注目される。



第33図 桶掛遺跡遺構平面図

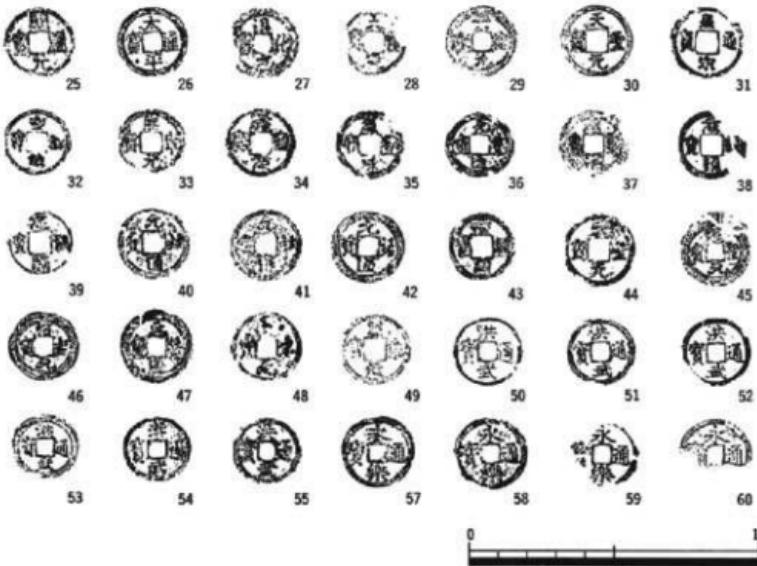


第34図 構掛遺跡 出土遺物

表-10 構掛遺跡出土古錢一覧表

拂回番号	銭種	初鑄年	(西暦)	出土地點	登録番号
25	開元通寶	唐 武德4年、南唐	(621・966)	S H 4	RM31
26	太平通寶	北宋 太平興國元年	(976)	S H 4	RM27
27	淳化元寶	〃 淳化元年	(990)	S H 6	RM15
28	景德元寶	〃 景德元年	(1004)	S H 4	RM33
29	天禧通寶	〃 天禧年間	(1017~1021)	S H 4	RM20
30	天聖元寶	〃 天聖元年	(1023)	S H 4	RM22
31	皇宋通寶	〃 宝元2年	(1039)	S H 3	RM 1
32	至和元寶	〃 至和元年	(1054)	S H 4	RM29
33	熙寧元寶	〃 熙寧元年	(1068)	XV・T-301・II	RM14
34	熙寧元寶	〃	(〃)	S H 4	RM24
35	元豐通寶	〃 元豐元年	(1078)	S H 5	RM 5
36	元祐通寶	〃	(〃)	S H 5	RM 7
37	元祐通寶?	〃	(〃)	S H 4	RM34
38	元祐通寶?	〃 元祐元年	(1086)	S H 3	RM 4

辨証番号	錢種	初鑄年	(西暦)	出土地點	登録番号
39	元祐通宝	北宋 元祐元年	(1086)	SH 5	RM 9
40	元祐通宝	〃 〃	(〃)	SH 3	RM 18
41	元祐通宝	〃 〃	(〃)	SH 4	RM 19
42	元祐通宝	〃 〃	(〃)	SH 4	RM 23
43	紹聖元宝	〃 紹聖元年	(1094)	SH 4	RM 35
44	紹聖元宝	〃 〃	(〃)	SH 3	RM 3
45	紹聖元宝	〃 〃	(〃)	SH 3	RM 17
46	紹聖元宝	〃 〃	(〃)	SH 4	RM 21
47	元符通宝	〃 元符元年	(1098)	SH 4	RM 25
48	聖宋元宝	〃 建中靖國元年	(1001)	SH 3	RM 2
49	聖宋元宝	〃 〃	(〃)	SH 4	RM 36
50	洪武通宝	明 洪武元年	(1368)	SH 5	RM 6
51	洪武通宝	〃 〃	(〃)	SH 5	RM 11
52	洪武通宝	〃 〃	(〃)	SH 5	RM 12
53	洪武通宝	〃 〃	(〃)	SH 4	RM 28
54	洪武通宝	〃 〃	(〃)	SH 4	RM 30
55	洪武通宝	〃 〃	(〃)	SH 4	RM 32
56	永樂通宝	〃 永樂6年	(1408)	SH 5	RM 8
57	永樂通宝	〃 〃	(〃)	SH 5	RM 10
58	永樂通宝	〃 〃	(〃)	SH 5	RM 13
59	永樂通宝	〃 〃	(〃)	SH 4	RM 26
60(図版)	? (2枚重複)	?	?	SH 6	RM 16

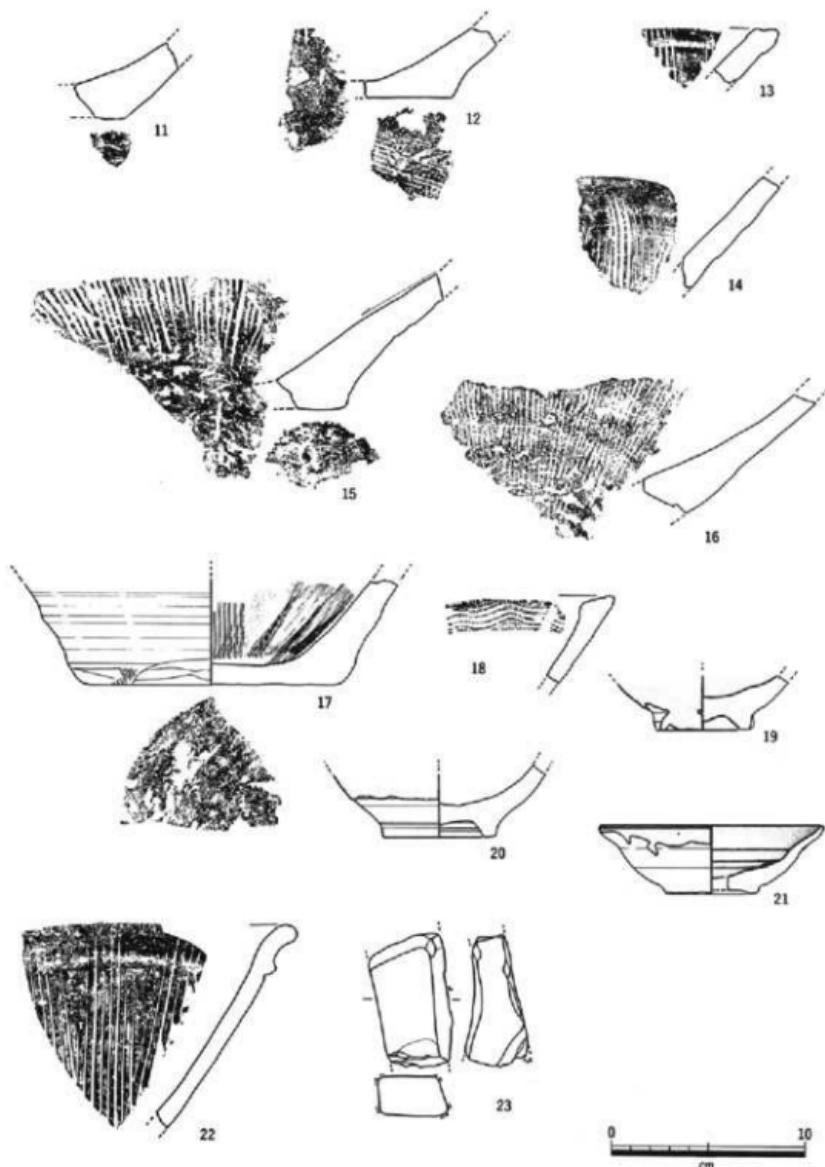


第35図 柵掛遺跡 出土古銭

表-11 積善遺跡出土遺物観察表

器種	屏蔵番号	計測値(m/m)	形態・成形手段の特徴・他	出土地点・層位
縄文式土器	深鉢 1	器厚8.5	体部片。地文はL Rの単節斜繩文を横位羽状に施文。磨消繩文による入組文。外面灰褐色。内面ミガキ。黒色。繩文時代後期中葉。	表面探集
	鉢 2	器厚6~8	口縁部片。被状口縁で、内寄する。口唇部に平行して沈線。地文はL Rの単節羽状繩文を横位羽状に施文。磨消繩文による入組文。外面灰黃褐色。内面一部黒色。小縫を多く含む。繩文時代後期中葉。	表面探集
須恵器	高台付坏 3	口径(108) 器高50 底径(63)	口縁部が外反し、腰部が丸味を持つ。内外面に明顯なロクロナデ。底部へラ切り離しの後、高台を付す。粗砂混。暗灰色。	XII・B-277・IIIa
	坏 4	底径78	底部へラ切り離し。焼成・胎土、良。暗灰色。	XV・V-221・IIIa
坏	5	底径55	回転糸切り離し。焼成・胎土、良。灰色。	XII・C-266・IIIa
	6	口径(138)	体部が内寄し立ち上る。焼成・胎土、良。灰白色。	XII・D-226・IIIa
赤燒土器	坏 7	底径(54)	底部中央に墨書き「左」。回転糸切り離し。灰色。	XII・D-266・IIIa
	坏 8	口径124 器高53 底径52	体部が内寄気味に立ち上り、口縁部が外反する。内外面にロクロ痕。底部回転糸切り離し。小障混。焼成良。赤褐色。	XII・C-266・IIIa
坏	9	口径(96) 器高51 底径47	体部が内寄気味に立ち上る。外面にロクロ痕。底部回転糸切り離し。粗砂混。焼成良。赤褐色。	XII・C-266・IIIa
	10	口径(393)	口縁部外面が丸味を持ちふくらむ。口唇部が丸味を持った後、体部に横位の線条痕。粗砂混。素地赤褐色。外面スス付着。	XII・D-226・IIIa
瓦質土器	鉢 11	器厚15	底部回転糸切り離し。素地明灰色。粗砂混。外腹墨灰色。	XII・B-302・IIIa
珠洲系陶器	盆	器厚16	内面に2条の鉢し目。底面は使用のため磨滅している。底部静止切り離し。小障混。赤茶褐色。	XIV・B-302・IIIa
		器厚12	口唇部に1条の沈線。口縁部外反。内面、口唇部より鉢し目あり。素地明灰色。赤褐色。	XIV・A-350・IIIa
		器厚12	見込みに幅2.1cmに7条の深い鉢し目があり。鉢し目は3単位あり。接する。外面にロクロナデ、スス付着。焼成・胎土、良。暗灰色。	XV・C-350・IIIa
		器厚14	内面を全周して幅太で深い鉢し目あり。1条は約2mm/m幅。底面は使用のため磨滅している。体部外面に沈線。底部切離し不明。焼成・胎土、良。暗灰色。	XV・A-352・IIIa
	鉢	器厚12.5	内面を全周して浅い鉢し目あり。底面は使用のため磨滅している。外面横ナデ。焼成・胎土、良。灰色。	XIII・X-326・IIIb
		底径(134) 器厚12	見込み、底面に幅2.2cmに8条の深目の鉢し目があり、反時計回りに施されている。外腹横位のナデ。一部斜位のナデ。粗砂混。酸化灰焼成のため、素地共に赤黄褐色を呈している。	XV・D-349・IIIa
		器厚7	口唇部はやや肥厚し、内面で丸い棱をもち、波伏文の櫛目(5束)が施されている。内面は白い斑が一箇に浮き出ており自然釉が漂出している。外面・素地暗灰色。	XV・W-301・IIIa
		底径59	削り高台、全面に淡緑色の釉。外腹茶褐色。素地織密、灰色。	XV・V-349・IIIa
円磁器	碗 19	底径59	削り高台、全面に淡緑色の釉。外腹茶褐色。素地織密、灰色。	XV・V-349・IIIa
	20	底径59	削り高台、体部外面に黒色釉。高台底に粗砂・黒色釉付着。外腹茶褐色。素地織密、灰色。	XV・D-349・IIIa
	皿 21	口径(114) 器高31 底径(48)	削り高台。内面及び口縁部外面に淡緑色。腰部が内寄し、口縁部が段を持ち、丸味を持ち外反する。素地緻密、灰色。	XV・A-251・IIIa
石製器	砥石 23	器厚8~11	内面に幅2.9cmに8条の鉢し目あり。見込み部は使用のため磨滅している。口縁部はやや肥厚し外反する。口縁部に山形の棱があり。内外面に茶褐色釉。素地赤褐色。	XV・D-349・IIIa
		残長68 幅3.5 厚さ3.3~17	三面が使用のため磨滅している。上下端が欠損している。	XV・D-301・IIIa

※ 計測値()内の数値は図上復元によるものである。



第36図 桶掛遺跡 出土遺物

V 大日塚・土橋遺跡

1 調査の概要 (第37・38図、図版20・21)

大日塚遺跡と土橋遺跡は、酒田市街の南方7.8km、広野部落のすぐ西側にある。両遺跡とも昭和27年の土地改良事業の際に、須恵器や柱根などが発見されたことによってわかったもので、昭和38年に発行された『山形県遺跡地名表』にも、それぞれ同名で登録されている。大日塚遺跡には、地名にちなんで塚や寺跡があったという伝えもある。

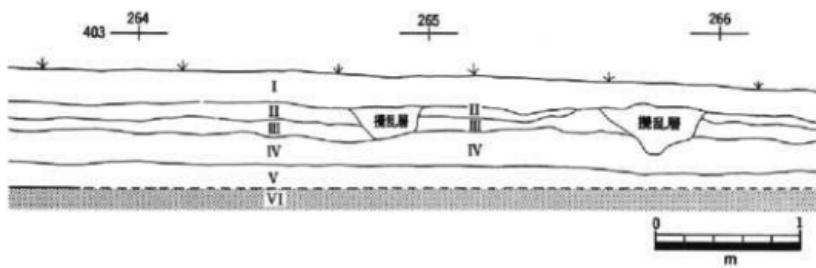
地形的には酒田南部三角洲地域にあたり、標高5~6mの低地である。地目はほとんどが水田と畑地であるが、大日塚遺跡の一部は宅地および道路敷まで延びている。

この地域に昭和52年から県営ほ場整備事業（広野地区）がかかることになり、県教育委員会では分布調査の内容を踏まえ、関係諸機関と協議の結果、昭和52年度に緊急発掘調査を実施することになったものである。調査は山形県教育委員会が主体となり、酒田市教育委員会の協力を得て、昭和52年5月9日から同年6月24日までの延べ34日間にわたって実施した。

磁北に合せて設定した2m幅のトレンチ掘りの結果、両遺跡はほぼ連続して位置することがわかったので、本章では二つの遺跡を一括して報告することにする。

両遺跡の基本的な層序は以下の通りである。遺跡の両方500mを京田川、東方2.4kmを赤川が流れているため、地形は遺跡中央から東西に向って緩やかな傾斜を示す。

第I層	褐色耕作土	水田および畑の耕作土で、20cm程の厚さで均一に分布。
第II層	明褐色シルト	灰褐色シルトのブロックを多量に含み、軟らかい。
第III層	明褐色砂質土	炭化物を少量含み、シルトは含まない。
第IV層	暗褐色粘質土	比較的均一で、下部に酸化鉄を堆積する。
第V層	黒褐色粘質土	炭化物を混入し、やや砂っぽい。
第VI層	灰白色粘質土	泥炭・酸化鉄を含み、やや砂っぽい。



第37図 大日塚遺跡 土層図

2 発見された遺構と遺物 (第39~41図、図版21・22)

大日塚遺跡で発見された遺構には、中世墳墓1基、溝状遺構10条、土壙1基などがある。土橋遺跡は、水田耕作による削平が著しく、遺構・遺物はまったく発見されなかった。

溝状遺構 (第39図) 方向が現水田にほぼ平行に走るもの (SD 5・7~11) と、斜めに走るもの (SD 2~4・6) の二種類がある。埋土も前者が青灰色の砂ないし砂質粘土、後者が褐色ないし暗褐色の粘質土と異なる。溝の幅は0.5~1mまで各様であるが、遺物はSD 2溝跡から中・近世陶器と小形硯 (第14図10) が計3点出土しただけで他はみられない。

溝状遺構のうち前者は昭和になってからの埋跡ないし暗渠跡、後者は大正以前の水利用溝跡と考えられる。

土壙・ピット (第39図) 大日塚遺跡284-371G第IV層面で土壙1基 (SK12)、284-375G第III層面でピット2個 (EP13・14) が検出された。SK12土壙は長径90cmの橢円形を呈し、深さは約20cmを測る。埋土は暗青灰色粘土で、遺物は認められない。EP12・13は径20~30cmの隅丸方形を呈し、深さは5~10cmと浅い。埋土は暗褐色粘土の單一土層で遺物は認められない。土壙やピットの時期も後世のものになる可能性が強い。

SM1墳墓 (第40図、図版21) 大日塚遺跡の調査区北西端263~266-400~403Gで検出された周溝をもつ不整円形の盛土を有する遺構である。水田の耕作により墳丘の上面と周溝南半部が削平されている。大きさは墳丘裾部で直径約3.3m、周溝外壁で東西最大検出径6.2m、南北最大径6.5mを測る。周溝の幅は基底部で60~160cmあるが、南半部は不明確である。

墳丘部分の盛土は地山の第VI層上面に約30cmの高さで認められ、ほぼ3層に分けられる。各層とも骨片や土器片を含み、硬くしまっている。削り出し地業などは認められない。

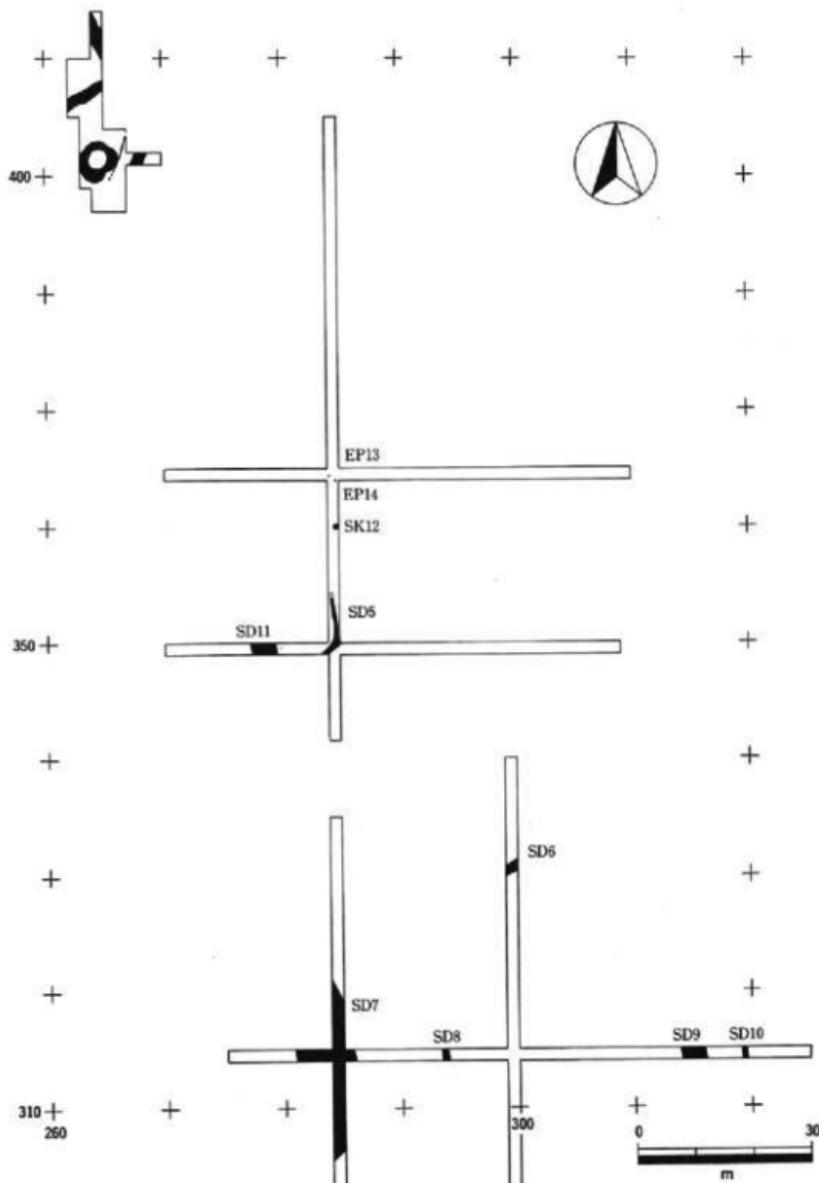
周溝の埋土も3層に大別され、上層とも中層に土器片を含んでいる。ただし周溝南半部の埋土はこれらと異っており、後世の擾乱の可能性もある。盛土1層には河原石を多く含んでおり、本来積石塚的な墳丘があったことも推測される。本遺構のほぼ中心部、地山直上面から骨片が30~40cmの範囲に集中して発見された。すべて細片で部位を直接示すような資料はないが、人間の大脛骨と思われるものもある。

SM1から出土した土器はすべて中世陶器で30片ある。大半が珠洲系陶器であるが、瓷器系の陶器と思われるものも2片ある。珠洲系陶器の器種には、大甕 (第41図1~3) と擂鉢 (同図4・6・7) がある (表13)。瓷器系の陶器の器種には壺と擂鉢がある。第41図6・7は約半個体分残存しているが、その他は小片で個体としてのまとまりは有しない。

これら珠洲系陶器の時期は、石川県珠洲市付近の珠洲系陶器の編年を参考にすればその第IV期にあたり、年代は14世紀代 (南北朝時代) 頃に推定される。瓷器系陶器の時期もこ



第38図 大日塚・土堀遺跡 グリッド配置図



第39図 大日塚遺跡 造構配置図

れとほぼ同様である。

SM 1 の性格としては、珠洲系陶器の大甕や擂鉢を藏骨器として用い、その上や周囲にわずかな河原石を置いて小墳丘を作った中世の火葬墓と考えられる。中世の火葬墓のうちで、周囲に小さな塗をめぐらしているものは、県内でも鶴岡市大谷火葬墓（註1）や、川西町下小松火葬墓群（註2）にも例がある。大谷火葬墓の場合は、墳丘の高さが1mあり、塗を掘った土を盛り上げて墳丘を作ったとの推測もなされている。

大日塚遺跡からは、このほかトレンチ内の第II・III層中で土器が若干出土している。時期は平安時代後葉から近世まで長期にわたる。つぎに各土器毎の点数表を掲げる。

表-12 大日塚遺跡出土土器点数表

出土地点	須恵器	赤陶土器	黒色土器	中世陶器	近世以降の陶磁器	計
試掘溝(%)	0	4(4.6)	0	11(12.8)	71(82.6)	86(100)

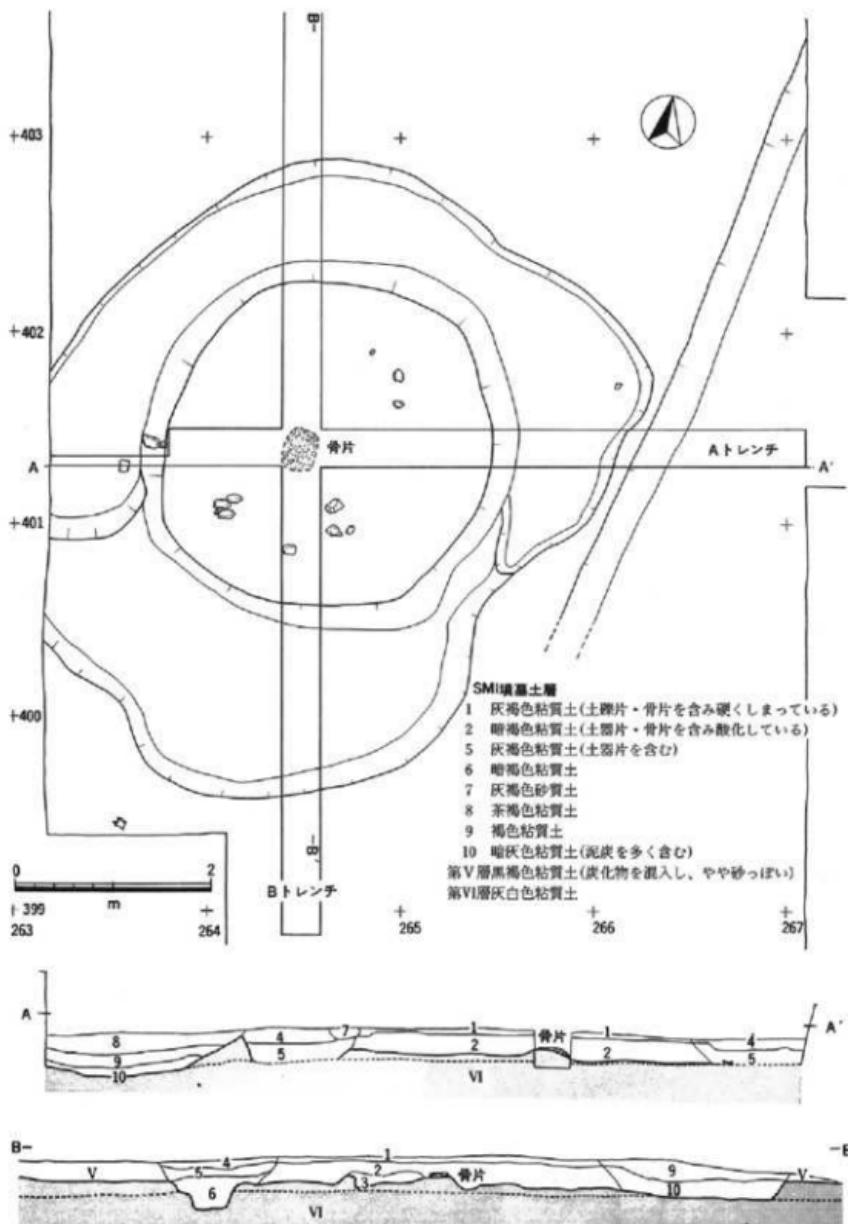
註1 川崎利夫1959「羽前水沢附近における中世墳墓と須恵器藏骨器の数例」山形考古1-6

註2 高橋堅治1956「小松の墳丘群考」羽陽文化32

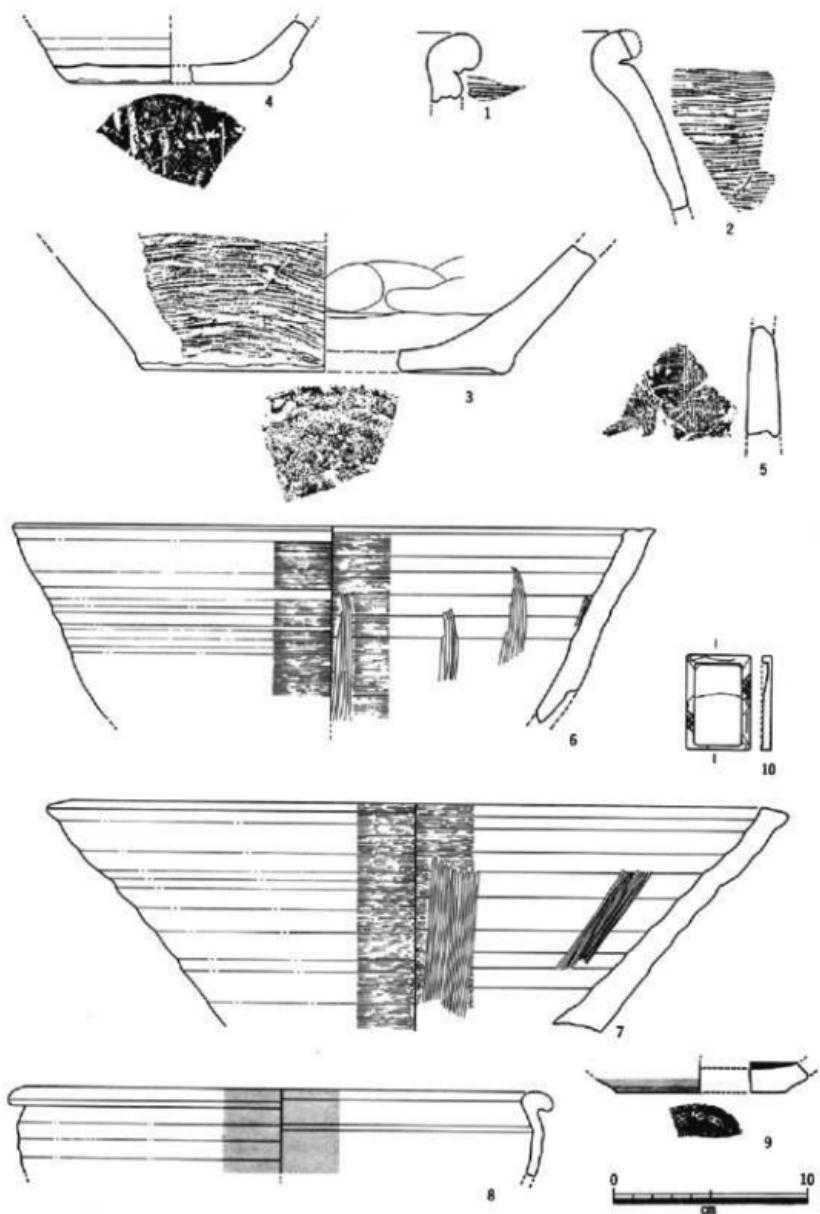
表-13 大日塚遺跡出土遺物種類表

器種	種類番号	計測値 (m/m)	形態・成形手法の特徴・他		出土地点・層位
			表面	裏面	
珠洲系陶器	1	器厚13	口縁部は、玉縁状で、「く」字状に外反。体部外面に、幅2m/mの条縁状横位のタタキ。焼成・胎土・良。黒灰色。		SM 1-Aトレンチ
	2	器厚7.3~9.8	口唇部欠損。体部外面に、幅5cmで28条の条縁状横位のタタキ、内面に径45mm/mの円形のアテ痕、焼成度。胎土に小釋を少量含む。灰色。		SM 1
	3	底径 (186) 器厚16	体部外面に、幅2.1cmに8条の条縁状タタキ。内面に3×3.5cmのアテ痕。底部砂底。焼成・胎土・良。赤茶褐色。		SM 1
擂鉢	4	底径 (100)	体部外縁横位のナデ。底面は使用のため磨滅している。底部は砂底か。焼成・胎土・良。白灰色。		SM 1-Bトレンチ
	5	器厚11.5~16	体部外縁横位のナデ。内面に幅22.5m/mで14条の浅い卸し目。焼成度。胎土緻密。外面部黒灰色。素地灰色。		表面探集
	6	口径 (330) 器厚13	口縁部で内窓気味に張り出し開く。外面に粘土紐巻き上げの起伏が走り、明瞭なロクロナデ。見込み部分にもロクロナデ。内面には7条を1単位とした櫛歯状工具で卸し目が施されている。4分の1の破片に6度の施文回数がある。焼成度。胎土は砂粒を含み緻密。暗灰色。14世紀代の所産か。		SM 1-Bトレンチ
鉢	7	口径 (356) 器厚10~18	口縁部で内窓気味に張り出し開く。外面に粘土紐巻き上げの起伏が走り、明瞭なロクロナデが見られる。口唇部はわずかに肥厚して外削ぎ状に面が取られている。内面の卸しは口唇部3cm下から施され、一單位2.4cm幅で9条の卸目で深い。約4分の1の破片で3条の卸目が見られる。胎土は砂粒を含み緻密。素地は赤茶褐色を呈し、酸化炎焼成である。14世紀代の所産か。		SM 1-Aトレンチ
古墳戸鉢	8	口径284 器厚4.5	体部が丸味を持ち内窓する。口縁部が玉縁状に外反し突き出す。体部外面に起伏が横走する。全面に淡黄緑釉が施されている。素地は緻密で、灰色を呈する。		263~404-II
青磁	9	底径 (88)	体部、見込み部に淡青緑釉が施されている。素地は緻密で、明灰白色を呈する。底部回転糸切り。		263~404-II
碗	10	長辺48 短辺33 厚さ4.5	小形長方形の碗。外縁に斜位の窓による条痕。裏面も窓による条痕が見られる。上面外縁に「×」字状の解底。粘板岩製。		SD 2-F1

* 計測値 () 内の数字は図上復元によるものである。



第40図 大日塚遺跡 S M I 墳墓



第41図 大日塚遺跡 出土遺物

VI まとめ

本書には、山形県教育委員会が昭和52年から54年度に実施した、酒田市上ノ田周辺の5遺跡の報告を掲載した。最上川下流の旧氾濫原より一段高い河間低地ないし三角洲上にあたるこれらの地域は、城輪柵跡周辺に比べて、従来不明な部分が多くあった。本章では各遺跡の調査成果をもとに、時期を平安時代と中世に分けて概説し、まとめとしたい。

1 古代出羽国と上ノ田遺跡

『続日本記』によれば、古代出羽国が建置されたのは和銅5（712）年のことになる。出羽国府は、奈良時代は秋田城に置かれといたとする説が有力であり、平安時代は酒田市域輪柵跡があてられている。城輪柵跡の政庁部分にあたる内郭は3期にわたる変遷が認められ、第Ⅰ期は9世紀前半、第Ⅱ期は10世紀後半中心、第Ⅲ期は11～12世紀の年代が調査者によって考えられている。

最上川右岸から日向川までの平野部には、城輪柵跡を中心として、おおよそ東西6480m（約9町）、南北7200m（約10町）の地割りが想定され、その中に地方官衙や掘立柱建物群が計画的に配置されたようである。

上ノ田遺跡は、城輪柵跡内郭から南に2400m（20町）、東に1440m（12町）の場所に位置し、寺院跡などの公的施設と考えられる八幡町堂の前遺跡の真南にあたる。本遺跡でもっとも注目されるのは、S B100建物跡とした桁行7間×梁行2間の身舎に東庇を持つ掘立柱建物跡である。柱穴掘り方の大きさが80～100cm、柱間が桁行・梁行ともに2.7m（9尺）等間で、桁行全長が18.9m、底部を含めた梁行全長7.8mを測る。この種の大きな建物は、城輪柵跡第Ⅱ・Ⅲ期の正殿および東西脇殿、八幡町八森遺跡の1号礎石建物跡、堂の前遺跡270号礎石建物跡など公的施設と考えられる遺跡からのみ発見されている。

上ノ田遺跡の遺構は、出土遺物の検討などから4つの時期に大別できる。第ⅠA期（9世紀中葉）は、本遺跡の発生期であり、S D401・417の東西の大溝とS K73・224・235・412土壙がこれにあたる。建物跡は未検出であるが、両大溝間の距離は外々で105mを示し、当初から東西約1町の区画があったことを推測させる。

第ⅠB期（10世紀前半）の遺構には、S F321井戸跡・S K1・310・541土壙などがある。第Ⅱ期（10世紀後半）は、掘立柱建物跡が明確な形で出現する時期である。S D401・417大溝 S B410・546建物跡・S A416柱列・S K238・248土壙などがある。S B400建物跡もⅡ期に入る可能性をもつ。

第Ⅲ期（11世紀前半）は、本遺跡でもっとも遺構がまとまって検出されている。S B100・

418建物跡、S A403柱列、S E285・501井戸跡、S K152・160・327・329・414土壙などがこれにあたる。城輪柵跡内郭では第II期（10世紀後半）以降遺構配置が整い、III期に大形化する傾向がみられ、本遺跡もそれと軌を一にする。

上ノ田遺跡の性格について連断はできないが、IA～II期の大溝やII期以降の建物跡配置などから、官衙などの公的施設の可能性が高い。

2 中世村落の成立

上ノ田遺跡にみられるように、城輪柵跡周辺で平安時代初め9世紀以降出現した遺跡は平安時代末葉12世紀以後忽然と姿を消すものが多い。これらの現象は、從来古代律令制の衰退とともに、城輪にあった国府庁も衰微の一途をたどり、周辺の官衙群や村落も12世紀頃には廃絶したものと解釈されてきた。この場合中世村落の多くは、いま板碑が分布するところや「館跡」が存在する近くに、あるいは「曾根」の地名を残すところを新しい生活の舞台としたということになるわけである（註1）。

しかし最近の調査では、酒田市豊原B遺跡や安田遺跡など古代村落の立地をそのまま繼承し、中世村落を営んでいた遺跡が幾つかみられるようになってきている。本報告で取り上げた柵掛遺跡や大日塚遺跡もその良い例である。この背景には近年の珠洲系陶器など中世陶器の研究の進展に負うところが多い。

大日塚遺跡では、14世紀代（南北朝時代）の中世火葬填墓が1基検出され、柵掛遺跡では、15世紀代（室町時代）の土壙墓7基と、時期的な限定にお問題を残すが掘立柱建物跡2棟が検出された。北境遺跡からも、遺構は認められなかったが珠洲系陶器が少量発見されている。豊原B遺跡の土壙から出土した珠洲系陶器大甕の時期や安田遺跡の珠洲系陶器も15世紀代（室町時代）にあたる。

安田遺跡や酒田市明成寺遺跡からは、室町時代頃と推定される木札に法華経や阿弥陀経文を墨書した柿経片が出土しており、写経の巧徳を願った仏教思想の普及を物語っている。柵掛遺跡の土壙墓群でみられた六文銭埋置の存り方も、当時の生活風習を知る好資料である。

ただし、これらの遺跡の時期が14～15世紀という中世でも後半に属するものであることや、遺跡の性格が、集落跡が少なくほとんど墓跡であることなど、問題点も多々ある。庄内地方の珠洲系陶器の集成作業によれば、量的には12世紀後半から13世紀代（平安時代末～鎌倉時代）のものが多いとされており、発掘調査においてこれらの時期をつなげる作業が必要である。また藤島町平形遺跡G地点や鶴岡市中京田遺跡のような中世の村落をどう促してゆくかは今後の大きな課題であろう。

（註1）川崎利夫1980「城輪柵周辺の諸遺跡」羽陽文化112

図 版

図版 1~13 上ノ田遺跡

図版 14~15 北境 遺 跡

図版 16~19 梶掛 遺 跡

図版 20~22 大日塚・土橋遺跡

図版1 上ノ田遺跡



上ノ田遺跡風景
(東から)



I次調査発掘風景
(南から)



発掘風景
(東から望む)

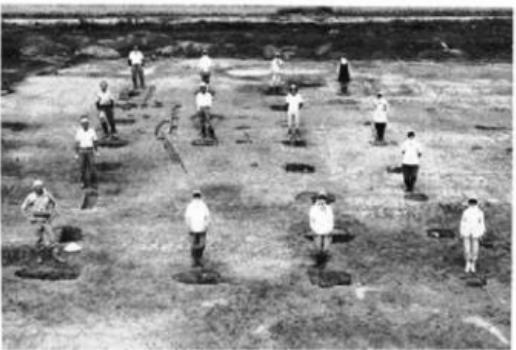
図版2 上ノ田遺跡



精査区西半近景
(南から)



精査区東半近景
(南から)



SB100建物跡検出状況

図版3 上ノ田遺跡



SB100建物跡全景（南から）



EB89柱穴断面



EB91柱穴断面



EB95柱穴断面



EB96柱穴断面

図版4 上ノ田遺跡



SE321井戸跡全景



SE321井戸跡近景(1)



SE321井戸附近景(2)



SE285井戸跡近景

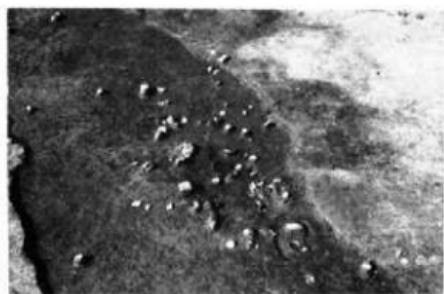


SE321井戸跡近景(2)

図版5 上ノ田遺跡



SD401大溝全景（南から）



SD401大溝土器出土状況



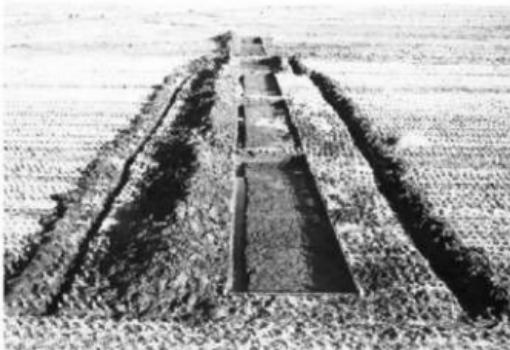
SK412土壤須恵器叢出土状況

図版6 上ノ田遺跡

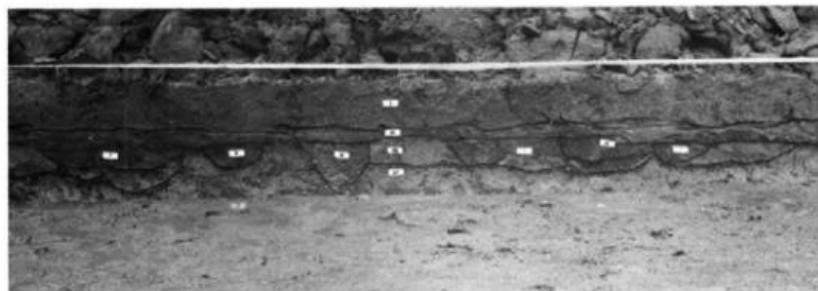
Ⅱ次調査発掘風景
(南から)



55~85-120グリッド全景
(西から)



土層断面



図版7 上ノ田遺跡



精査区近景（南から）



EB526柱穴断面



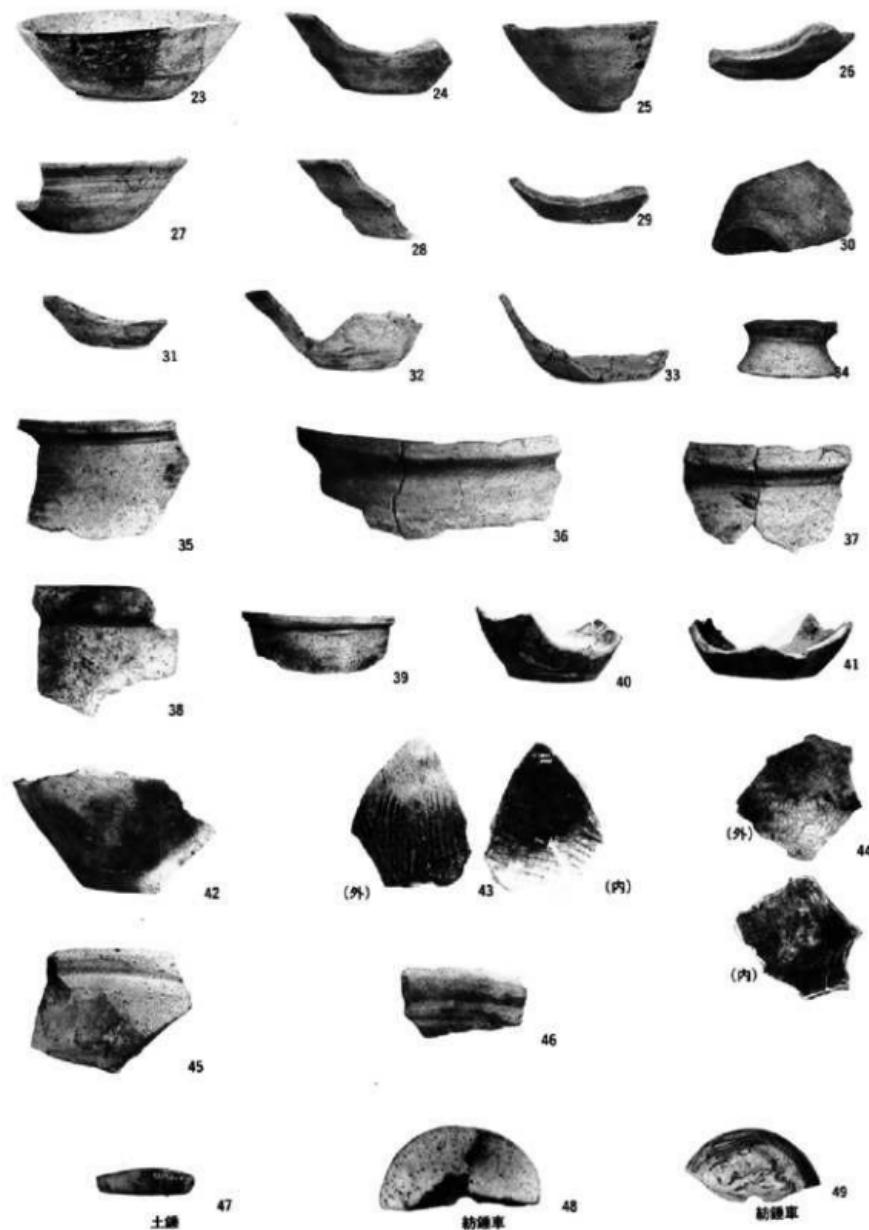
SE501井戸跡全景

図版8 上ノ田遺跡



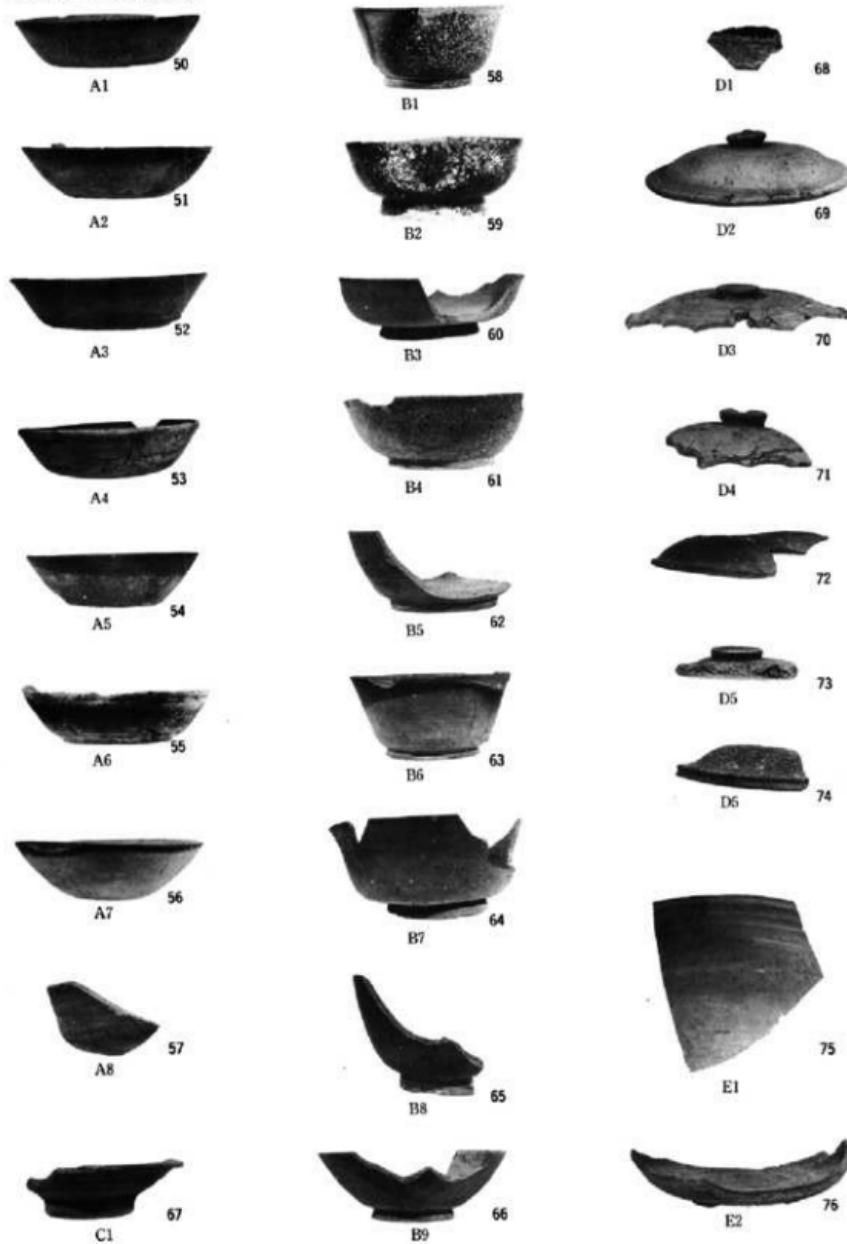
上ノ田遺跡出土土器 須恵器・黒色土器

図版9 上ノ田遺跡



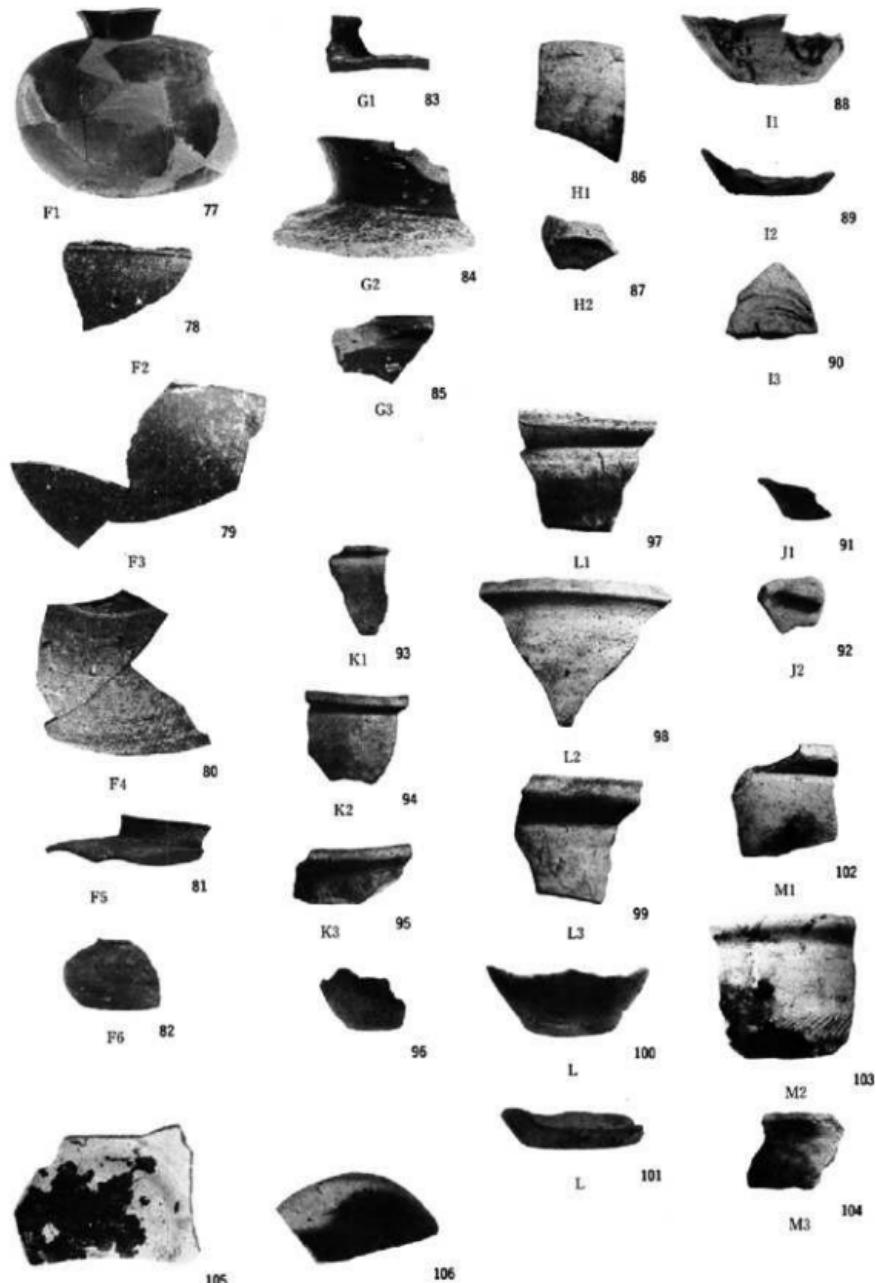
出土土器・土製品

図版 10 上ノ田遺跡



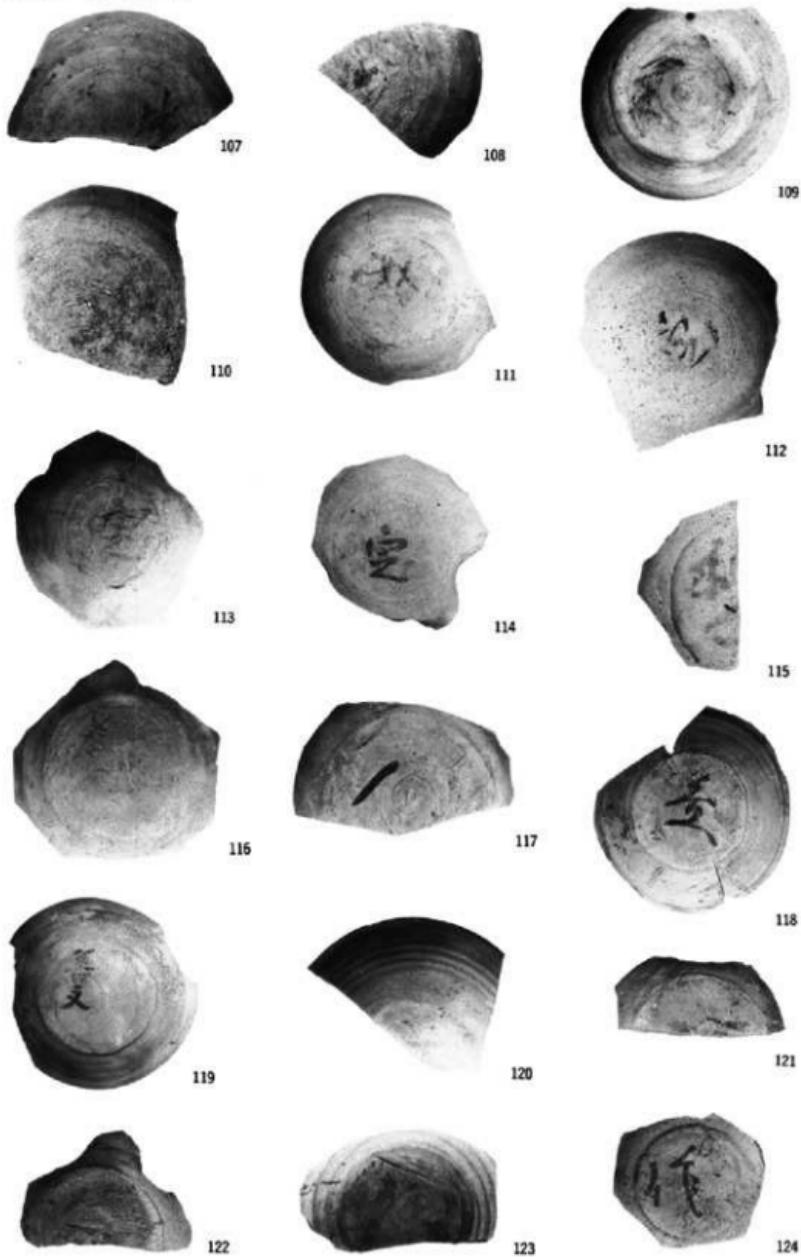
SD401大溝出土土器 須恵器

図版11 上ノ田遺跡



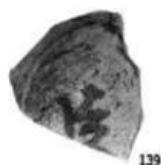
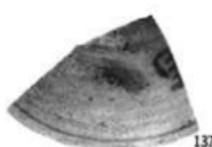
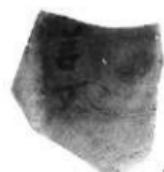
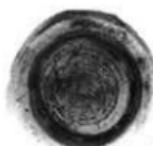
上ノ田遺跡 SD401 大溝出土土器 須恵器・黒色土器・赤焼土器

図版 12 上ノ田遺跡



上ノ田遺跡出土墨書土器 (1)

図版13 上ノ田遺跡



上ノ田遺跡出土墨書き土器 (2)

図版 14 北境遺跡



北境遺跡遠景(東から)

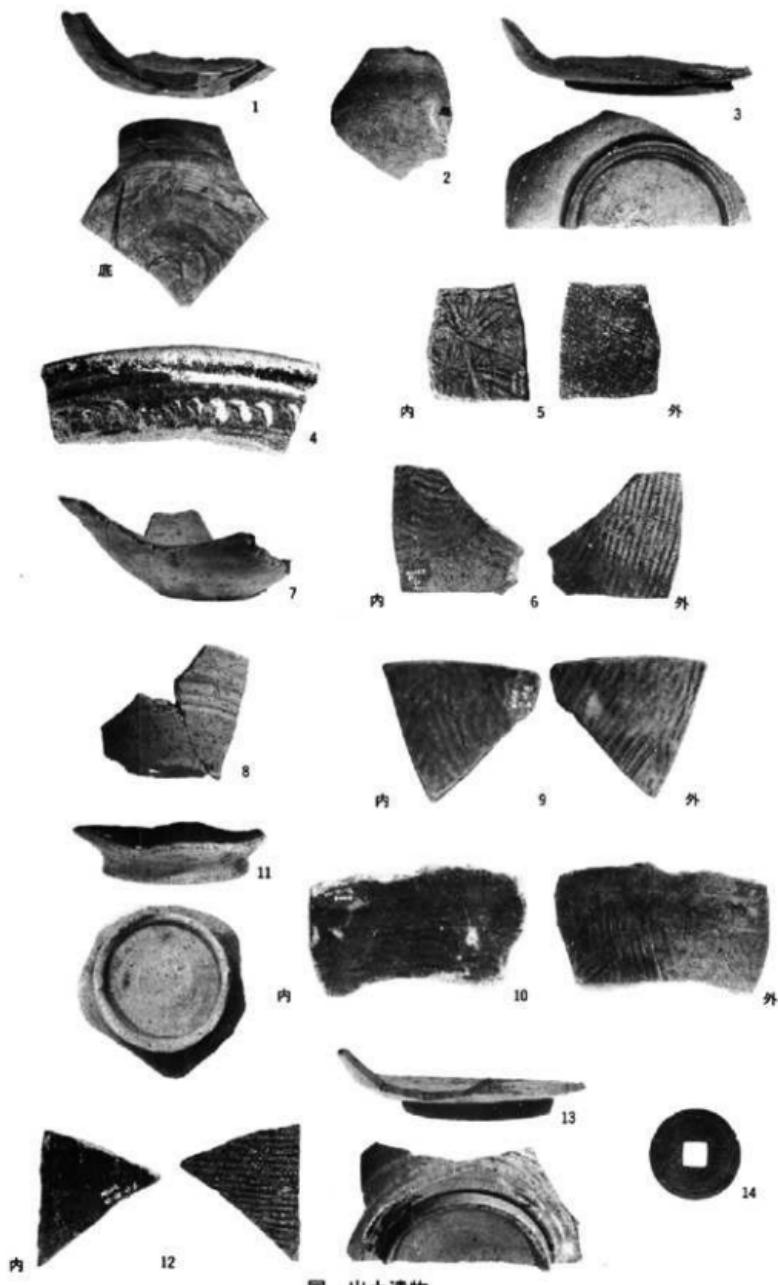


41-60-69トレンチ全景



土層断面

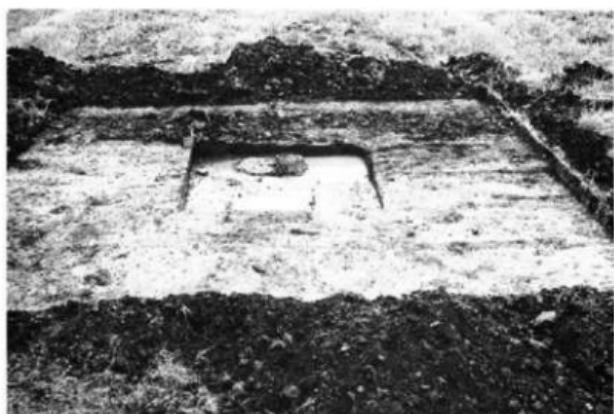
図版 15 北境遺跡



図版 16 棚掛遺跡



棚掛遺跡遠景(南西から)



XIV・XV-349-354グリット全景

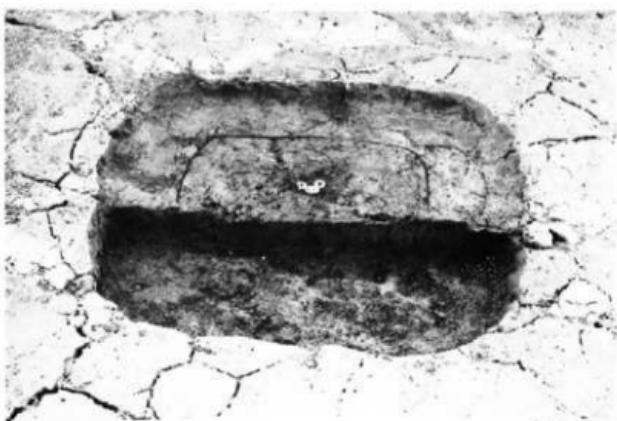


XV-251・252グリッド土壤群全景

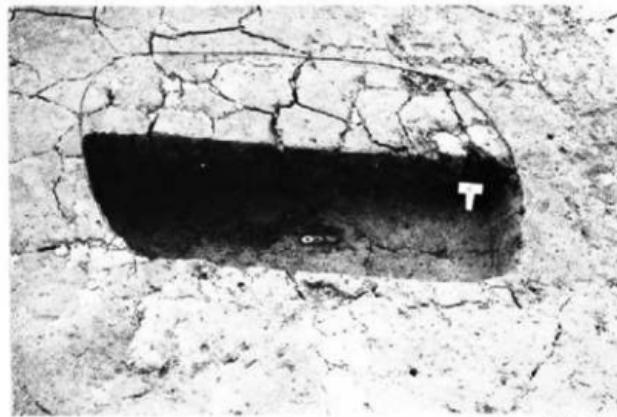
圖版 17 桶掛遺跡



SH1・2・7・8土壤基近景

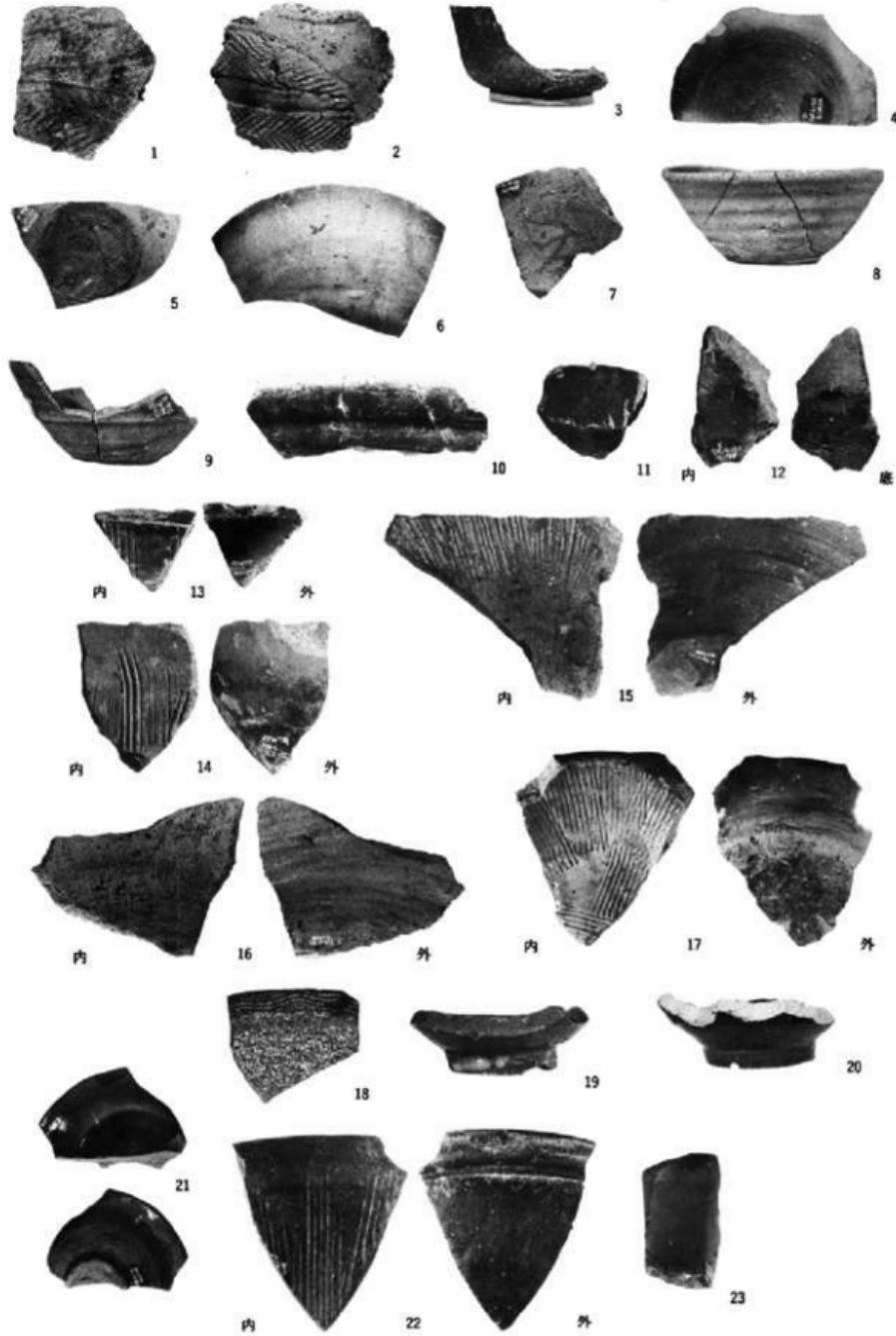


SH3土壤基



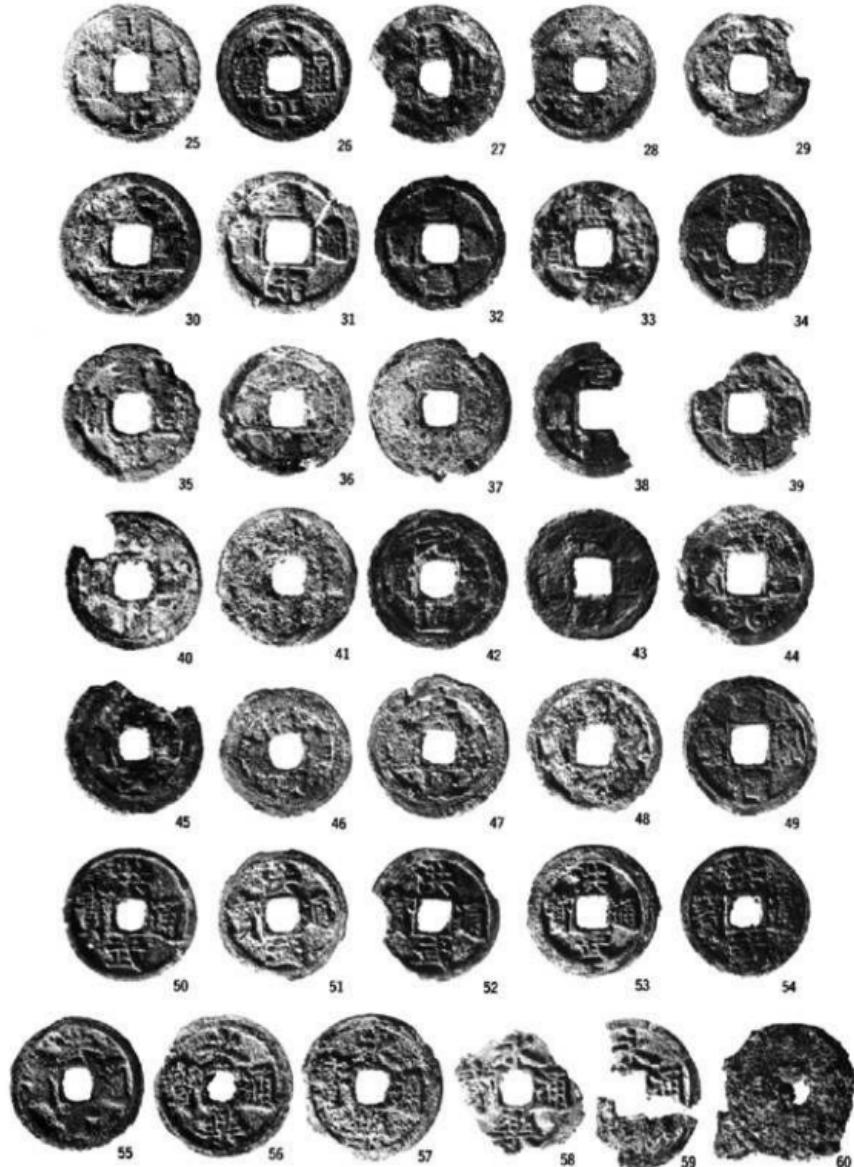
SH4土壤基

圖版 18 桶掛遺跡



出土遺物

図版 19 横掛遺跡



出土古銭 (S = 1 / 1)

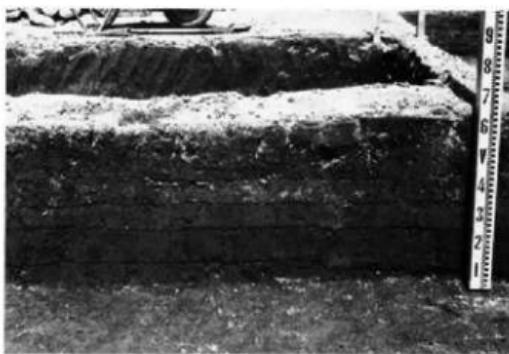
図版 20 大日塚・土橋遺跡



大日塚遺跡遠景
(北西から)

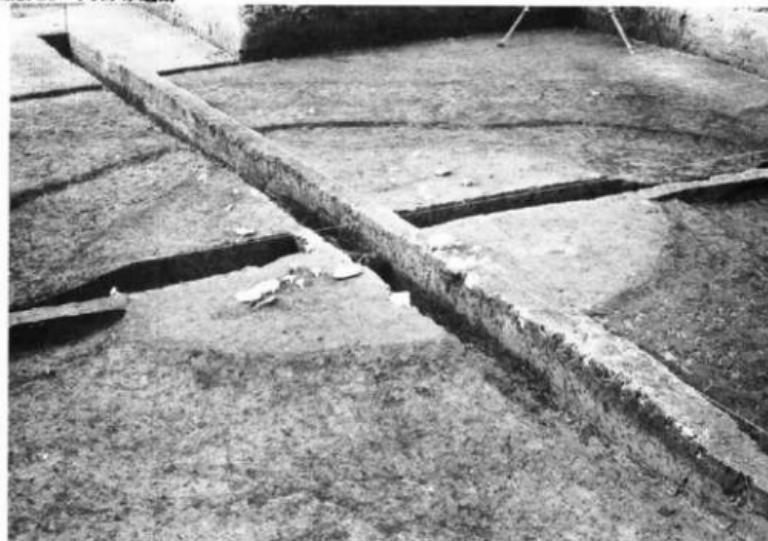


土橋遺跡遠景
(南西から)



大日塚遺跡土層断面

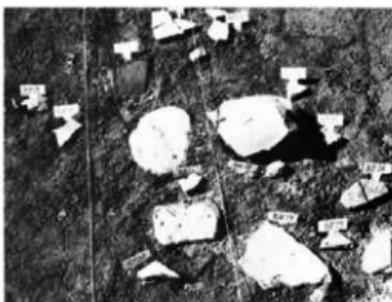
図版21 大日塚遺跡



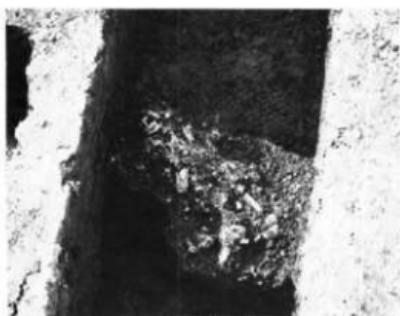
SM1墳墓全景（南から）



同検出状況



同遺物出土状況

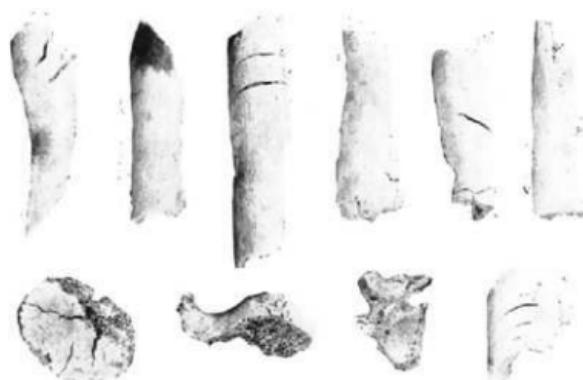
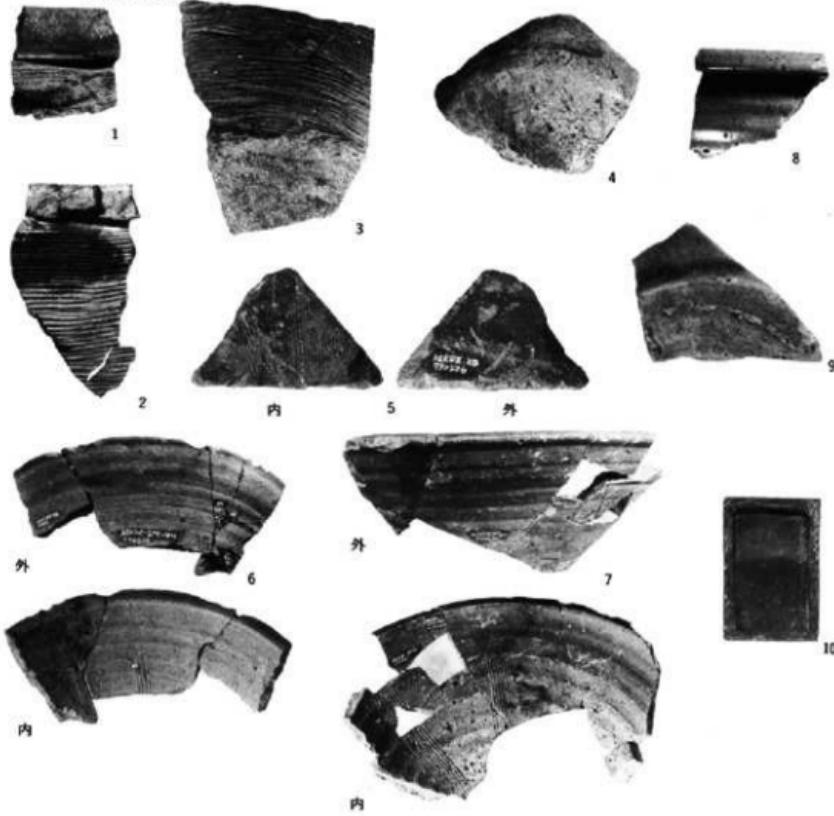


同人骨出土状況



同土層断面

図版22 大日塚遺跡



出土遺物

SM1 墓出土人骨片

山形県埋蔵文化財調査報告書第52集

上ノ田遺跡（1次・2次）

北境A・B遺跡

樋掛遺跡

大日塚遺跡

土橋遺跡

発掘調査報告書

（昭和57年3月25日印刷）
（昭和57年3月31日発行）

発行 山形県教育委員会
印刷 梶大風印刷